

---

# バカとチキンと召喚獣

チキン執事

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとチキンと召喚獣

### 【Nコード】

N9548V

### 【作者名】

チキン執事

### 【あらすじ】

俺の名前は坂町近次郎：少しだけ変な『体質』と『友達』と『家族』と……………って変な事ばかりじゃん！  
そんな可哀想でチキンな主人公とバカで鈍感で優しい主人公が送る学園ラブコメデュー。

この二つの作品を交ぜたのは作者の趣味です！  
処女作なので文脈も駄目だろうし矛盾点も多いでしょうがそれでもいいと言うひとは是非読んでください。

※この小説のmain sideは近次郎です。  
なのでsideと書かれていない時は近次郎なのでご了承ください。  
さい。

そして、バカテス都まよチキでの時間軸がバラバラです。（学校での行事など、イベント）

## バカとチキンと勘違い（前書き）

ではでは…お読みください!!

最初に言っておきますが主な主人公はジローになりそうです!!

## バカとチキンと勘違い

……俺の名前は坂町近次郎、皆からはジローと呼ばれている

別にこれといって変わった事が出来るわけではないし学力も普通だ  
ただ…俺の「友達」が変だったり、俺が少しだけおかしい、いや、  
常識とかけ離れた家族を持っていると言うだけ…かな

さて…ここで簡潔な自己紹介も終わったことだしここで一つこの学校について説明しよう

この学校、「文月学園」ではテストの点数によってクラスを振り分けられるんだ

点数が高ければAクラス、点数が結構高ければBクラスとこんな感じでクラスがFまで分類される

ついでに言ってしまうと……俺は「最低」のFクラス。

おっと!!勘違いしないでくれ、俺は自分で言うのもあれだが…そこまで頭が悪い訳じゃないんだ

多分…DかC位だろう、うん。

え?じゃあ何でFクラスに居るかって?

……まあ言ってしまうえば怪我のせいだな

しかもその怪我の理由も他にある

その理由とは…俺の幼馴染みだ

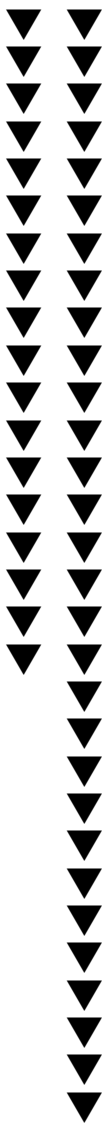
俺の幼馴染みには吉井明久という今では「悪い意味で」とても有名な奴なんだ

その悪い理由とは…「観察処分者」というこの学園で一番人気不名誉な称号があるからである

しかもその幼馴染みが校内初の観察処分者

この称号がどんな意味なのかは…まあ今度説明しよう

そしてあの事件はこの幼馴染み…もとい明久が、俺の家に泊まりに来たときだったんだ。



ジリリリリリリリリリ…

……うるせえ

ジリリリリリリリリ…

……あーしんどい…もう朝かよ…何か体も重いし…

ジリリリリリリリリ

「うるさい!!」

俺は思わず衝動的に目覚まし時計を壁にぶん投げた

当然目覚まし時計が壁に勝てるわけもなく壁にぶち当たり様々なパーツを飛び散らせながら地面に落ちた

「……やっちゃまったよ」

これで通算五つめのご臨終である

これはまた「アイツに」何か言われるなあ…人の体は散々壊すくせに

ドタドタドタドタ…

そして運悪くそこにあいつがやって来た

ドバンツ!!

勢いよく扉がひらかれる…扉が壊れないか心配だな…

「グッモーニン!! オハロー兄さんとあきに…い…」

このまさに天真爛漫を体現したかのように元気でうるさいこいつの名は坂町紅羽…実際かなり疑わしいが俺の妹である

だがなんだ？少し様子がおかしいような…

「……ねえ兄さん？兄さんはあき兄と何してたのかな？」

何いってんだ？こいつは。昨日なら俺とお前と明久とでゲームやってたじゃねえかよ

「何って…お前と明久とでゲームやってそのあと寝ただけだが？てかお前も一緒に……………」

その瞬間…こいつが何を言いたいのかが…分かった

ベッドの上に居たのは、俺。だが

俺のうえには幼馴染み…つまりは…明久が寝てやがった

しかも服装がかなり乱れている

実際…俺も第三者だったら勘違いしそう

よって、妹は…

「……………ねえ兄さん？」

「ちょっと待て紅羽…お前は今凄まじい勘違いをしている」

「にやはは…なんのこと言ってるのか分かんないなあ」

しゃべり方は普通…でもね紅羽…何で君の握っているドアノブは変形してんの？



「おい待て：俺は今日テストなんだ！！今日怪我なんてしたら俺は最低クラスに行くことになるぞ！！」

「それもそうだね：分かった：」

良かった：分かってくれ――

「痛覚の神経全部切ってからにしてあげるよ」

それは全くもって根本的解決にはなっていない  
そして寧ろ普段より酷い

「覚悟は良い？兄さん？」

そんなときだった

「あ、あれ？ここは：」

救世主が舞い降りた

「お、おい！！明久！！はやく弁解しろ！！このままじゃ俺は学校に行く前に親父と再会してしまう！！」

「え？あ、ああ！！」

明久はあまり状況を飲み込めていない様子だが俺の気迫に押されて  
だろうか？何とか分かってくれたらしい！！

「ち、違うんだよ！！これは！！落ち着いて紅羽！！」

そうだ！はやく行ってやれ！！

「これは――援助交際なんだ」

場が凍った

## バカとチキンと勘違い（後書き）

初めての小説です！！

なんかワクワクしてきました！！

これから出来るだけドンドン更新をしていきますのでどうぞ宜しくお願いします！！

## バカとチキンとプロレス技（前書き）

二回更新です！！どうぞっ！

## バカとチキンとプロレス技

「これは――援助交際なんだ」

は？

イマコイツナンツツタ？

「え、えええ援助交際い！？」

あゝ駄目だ：紅羽が今の言葉で完全にノックダウンしやがった

まっ：こっちからしたら嬉しいけど

「あれ？今僕使い方間違えた？」

「ああそうだな：というか逆にどうしてそうなったかご教示していただきたいんだが？」

「え？だって今日僕の家が家賃滞納でなんにもできないから聖典（エロ本）をあげる代わりに家に止めてって：これって立派な援助交際じゃない？」

そういう事か

「お前にしてはまだましな間違え方だが何でそんなとき誤解を明らかに招くような言い方をするんだ？」

ぜつつたい頭が悪い、悪くない以前の問題だと俺は思う

「まあ誤解は解けたみたいだし良いじゃん」

「うん、解けてないよね!? 明らか誤解は深まってるぞ!？」

それはまるで底無し沼のようにな!

「…………兄さん…」

ヒィ!! さっきので落ちたかと思ったら更に暗黒面になってやがる  
!!

「まっ、待ってよ紅「あき兄は黙ってて? (ニツコリ)」…………イエ  
ス…ユアハイネス」

明久弱っ! てかここでルルー○ユ! ?

「さあて兄さん…お仕置きだよ…」

俺の弁解など耳にも届かない

ガシッ!! ミシミシ…

「いたあああ! ? 待て紅羽!! 肩を壊すのはやめてくれえ!!」

「何言ってるの? 私はただこれから技をかけるために肩に手をおい  
てるだけだよ」

いっくよおー…その言葉が合図だった

「アンクルロック…」

メキメキ…!

「にぎやあああああ」

「STF」

メキメキン…!

「いつもよりっ……威力があ…」

e t c. e t c.



……こうして俺は誤解のせいで…いつもより威力が数段高い攻撃をくらってしまったせいで…骨折を三カ所してしまい、やむなく病院送りとなった

こうして俺は晴れて明久と同じクラスだよ

え? 何でこいつと一緒にだとわかるかって?

明久は

——学園一のバカだからな

さて…こんな地の文の会話なんてそろそろやめて…我が文月学園に入るかね

「お早うございますてー…西村先生」

学校の敷地内に入り最初に出会った先生はこの人西村先生

「おう、お早う坂町それと今、鉄人と呼ばなかったか？」

「ははっそんなこと言うわけないじゃないですか」

この人は見た目もムキムキで趣味もトライアスロン…そんな所から  
渾名は「鉄人」

生徒からは生活指導の鬼と恐れられている

そしてこの人と俺とは何度か小さい頃に会っている

「そうか…なら良いが…所で坂町…あの人は…朱美さんは元気でや  
ってるか？」

そう…その会ったことがあると言う理由が「母さん」

坂町朱美である

この人は少し前までテレビで騒がれるほどの女子プロレスラー  
ついた渾名は「鮮血の女王」

少し前まで…と言うのは誰かに負けたから…と言う訳じゃない

母さんがプロレスラーを止めた理由は



強すぎるから、である

なんとも張り合いが無くなってつまらないから辞めると言うことを言い出し今は違う国に居る

この前の手紙には、

インドで虎と戦った。と書いてあった

おかしい、じぶんの家族ながらおかしい

突っ込めるもんなら突っ込みたい

だが、生憎俺の家はそんな優しい家庭じゃない

弱肉強食

まさにこの四文字熟語が体现してくれている

まあこの話もおいおい話してくよ

「…元気だと思えますよ…この前の手紙にはインドで虎と戦ったって書いてありましたから」

「ハハッ!!あの人ならきつと勝ったんだろうな!!……おっと、長話が過ぎたな、ホラ受けとれ」

そうして俺はひとつの封筒をもらい受ける

「はあ…見なくても分かるところが少し悲しい」

「だなあ…まあ頑張れ…「きつと大変な事が起きるだろうからな」」

少しだけ意味深な言葉…大体意味は分かる

「はい…じゃあ俺は我がFクラスに向かわせて頂きます」

素晴らしい廊下を歩いていった…

## バカとチキンとプロレス技（後書き）

えーと鉄人と坂町朱美との接点は今度プロフィールみたいなので出そうと思っています

## **バカとチキンと格差社会（前書き）**

本日二度目の更新です…どうぞっ!!

## バカとチキンと格差社会

「なにこれ…」

俺の目の前に存在して居たのはAクラスという名の高級ホテル

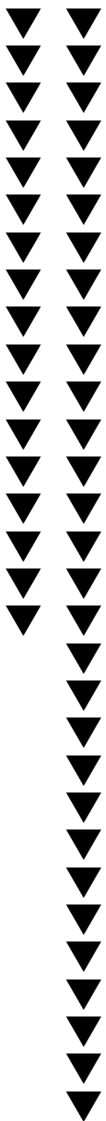
いやいや…おかしいでしょ…

なんだ？リクライニングシートにノートパソコンか？あれ？うげっ  
！！冷蔵庫までついてやがる

「はぁ俺も怪我なんてしてなきゃここにこれたのかもな」

なんて言うあり得ない妄想を抱きつつも現実を見つめ直す

「はぁ…俺もこんなところで油売ってないでさっさと行くか」



「なにこれ…」

さっさとは違う意味で驚く俺…何故なら目の前に存在して居たのはFクラスと言う名のプレハブ小屋

…いや、下手したらプレハブ小屋より酷い

なんかとてもUターンして帰りたい気持ちをグッとこらえ教室に足を踏み入れた

………うん、やはり外観と比例した内装だな…卓袱台にすきま風に蜘蛛の巣ね…オーケーオーケー  
………当校拒否しよっかな…

そんな事を考えていると………

「あら？ 貴方は確か…坂町近次郎君…だったかしら」

なんていう声が聞こえた。誰だ？ と思いつとそちらに顔を向けると…

艶やかな黒髪をツーサイドアップにした少女がこちらを向いていた…

こいつは…確か…あ！

「お前は涼月奏！？ でもなんでこんなところに居るんだ！？」

そこにいたのは涼月奏……こいつがここにいるとは驚いた…

「あら？ いたらおかしいの？」

ああおかしいさ！！ 何でお前みたいな頭脳明晰で文武両道なパーフェクト人間様がこんな人生の最底辺みたいなクラスに存在してるの！？

「ふふっ…まあそれもそうね…私はただ熱を出してしまっただけよ」

そういう事か…あれ？ でも何で…

「なあじゃあ何で「スバル様」まで居るんだ？」

そう、そこにいたのは涼月奏だけではない、その涼月奏の「執事」  
近衛スバルも一緒に鎮座していた

近衛スバル：と言うのは涼月奏の執事、今時執事！？と思うかも知れないが現実存在していた

そしてその近衛スバル……通称スバル様はとても顔が良く美少年として涼月奏、霧島翔子と共にとても人気である

「ああスバルの事？この子は「お嬢様がお倒れになったのに学校になんて行けませんっ！！」て言い張るから仕方なくね」

「そ…そっか…」

な、なんなんだ？この気まずさは…どうすれば、と言うときだった

「お嬢様、少しお花を摘みにいって参ります」

と言い近衛スバルがFクラスから出ていった

……………あー…そう言えば俺も朝から腹の具合が悪かったんだ…よし…トイレ行くか…

後日談だが…あのとき俺がトイレにいかなけりゃ「ああ」はならなかった…のかも知れない

## バカとチキンと格差社会（後書き）

はいっ！！ようやく涼月さんとスバルを出せました！！

これから書くのが楽しみです！！

ではではつぎの更新日にまたお逢いしましょう



## バカとチキンと男装執事（前書き）

どうも…四回目の更新となりますが…自分の文才のなさに驚くばかりです

どうか…どうか！！改善案などをのせてくださると嬉しいのです

えーと…はい日本語が大変おかしくなりました。

ではどうぞー！！

## バカとチキンと男装執事

ぐう…腹が…くそっ…思い出した瞬間痛くなるなんて最悪だ

そう一人ごちに悪態をつきながらも廊下をはや歩きで移動する…

「……………よし、着いた!」

即座にトイレに入り入り口からすぐ目の前の扉を勢い良く開けた

その瞬間…腹の痛みなんて消えた…と言うかそんな事を気にしないぐらいの衝撃的光景が目の前に広がった

近衛スバルが…トイレをしていた…

ここまでは「あっ…わりいわりい間違えてしまいました。はい…すいません」

ですんだらう…きつと

しかし、俺の目の前に居るスバル様は…何故か……………

何故か「女の子用」のその…いわゆる…パンツを身につけていた

うわぁお…可愛い猫ののプリントまで入ってやが……………はっ!?

「ししし失礼致しました!」

ボタン!! また勢い良くとびらを締める

待て待て待て待て………落ち着け…落ち着くんだ…俺

ヒツヒツフウ…ヒツヒツフウ…よし、落ち着け落ち着け…

こんなふざけた事を頭でやりながやも足早に事件現場から離れていく  
どうやら追ってきてはないらしい…大方、余りに突然すぎて固まっ  
ているのだろう

どうしよう…いや、どうしてあいつは女物の下着なんて身に付けて  
るんだ？

どうして………は!!

その時…全ての謎がとけた

そうか…そうだったんだ…あいつは…近衛スバルは…

「変態だったのか…」

そう、やつは変態だったんだ…これなら女性用の下着を付けている  
理由も納得納得

よし…謎もとけたことだ!! Fクラス帰ろう

そう思いクルッと回れ右をしてFクラスに向かおうとしたその時だ  
った…

「お前…僕のパンツ…見たか？」

透き通るようなアルトボイス…それは、真正面から聞こえた

こんな声に聞き覚えはない……だが、この話にはかなり聞き覚えがある

今この状況でこんな話を吹っ掛けて来るやつはただひとり

学園の貴公子…近衛スバルである

「坂町近次郎…確かこんな名前だったはずだ…」

「もう一度問う、お前は僕のパンツを見たか？」

いってる内容がアホらしいが目の前の人間の顔を見ると笑うに笑えない

「さ、さあなんのことだ？ おお俺はなにも見てないぞ」

とにかく嘘をついてこの場から逃れようと頭のなかで決めた

「そうかそうかあんなに凝視してたのにみてないって言うのか」

いつもにまして冷淡な声…心が折れそうだ

「……そろそろ楽になれ…見たんだろう？ 目に焼き付けたんだろう？ 僕のパンツが見たくてあの扉を開いたんだろう？」

「誰がお前のパンツ何て見たいと思うか！ てかあんなお子さまパンツ見たって嬉しくねえわ！！」

「…………悪かったな…お子さまパンツで…所で何でパンツを見て無い筈のお前が僕のパンツの柄を知ってるんだ？」

！しまった！！誘導尋問か！！

「坂町近次郎…」

「な、なんだ？」

そちらを見ると近衛スバルはニツツコリ笑ってやがった

しかし……

シュ…ドゴォ！！

「あがぁ！？」

これは…エグい角度で入ったな……ヤバイ…胃の中から何かが強制召喚されそうだ…

「驚いた…今のは最低でも気絶、悪ければ吐血だってあり得る一撃だったのに」

そうだな…「普通」の人間なら今近衛がいった通りになっていただろう

だが俺の場合、今くらいのダメージなら家庭の事情で五歳の頃から食らってる

「…………仕方ない…お前…消させてもらうぞ」

「なに言ってるの！？お前！？」

ヤダよ俺！？パンツ見たせいで消されるなんて間抜けな理由！！

「大丈夫だ…消すと言ってもお前じゃない、お前の記憶だ」

なんだ…そんないい方法があるなら先に言えよ…俺もこんな記憶は持っていたくもない

ん？でも…

「な、なあ近衛さん？記憶ってどうやって消すの？」

「殴る」

「は？」

「ボッコボッコにしてとにかく記憶が失われるぐらいまで殴り続ける。それが執事の記憶消却法だ」

「執事関係ねええええ！？」

「だから大人しく殴られろ！！この執事ナツクルで！！」

……………どうでもいいけどさあ

「お前ネーミングセンス無いんだな」

執事ナツクルって…ダサすぎる

「んなっ…おおお前！！僕の執事ナツクルを馬鹿にする気か！！  
ほ、ほら！！かっこいいだろ！！執事ナツクル！」

「いやダサイよ」

「くう…こ、こうなったら…僕の必殺技…「エンドオブアース」を  
食らわしてやる」

「スケールでえええええ！？」

今思ったが…俺のなかのスバル様像は完全に失墜した

「……はあ…」

俺は静かに息をはき、構えをとった

「むっ…ついにやる気になったか…」

「生憎、俺は殴られるのは趣味じゃないんでね」

「行くぞ！！」

そういい俺は駆け出した

スバル様とは逆の方向に

「なっ！？お前！！逃げる気か！？」

生憎殴るのも趣味じゃない

にげろにげろ！！あ？なに？今頃もう自己紹介始まってる？知るかつ！！

俺は近衛が見えなくなった瞬間に横にあった理科室に入りバリケードを組み立てた

ふう…これでちよつとは「ドゴオン！！」……………終わった

理科室特有の匂いより死の香りが漂う……ヤバい…もう後がない…

そんなときだった

さっきの衝撃だろう近衛の後ろにある棚の上の瓶が近衛の頭に落ちそうになっていた

「近衛っ！！あぶねえ！！」

そういい俺は近衛に抱きつくようにして横っ飛びした



## バカとチキンと男装執事（後書き）

やっぱり思うように書けません……早く明久たちとクロスさせたい  
よおおおお！！

これじゃあまよチキ書いてるだけだよおお！！

## **バカとチキンと発覚問題（前書き）**

ようやく五回目の更新です

誰か…お願い致します…早くバカテスとクロス出来るような案を…  
教えて下さい！！

## バカとチキンと発覚問題

「近衛っ！！あぶねえ！！」

俺の体は考えるよりも先に、近衛のほうへ向いていた

ガシャン！！

後ろから何かが砕け散る音が響きわたる

どうやら近衛には怪我は無いらしい…良かった…

俺は安心し近衛から離れようとすると…

「ん…うん…」

苦しげに呻く近衛スバル…

てかこいつホントに可愛いな…これで女って言われても納得するぞ

なんか匂いも女の子っぽいいい香りがするし掌には吸い付くような  
柔らか…ん？

そこで、気付く…違和感に

何故？…何故？

——何故男に…近衛スバルに胸があるんだ？

「キヤアアアアアア！！」

したから聞こえたまるで女の子のような甲高い悲鳴

＋アツパーカット

「ごふう！？」

俺の体は綺麗に宙を舞い、運良くガラスの破片の間を通り抜けるような形で地面に堕ちた

「痛てて…」

殴られた顎を擦ろうと手を顎にあてると

ヌルッ…

生暖かいものが俺の顎を濡らしていた

この感覚には覚えがある…鼻血だ…だが…何で女の子に触れた訳じゃないのに俺は鼻血を出している？

そんなのは…分かりきっていた。

「近衛…お前…女の子なのか？」

聞かなくても分かりきったこと…だが、本人の確認を取るべく、俺

は聞いてみた。

しかし返ってきたのはその答えではなく

「殺す」

一方的な虐殺の予告でした

ヒィ!! と情けない声をあげそうになる…今の近衛は、怖い。

無表情で真っ赤な消火器を持っているところが…

「待て!! さっきのはわざとじゃない!! お前を助けるためだったんだ!!」

「ほう? 女の胸を触ることが助けるためなのか…なんだお前!! 胸を揉むと大きくなるとか信じているのか!? 悪かったな!! 小さくて!!」

ううっ…と恨めしげに呻く

「とにかく…お前みたいな変態はこの世に存在してはならないんだ…消えろ」

手に持っている消火器を高く振り上げる

「黙れ…今すぐ……………死ねえええええ!!」

「ちよっ!?! らめえええええ!!」

ゴッ！！

そんな音を最後に俺の意識は完全に刈り取られた



ズギン…

「うっ…あれ…ここは」

頭の痛みが激しい…なんなんだこれは…

とりあえず眼球だけを動かして周りを模索する

どうやらここは保健室のようだ…10日ほど前に来たので覚えている

「あーあ…よし、起きるか…」

痛む体に鞭を打ち身体を起こす

ジャラ…

そんな音が当たり一面を支配した

「ジャラ？」

俺はその音が気になりそちらに顔を向けてみた。すると…

「何でここに手錠がついてんの!？」

そうなのである…しっかりきっちり俺の左腕とベッドの柱が繋がっていた

え?なにこれ?俺はこんなプレイ所望した覚えがない

とりあえず手錠の着いていない右手でシーツをひっぺがし…ってキヤアアアアアア!

俺はもはや声にならない悲鳴を上げた

何故なら…シーツを捲ったところで、あの涼月奏が眠っていたからだ

…普通の男子高生ならば喜ぶだろう…だけど、俺はそうはならない…否、なれないのだ

とにかくこんな至近距離にいれん…うっ…鼻血が出そうだ…

「う…んう…あら?坂町君起きたの?その手錠痛くない?サイズ的には問題ないはず何だけど…」

え?…今こいつとんでもねえ事言わなかったか?

「な、なあ涼月?まさかとは思うが…この手錠…お前が、やったの?」

「そうよ…そして貴方は…私に改造されて我々ショッカーの一員となったのよ!!」

「なっ!?! なんだってえ!?!」

「改造人間となったあなたはもう普通の人間とは違うの!! さあ試しに「変身っ!」って叫んでみて、貴方の秘められた力が開放されるから!!」

涼月が真剣な顔で言う

「……わ、わかった、行くぞ…変身!!」

シーーン

変身って言ったらシーーンってなった。

変身とシーーン…ふふ、笑えねえよ…なに叫んでるんだよ俺はああ!!

「く、ふふふ。変身……。高校生にもなって変身って……。あはははは!!」

冷静になって考えなくても解るがどうやら俺は騙されたらしい

「……………」

こいつはホントに涼月奏なのだろうか? いつもとは印象がまるで違う…



「あ、あのー涼月さん？何でこんなものを俺の腕に？」

「それはね？貴方がスバルの秘密を知ってしまったからよ」

「ーッ！？……………やっぱりか…」

大体は予想できた。こいつがいた時点で何となく分かってたんだよでも…何で？

「でもなんで近衛は男装何てしてるんだ？」

それが何よりもの俺の疑問、何故近衛はそんなことしてまで執事をやってるんだ？

「んー。強いて言うなら家庭の事情ね」

「家庭の事情？」

「そう、あのこの家は代々からこの涼月家の執事をしていてね」

「何で女の近衛がやるんだ？んなもん他の兄弟がやればいいだろ？」

「いたらね？でもあの子は一人っ子よ。だから執事をやってるのよ」

「そっか…」

「そして私の父、つまりは学園の理事長が、スバルが執事でいるための条件を出したの」

「条件？」

「そうよ…そしてその条件は三年間誰にも女だと知られずに学園生活を全うすると言うもの…」

「ってことはつまり…」

俺が近衛の正体を知ってしまったから…

「そうスバルの正体を貴方は見てしまった…つまりスバルは……」

「執事をやめなければならぬ…」

「……スバルはねこの涼月家の執事であることに並大抵じゃない拘りを持っているの…だから貴方を口封じしようとしたのね…私の執事が迷惑かけたわ…」

ここまで深刻になってくるとこちらが悪くなくてもなんかすごい見ってしまったことに罪悪感を感じてしまう…近衛はどいったんだろう…ひきこもりになってなきやいいが…

「なあ…近衛は今何処に居るんだ？」

そんなことを聞くとスバルは涼月は上品にクスツ…と笑い

「あら？ジロー君スバルを心配してくれるの？でも大丈夫よ…彼もここに居るから」

え？何処に？と聞こうとするとそれを言う前に涼月がもうひとつあ

る保健室のベッドのほうへ向かっていった…まさか…

ジャツ!!

と勢い良くベッドのカーテンを捲った。するとそこには近衛がいた

——体がかちがちで拘束された状態で

「お、おい!?! なんなんだこれはあ!!」

拘束…まさに拘束だ

近衛の状態をみると俺の手錠なんか可愛く見えてくる

「何? これでも満足出来ないの? ふふん…貴方もなかなかのサディストね…じゃあこの鼻フックを——」

「違う!! 俺はそんなことを言っているんじゃない!! どうしてそんなことしてるんだって言ってるんだ!!」

「えー折角やってあげたのにいー…」

「俺がいつそんなこと頼んだ!?!」

「嬉しくなかった?」

「生憎俺はこんな特殊な趣味は持ち合わせてねえんだよ!!」

「そうじゃあ外すけど…後悔しないでね?」

「誰がするか!!」

その言葉のあとに涼月が近衛の口に入ってた…リングギャル?が外され近衛の口が自由になった

うんうんこれで少しは近衛も俺の事をまともに――

「お嬢様!! 早く拘束を解いてください! この変態を殺せません!」

……………あれえ?

## バカとチキンと発覚問題（後書き）

はい…今回もまよチキだけで終わってしまいました…ダレカタスケ  
テ…（ $T \wedge T$ ）

## **バカとチキンと共犯関係（前書き）**

おお今日二度目の更新と成りました

まさか二回も更新できるとは…少々驚いております

では第6話をどうぞっ！！

## バカとチキンと共犯関係

おかしいなあ…今近衛を助けるように言って少しは好感度上げたはずなのになあ…

どうして…

「おい、変態め！！そこで震えて待っているがいい！！殺してやる！！殺してやるぞ！お前の脳ミソをアルゼンチンまで吹っ飛ばしてやるからな！！」

どうして助けたのにこんなに酷い殺害予告をされなきゃならんのだろう？

今、近衛を助けたら俺がどうなるかは分かっている筈なのに涼月は…

「分かったわスバル。今その拘束を解いてあげる」

「待て！…いや！！待ってください涼月さん！！」

「……貴方、今の自分の立場が分かってないのね？理科室で貴方を助けたのも私だし、こうして助けているのも私なのよ？そしてスバルを解放するかもしれないかも私の自由。つまり…貴方の生殺与奪権は今、私が握っているの。そんな私にそんな態度で良いのかしらあ？」

怖え…まさか学園のアイドル涼月がこんな奴だったなんてまさに悪魔。

「お、お願い致します…涼月奏様…この私を助けてください。」

よし、決めた。これからはこいつの事を心のなかでデビル涼月と呼ぼう

「ふふ…わかればよろしい」

こいつについて、もうひとつ分かったことがある

こいつは…涼月はドSだ

どうしようもない嗜虐趣味の持ち主…まるでクラスにいる頃とは違う

「そんな！？この鎖を外してくださいお嬢様！！」

ガチャガチャと南京錠を揺らしながら近衛が叫ぶ

「その変態は僕の胸を無理矢理触ったんですよ！！しかも興奮までして鼻血まで出した犯罪者予備軍です！！今すぐ息の根を止めましょう！！」

「おい…あれは事故だって言っただろ？悪気はなかったんだ。それにお前も結構殴った筈だよな？」

俺の体でここまで痛むんだそうとしか考えられない

「黙れ！！殴ったと言ってもそこまでじゃない！！せいぜい消火器がへこむ程度だ！！」

「思いつき殺人未遂じゃねえかよ！！」



こういうときはマジで自分の体のタフさに感謝する

「うう…お前のせいで僕は執事を…もうだめだ…くそお!! どうし  
てくれるんだ!!」

ヤバッ…こいつ泣きそう…てかもうほとんど泣いてる…どうしよう…

「大丈夫よスバル…」

天使のような微笑み。それは聞いたものを落ち着かせるような穏やかな口調だった

「何のために私が坂町君…いや、ジロー君を拘束したと思ってるの？  
貴方が執事を辞めないようにするためじゃない」

「お前俺に…ツツ!？」

その言葉について抗議しようとした瞬間だった

涼月が俺の上に飛び乗ってきた

軽い…。涼月の体は思ったよりもとても軽かった

「ねえ…ジロー君？貴方、何で私が隣で寝てたとき鼻を押さえて後  
ずさったの？」

「!?!?…そ、それは」

「後スバルの時の事を聞いて…私はひとつの仮説をたてたのよ」

その仮説…なんだかとてもあってそうで怖い

「貴方、もしかして何か不思議な体質でもあるの？」

「なっ!？」

正解。正解である。まるっと全部お見通しってやつである

だが、だからと言って言うわけにはいかない…と、言うかバレたくない。

こんなはずかしい体質がばれてたまるか!!

と言うわけで俺は黙秘権を使います。

「ふーん…黙秘するつもり? 分かったわ…じゃあ」

「体に…聞くから」

いきなり爆弾発言した後まさに有言実行。プチプチと俺のシャツのボタンを外していく

「わ、分かった!! 言う!! 言うから止めてくれえ」

そんな叫びも届かず、涼月の白魚のようなきれいな指は徐々に俺の肌の上を這っていった

——マズい。

体の一点に血液が集まるこの感じ。顔が熱い…鼻の奥がつんとする

駄目だ…

そう諦めた瞬間、俺の鼻から赤い液体が滴りおちた

そう鼻血だ。

「こ、このド変態！！お嬢様に！！お嬢様にまで欲情して鼻血を出すなんて……」

隣からは怒り狂った声…当たり前だ、真正面の涼月の顔や服には血が付着してる…勿論俺の鼻血だ

「へえ…なかなか面白いわね」

当の本人は目を細めて薄く笑う

「まさか女の子に身体を触れられると鼻血が出ちゃう体なんてね」

「え？」

近衛の頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ

きつと俺の頭の上にも絶望の二文字が浮かんでいることだろう

「でもそんなアレルギーは聞いたことはないわね…」

「いや、これはアレルギー何かじゃなくてこれは後天的で人為的な物なんだ…」

そうして俺は坂町朱美って知ってるか？と静かに切り出した

「知ってるわよ少し前までテレビとかに良く出てた人でしょ？確か職業は――女子プロレスラー」

そうそうして俺はこのあとその人が母親で妹と共にしばかれつつけその結果なったのが所謂女性恐怖症。

そしてそのせいで俺は触られるだけで鼻血がでてしまうこと。だがしばかれつつけたそのお陰でタフネスさと回復力は化け物じみてること

その一連の話を聞いて涼月は：

「ふーんじゃあつまり貴方は女の人に触られるのが怖くて怖くて仕方ないチキン野郎なのね？」

グサツと心臓にナイフを突き付けられた気分だった

「ねえ？そうでしょう？坂町近次郎君」  
「！？」

な、何故このタイミングで俺のフルネームを！？

ま、まさか俺の忌々しい名前の秘密に：

「どうかしたの？坂町近次郎君」

「……………」

「サカマチキンジロー君？」

「……………」

「サカマ、チキン、ジロー君？」

「……………」

「チキン君？」

「うわあああああああ！！」

耐えきれず絶叫する俺

「どうしたのチキン君？目からスポーツドリンクが出てるわよ？」

「止めろ！その忌々しい名前で俺を呼ぶな！！」

呪われてる…としか思えない。名は体を表すって言うけどまさにその通りじゃないか。

「うーん…そうだ貴方将来『岡町』って人と結婚しなさい。そしたらもっと面白いから」

「は？」

岡町近次郎

オカマチキンジロー

オカマ、チキン、ジロー……。

「ね？面白いでしょ？」

「面白くないわっ！！何でお前はそんな恐ろしい事を平気で思い付くんだよ！！」

さすがはデビル涼月。考えることが違う

「ところでジロー君。」

と、急に涼月の雰囲気が変わった

「貴方、じぶんの恐怖症を治したいとは、思わない？」

そりゃ…

「治したい…けど」

「じゃあ取引しましょう」

突然涼月はそんなことを言った

「私たちが貴方の恐怖症を治すために全力でサポートする。その代わり」

「スバルの秘密を誰にも言うな。か」

「で、どうなの？ちなみに断った場合は一ヶ月後位に貴方の遺体が富士の樹海で見付かるわ」

脅しじゃねえかよ

「まあ…俺は良いんだが…近衛は、それでいいのか？」

「僕はお嬢様の執事だ。お嬢様のご命令に従う。それに……」

それに？

「いや、何でもない」

と、言いそっぽを向いてしまった

「ふふ…じゃあ決まりね。ところでジロー君」

「なんだ？」

「貴方って鼻血を出しても触られ続けたらどうなるの？」

「うーん…多分耐えきるなくなって失神すると思う」

「で、それがどうか――」

そこで俺は黙った…否、正確には黙らされた

俺の肋骨に伸ばされた涼月の指先によって。

「あ、あの涼月さん？」

「大丈夫よジロー君。これは実験、ほら必要じゃない？どこまで耐えられるかって」

俺からしたら命を削る実験なんだよ

「ちょっと！？待てってひゃあん！！」

「うふふ…ちょっと触っただけで可愛い声出すのね」

「な、なあ止めてくれえ！？う、あつ！？だ、ダメえええええ！！」

「へえ意外と体が引き締まつてゐるわね……あら？　こんなところに痣が……これなら失神した後も楽しめそうね」

……ああ……また日常が騒がしくなりそうだ……

徐々に遠退いていく意識のなか：俺は願った。

せめて…せめて俺のクラス…Fクラスはまともであってくれ

そこまで考えて俺の意識はシャットダウンされた



## バカとチキンと共犯関係（後書き）

ようやくここまで来ましたよ!!

次回かその次でクロスはさせたいですね!!

ではまた次話でお会い致しましょう

## バカとチキンと試召戦争（前書き）

このタイトルにしたからにはっ……っ！！

と言うわけで七話目をどうぞっ！！

## バカとチキンと試召戦争

『アレ』から一日がたった今日の朝

「おはよー！！兄さん」といつも通りに妹から目覚ましのプロレス技をかけられ夢の中から強制的に戻された。

その時妹が、ビックリな発言をした

「これで今日の『手芸部』はバッチリだね！！」

なんて…はあああ！？

妹が手芸部！？おかしい！！こいつなら絶対女子レスリング部に入  
ると思っていたのに…手芸部

ん？ちょっと待てよ…

「なあ紅葉、何で手芸部にプロレス技が必要なんだ？」

「え？だってうちの手芸部は強豪だし部長なんて指でコンクリート  
ブロックを割れるんだよ！！」

大変です神様。うちの妹が高校入学早々良くわからない団体に入っ  
てしまいました。

「それとね！！ゴールデンウィークの合宿は皆で山でサバイバルキ

ヤンプするんだって!!」

「…………お前の手芸部、なんか致命的に間違ってるぞ」

「てゆーか兄さん目の下が黒いよ? あんまり寝てないの?」

うん、寝てません…てか寝れません

「ああ少し人間関係で悩んでてさ」

「ふーん、それって女の人関係?」

「まあいつちまえばそうだな」

「はあ…そっか…兄さんもようやくそう言うことで悩むようになっただね」

悩めなかった理由の一部がお前のせいだがな

「まあそれはそうとして顔とか寝癖とか酷いしシャワー入ってこれば?」

「話を一気に変えたな…まあ確かに自分でも酷い顔してそうだし…気合いいれるためにも入ってくるか…」

「うんっ!! そうした方が良いよ!! じゃあ私は朝練あるからいくねっ!!」

「ああ…んじゃ俺もシャワーに入るか…」

ガラリ：

ここで問題が起きた

「「え？」」

脱衣場で、二つの声が響く。

一つは、勿論俺だ。

もう一つは、

「「ここ、近衛え！！」」

そこにはタオルしか持っていない近衛スバルがいた

危ないところは隠されているがそれでもかなり近衛は魅力的で…つて俺は見とれているんだよ！！

「目を、瞑れ」

「え？…はい」

NOと言えるわけもなく

大体は予想が出来ていた

目の上にはひんやり冷たいまるで『湯冷めした指のようなもの』がおかれていた。

ブスッ

「めがああああ！？目がああああ！！」

別に○スカではない

「ふん、当たり前だ…」

という強気の一言の後に

「初めてだったのに…」

という一言が聞こえた気がした。きっと幻聴だな

「そういえば何で近衛がここにいる！？」

我ながら突っ込むのが大変遅れたな

「お嬢様からの命令だ。監視しろ。とな」

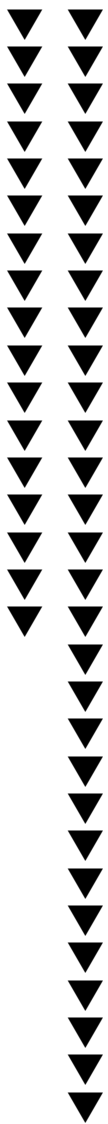
……そういうことか

「ほら、早くしろ！！」

急かす近衛に対して、

「はいはい、わかったよ」

と、てきとーにその言葉を流し少し早歩きの近衛の後をついていった



「はあ…」

何度見てもため息が出るこのFクラス

はあ…仕方ない…よな、入るか。

そう心のなかで呟き教室に足を踏み入れた

「お！ジローじゃねえかよ！！」

この少しだけ暑苦しい声は…

「雄二か…まさかお前もこのクラスとはな」

いやいや…まあ予想は出来たが

「ああそれでだが俺たちは今日、Dクラスに試召戦争を仕掛ける」

は？

「はあああああ！？いくらなんでも早すぎねえか？」

試召戦争…それはこの学校の特徴をいかしたこの学校だけの制度である

それは、戦争。まさに戦争である

例えばBクラスがAクラスに試召戦争を仕掛けて勝ったとする

するとそのBクラスはなんとAクラスの設備を手に入れることができ、負けたAクラスはBクラスの設備へと没落してしまう

そう、今俺たちはそんな博打打ちみたいな行為を2ランクも上なDクラスに仕掛けようとしてる

「おい雄二！流石にそれは――」

「勝てる。」

「なっ!？」

「というかDクラスなんて眼中にすらないぜ。目指すは………」

この時、俺は悟った

やっぱり俺の日常はしばらく――

「Aクラスだ」

こんな忙しい日々になりそうだ。



## バカとチキンと試召戦争（後書き）

いやあようやく！！ようやくバカテスのキャラをまともに出せましたよ！！（T ^ T）（泣）

うれしいなあ♪あははははは♪

すいませんあまりの嬉しさに少し壊れました。

## バカとチキンと戦争開始（前書き）

改変しました！！

## バカとチキンと戦争開始

「よし…じゃあてめえら戦争を始めるぞ!!」

と、雄二がFクラスにいる連中に声を投げ掛ける

……てかあの覆面のやつらはなんなんだ？

「——といたいところだが、ここで昨日紹介出来なかった奴等を紹介する」

「おい、ジロー、近衛、涼月出てこい」

そう言われ、俺たちは前に出た

「あーえつと…昨日は『色々と』あったせいで教室に迎えなかった…坂町近次郎だ、ジローとでもよんでくれ学力は普通、見た目も普通だがよろしく頼むよ」

そう言い席に戻る

次は涼月か、

「私は涼月奏です。学力には自信がありますので、よろしくお願いします」

……あのときとは本当に性格違うな

「うおおおおお涼月様ああ!!」

そんなとき…むさ苦しい合唱が教室を支配した

「奏様ああ!! 罵ってくれえ!!」

「俺らのゴッドエンジェル!!」

ヤバイ…露骨にキモい

バキィ!!

次に聞こえたのは木を叩き折るような音

「僕の名前は近衛スバルだ。学力、運動共に自信がある」

最後に…と近衛は一言おき、満面の笑みで

「お嬢様に手を出したらこの世の苦痛を全て味会わせ尽くしてやる」

「「「「はい!! 分かりました」」」」」

おお…一糸の乱れもない敬礼。軍なみだな

流石の雄二もひきつつてるぞ

「じゃ、じゃあ次はこっちの主力メンバーを紹介するぞ姫路、ムツツリーニ、秀吉、島田、明久!! こっちにこい」

「まず最初にこの姫路瑞希。まあ言わなくても分かっているだろうが学力がとても高いうちの主戦力だ」

「次にムツツリーニ、こいつは普段は明久並みに点数は低いがある教科になると学年最強だ。しかもこいつの『趣味』でもっているカメラや盗聴機で相手の情報を調べるなど情報面においては群を抜いて高い」

「次に島田：こいつは帰国子女だから国語が壊滅的だが数学面においてはビークラス並みの点数を誇る」

「そうだね：後攻撃力がかなり高いところ……肩が引きちぎれる様に痛いいいい！？」

明久：お前はなんて：

「ヨーシイーイ？今なんて言おうとしたのかしら？」

「いやあそんな島田さんの胸が相変わらず小さいなあああがああ！？」

「死になさいっ！！」  
ゴキツメキッドスッ！！

「おい島田、それぐらいにしてやれ」

と、見かねたのか雄二が助けを出す

「良かったわね吉井：助かって」

いや、あれは助かってないだろ。アウトかセーフかで言われたらぶっちぎりのアウトだ

「うう…僕はいつもこんなことばっか…」

大半はお前のせいだな

「今のできつと明久のことは大体わかっただろうし、次、秀吉」

「わしは木下秀吉じゃ。これからよろしく頼むぞ」

握手を少し交わした…むうやはり少しだけ鼻血が出そうになる…頭では男だとわかってはいるんだが…

「ついでに言っておくがわしは、男じゃ!!」

分かってます。一応

「よしこれで主力メンバーの紹介は終わりだ!!」

「それじゃあいよいよ」

雄二は野性味たっぷりの笑みを浮かべ

「――戦争だ」

よし。俺も頑張るぞ!!

…と、言いたい所だが俺はテストの日を病院で過ごしたため持ち点は全て0。

回復試験を受けねば。

「ジロー君っていつも格好がつかないわよね」

うつせえ。

## **バカとチキンと戦争開始（後書き）**

はあ…召喚獣の戦闘描写難しそうだなあ…

頑張ろ…



## バカとチキンと総員退避(前書き)

はい…なんか、1日2更新しちゃってますね…

でもまあ…文字数も少ないですしね

それではどうぞっ!!

## バカとチキンと総員退避

あれから15分後：戦争が始まった。

らしい。

俺は隣で目にも止まらぬ速さでテストを仕上げていく姫路を見てこいつの前世はコピー機だな、と思いつつもテストを仕上げ。

「先生、回復試験終わりました」

「はい、分かりました。ではどうぞ」

福原先生からの了承。よし、行こう！！

と、意気込み扉を出ると

「うおおおおお！！！！」

と、Fクラスのバカどもが突っ込んで行っていた

よし……逝ってこい

「ギャアアアアアア！！」

……案の定、Fクラスが突っ込んで行った先には死体が積み上がっていた。

アレ誰が回収するんだろう？

「戦死者は補習!!」

あ、ゴミ（Fクラスの面々）収集車が来た

「い、イヤだぁ!! 鬼の補習なんて拷問じゃないか!!」  
あれは…Dクラスのやつだろうか？だよな…俺もやだよ

「拷問？そんなことはしない。これも立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮近次郎といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう」

うわぁ…洗脳じゃねえかよ。

「おーい…」

どこからかそんな声が聞こえ回りをキョロキョロしてみると、

「ん？近衛じゃねえか。どうした」

「いや、何でもない。試験は終わったのか？」

「ああ見ての通りな。ところで明久がどこにいるか知ってるか？」

「ん？ああ着いてきてくれ」

「涼月も来るのか？」

「そうね。スバルも行くようだし」

「分かった。じゃあ行くぞ」



あの後、スバルのお陰で明久が隊長を務めている部隊の場所にたどり着き、

余り出るところがないので普通に話していた。

『ギアアアアア!!』

所々で断末魔が響く。どっちのクラスかは分からんが。

「今更ながら勝てるんだろうか…」

近衛がそう呻く

「うん…大丈夫とは言えないな…」

「そうね、でも坂本君の事だから勝てるんじゃないかしら？」

俺を挟むようにして静かにたたずんでる涼月が言う

「お前雄二の事知ってんのか？」

「ええ…小学生の頃は『神童』って言われる位だったのよ…」

神童…ね。流石はあいつ、やることが違う

そんなときだった

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

おっ明久がなんかと言おうとしてる。確か…島田さんか。それにしても明久いつになく真面目な顔だな…

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

明久：お前がなにを考えているかは俺には分からないがきつとまともな作戦じゃないんだろうな…

「総員退避、と」

………はあ、構えておいてよかったよ。  
じゃなかったらドロップキックをかましていた。

「この意気地無し！！」

おっ！！島田さんが明久の目にチョキパンチを繰り出した。  
結構痛そうだな。まあ俺の『目覚まし』にしたら百倍もましだけどな

「目が、目があっ！？」

見てられなくて明久達に近寄った

「おい大丈夫かよ明久」

「ん？ああ結構久しぶり！！近次郎」

ああお前のせいでしばらくは病室暮らしだったからな

「あれ？あんた達って知り合いなの？」

と、島田さんが聞いてきた

「うん、近次郎と僕は幼馴染なんだよ」

「へ、へえ…意外ね…」

何が？

「なんだか吉井の周りって変な人しかいない気がする」

……………否定っ……………できん！！

「ねえところで坂町近……………いや、自己紹介でもジローって呼べっていつてたからジローって呼ばせてもらうわ。ジロー？あんたって妹いる？」

「じゃあ俺も島田って呼ばせてもらうぞ……………まあいるよ。坂町紅葉って言う我が家のリトルモンスターがな」

「あ？やっぱり？実は私も手芸部に入ってた昨日そのを見たのよね」

……………出た。謎の手芸部。もうほんとなんなのか分かんない！？

「それにしてもあの子ってブラコンなのね。」

「いやいや…あいつがブラコン？」

だったらもう少して良いから攻撃力を弱めてくれ

「だって自己紹介が「私は坂町紅葉です。好きなものは格闘技全般と兄の寝顔と兄と兄の入浴中です」って言ってたわよ？」

「何変態染みたこと言ってるのあいつ!？」

なんか風呂場で視線を感じると思ったらあいつだったの？

「まあそれはともかく今は戦争中、その話は後にして今は、戦いましょう!！」

な、何て男らしい女の子なんだ!!

「そうね、じゃあジロー君?逝ってらっしゃい」

「おい涼月、字がちげえよ」

……まあたぶんな

「あら?良くわかったわね?しっかり「イってらっしゃい」って言ったのに」

「寧ろそっちの方が酷かった!？」

「とにかく『隠し玉』のお前らは下がってろ。後は俺達がやる」

「あら格好いい、まあ俺達じゃなくて俺だったらもつと私の好感度が上げられたのにね？」

それはきつと俺にとって死亡フラグだ。

「よしじゃあ行くわ——」

「島田、全線部隊が後退を始めたぞ」  
と、急に島田のところに報告係がやって来た

ふっそれがどうした：俺たちは今島田のやる気によって燃えているんだっ！！

「総員退避よ」

………さっきまでの島田に対する認識を改める必要がありそうだな

「吉井、総員退避で間違い無いわね？」

間違えてます。とは言えるわけもなく

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

デメエもか：

こんなんが一年続くとおもうともうほんとに

「はあ…」

——溜め息しか出なかった



## **バカとチキンと総員退避（後書き）**

はあ…クロスが難しい…

そして文才が（r y

## バカとチキンと保健室（前書き）

どうも！！授業中頑張って仕上げたチキン執事です！！

なにやってんの？とかは言わないで下さい

では、どうぞっ！！

## バカとチキンと保健室

おい、坂町。と後ろから声が聞こえた

「ん？お前は横田か。どうした？」

「代表からの伝令があります」

俺は紙を受け取り中身を読んだ

「ふむふむ…よしわかった。明久、お前宛だぞ」

俺がそう言うのと明久が寄ってきて紙を受け取り読み始めた  
………そろそろかな…

「全員突撃しろおーっ！！」

明久が急にさっきとは真逆の事を言い突撃していった

ペラッ…と、明久がああなった理由であろう紙が静かに地に伏せる

そこには「逃げたらクロス」と書き綴られていた

ついでに俺は雄二程度なら普通に戦えるから殺されはしない

さあて俺も続きますか！！

「おお！！明久！！ジロー！！助けに来てくれたんじゃない！！」

おっ！！あれは秀吉か。……おい明久、見とれてるんじゃないよ

「秀吉、大丈夫か？」

「うむ…何とか戦死は免れておる。じゃがかなり危険な状態じゃ」

「召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「吉井、見て！五十嵐先生と布施先生よ！！」

くっ…Dクラスの奴等俺たちを一気に片付けるつもりか！！

「あっ、そこにいるのはもしか、美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

あれはDクラスの奴か…てか『美波お姉さま』ってなに？

「よし島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよっ……！！普通逆じゃない！？『ここは僕に任せて先を急げ！』じゃないの！？」

「そんな台詞、現実世界では通用しない！」

うわ…世界の真理を叩きつけやがった

「よ、吉井！！このゲス野郎！！」

俺もそう思う

「お姉さま！逃がしません！」

「くっ、美春！やるしかないってことね……！」

五十嵐先生から10メートル以上離れてから島田の様子を窺う。相手のDクラスの女子は既に『召喚獣』を呼び出していた

応えるように島田もそちらを見据え声を出す。

「——試獣召喚！」

その呼び声に応えるように島田の足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

その後に何かが現れる。それは軍服姿で手にサーベルを持っている

『島田』だ

——いや、と言うよりは島田をデフォルメされた召喚獣だ

そう、この戦争とは自分の『召喚獣』を使って戦うシステムだ

各教科の点数ごとに強さが違い、その教科の教師の立ち会いのもと、その教科の点数で戦う

そしてどちらかのクラスの『代表』、俺のクラスで言えば雄二だな。まあその代表がやられてしまえばそこで戦争終了。クラス交換か自分のクラスの設備ワンランクダウンと三ヶ月かんの戦争禁止令がある

——まあこんな解説をしている間も戦いは続いていて…

「い、嫌あっ！補習室は嫌あっ！」

あ…負けちゃったのか…あの洗脳ルームへと仲間が送られるとなるとやはり心苦しいな

「補習？……フフツ」

ん？清水……だっけ？が喜んでる…何でだ？

てかそっちは保健室だぞ

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いてますからね」

………ああ…やっぱり『そっち』の奴だったのか…

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室より危険な状況にいる気がするの！」

うん、補習室行って自分を失うのとこのまま着いて行って女として大切な何かを失うのどっちが良い？って聞かれたら正直かなり悩むだろう

「島田さん、君の事はわすれない！」

あっ…明久目を反らした

まあ…

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をするひとは全員殺します

……」

何て言われたら流石にキツいものがあるだろうな

――俺以外は。

「おい、試獣召喚だ。」

そう言い召喚獣を召喚する

「貴方は何です？」

「俺はFクラスの坂町近次郎だ。そこにいる島田が可哀想でな、そろそろ助けようと思ってな」

「助ける？なにを言ってるんですか？これから美春とお姉さまは一つになるんですよ！！邪魔しないで下さい！！」

「だからそれを嫌がってるってんだろ」

「くっ、たかがFクラスの豚野郎の糞に貶されるなんて！！良いでしょう！！めっためったにしてやります！！試獣召喚！！」

そう言い清水は召喚獣を呼び出し急に突進してきた

だが、

グシャッ、という何かがつぶれるような音ともに

『Fクラス      坂町近次郎      Dクラス      清水美春』

132点

勝敗は決定していた。

DEAD



## バカとチキンと保健室（後書き）

はあ…この頃矛盾点を見付けたり、書く度にだんだん変な文脈が出来てたりしてるよお……

泣きたくなってきた。（泣）

## バカとチキンと名推理（前書き）

どうもっ！三日ぶりでございます

実はあたらしい小説を買ってしまい…つい没頭してしまいまして…  
あはっ

申し訳ございません…（泣）

## バカとチキンと名推理

「はあ…」

俺はひび割れた窓から俺の心とは真逆に澄み渡った空を見上げまた

「はあ…」

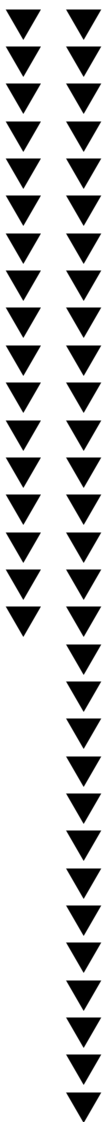
と、小さくため息を吐いた

え？何？Dクラス戦？ああ言ってなかったっけ？

勝ったよ。Dクラス戦「にはな」

あの後姫路がDクラスの代表、平賀源二を打ち取り事なきを得た

だが、問題はここからだった。



Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混じり、嫌な不協和音を奏でる

まあ、Dクラスの方々には悪いが正直俺も…

「ははっ…」

——悪くねえ気分だ

俺は実際勝てる自信なんて余り無かったし、活躍することすら出来ていなかっただろう。

でも、それでもだ。

なんかこう…やっぱり嬉しい。教室を変えられる事もそうだがやはり勝ったという事実。

やはりそこは坂町家の血を引いているんだな、と自分でも思ったよし…これからはカビ臭くない空気を味わえると思うと…あ…やべえ泣けてきた

そんな事に密かに歓喜していると…

「あら？なんだか嬉しそうね？ジロー君」

凜と、した声が前から聞こえた。涼月だ

「そういうお前は嬉しくねえのかよ」

「……まあ嬉しいわね、でも、余り期待しない方がいいわよ？きつと…ぬか喜びになるから」

と、最後に意味深な台詞を残して近衛の所へ戻っていった。

「何なんだ一体？」

だが、この意味を俺はこの約五分後に知ることになる

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ今日はもうこんな時間だから渡すのは明日で良いかな？」

うわぁ…さっきまでの威勢はどこへやら…完全に燃え尽きている。

やつといてなんだがとても可哀想だ。だって明日からはもう戦犯としての扱い…実際考えたくもないな

「いや、その必要は無い」

ピシヤリ、と雄二がそう言い切ったその瞬間、多分涼月以外固まった勿論俺も例外ではない。

「え？何で？」

と、明久が沈黙の均衡を破った

「Dクラスを奪う気は無いからだ」

それが当たり前のように告げる雄二。

この話について分かることは一つ、雄二が嘘をついていないことだ

「何でさ雄二。折角普通の教室を手に入れたのに」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスだ」

「え？じゃあ何で最初からAクラスと戦わないのさ？」

「ああ……そっか」

俺はポン…と、手を打った

「ん？なんだ？分かったのか？ジロー。よしこの頭の中が空気より軽い明久の代わりに言ってやれ」

「まあ…分かった。」

コホン…と咳払いをした後俺は続く。

「明久、この戦いでは真っ向から戦って勝てたがAクラスとの戦いでは真っ向勝負で勝てると思うか？」

「多分…無理かな」

「まあ絶対とは言わないが99%位の可能性で無理だな。それでだ、『これからの』戦いで必要なものはなんだと思う？」

「んーと…勇氣？」

「夢と希望に満ち溢れた回答をありがとう。だが違うな。正解はモチベーションの維持と経験だ。雄二の事だからきつとまだあるんだろうが俺には分からない」

「モチベーションの維持と経験？」

「お前はそのままDクラスの設備を手に入れたら満足か？」

「……まあね？　そうだけどなに？」

「だが、俺達の目指すは？」

「Aクラス………あっ！」

おっ…ようやく分かったか？

「つまり！！モチベーションを落とさない為にクラス交換をしないんだね！！」

クラスの中が、凍った。あの雄二でさえ、目を見開いている

「あれ？　僕間違えちゃった？」

違うんだ、違うんだよ。正しい、明久の出した答えは正しいけど…  
…それが問題なんだ。

『お、おい、聞いたか？　今吉井が俺たちでもわからなかった事を言  
いやがったぜ……今日で世界終わっちゃうかもな…』

「明久…」

雄二が暖かい目で明久の肩に手をおく

「雄二…」

「悪いことは言わねえ…病院へ行ってくれ」

「それがすでに悪いことだよね！？そんなに僕が答えられたの変？  
つておい！！みんな黙るなあ！！！」

「まあそれは置いといてもう一つの方を言うぞ？」

「経験？」

「そうだ。俺たちはこのままじゃ絶対に負ける。だから召喚獣の操作の仕方を覚えるんだ。ほら、お前も点数はかなり低いけど戦いになったらBクラス位とは同等に戦えるだろう？」

そう、こいつは『戦いに』おいては多分一番だろう。

その理由はいいつの肩書き、『観察処分者』だ。

この称号は簡単には手に入らない

頭が悪く問題があり、手におえない生徒…つまりダメダメなダメ人間につけられる称号なんだ

まあこいつの場合良いことをしたんだがそのせいでこうなっちまったんだがな

そしてその称号を持つものは先生の雑用全般に駆り出され召喚獣を駆使し雑用をこなしていく

そうして明久は、雑用により召喚獣の扱いがとても上手くなった。

だが、観察処分者にはもう一つの罰がある。



それはフィードバック、といい召喚獣のダメージの何割かが本人に返ってくるというものだ

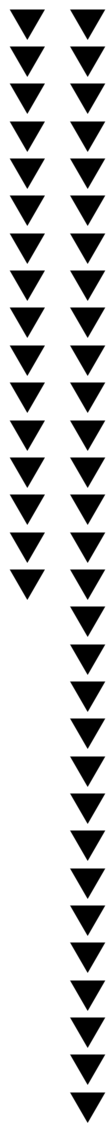
だから召喚獣が走れば明久も疲れるし、召喚獣がダメージを負えば明久もダメージを受ける

まあ逆に痛みがあるからその分だけ動きも細かくできるんだと思うが…

「まあ言ってしまうえば召喚獣の扱いで差を縮めるってことだよな？」

「ああそうだ」

と、雄二が口を歪めた。



「はあ…んじゃ茶番も済んだことだし帰るか。おーいジロー、明久、行こうぜ」

俺と明久は言わずもがな。幼馴染みだけあって家が近いが実は雄二の家も同じ方向だからこうして三人で帰ることが多かったりする。

「ああ分かった。」

よし…と嘆息をついて立とうとしたところだった。

「あれ？ねえジロー、かみに糸みたいなのついてるわよ」

といわれ、『女子の右手が俺に向かって伸ばされた』

「あっ!？」

明久がヤバイ、といった感じで近づいてくる

ついでに言っちゃうと明久も俺の恐怖症の事は知っている。

……共にサンドバッグに、なった仲だからな

「うわっ!？」

ズザザ…と後ずさる。

「し、島田ごめんななんか急に!! んじゃあ俺帰るわ!! 明久!!  
雄二!! 行こうぜ」

と言って教室から足早に出ていった。

それから俺たちは他愛もない話をしながらゆっくり家に向かって歩いていた。

すると…

「あっ!」

と、突然明久が声をあげ俺達が来た方向、つまり文月学園に戻っていった

「ジロー、雄二!! 僕教室に忘れ物しちゃったから取りに戻るけど先帰ってて良いからねー!!」

「心配すんな明久!! 誰もお前を待たないからな!!」  
おい、雄二。

ほら：明久めっちゃ睨んでるぞ

「ふう：ところでジロー」

ん？急に雄二が真面目な顔になった

「お前、涼月と何があった？」

「ーッ!？」

な、何なんだこいつ。

こいつの前では涼月と話してもいなければ近衛とも話してないぞ!？

「いや、何かあったのは初日に三人とも来なかった時点で想定済だった」

更に驚く。なんかもう頭が回る回らない以前の問題。流石は元神童と言わざるを得ない

「な、何でそう思うんだよ？」

「ん？いや、ただの仮定だ。例えばだ、もし、」

「お前ら三人の中に何か誰にも言えないような秘密を抱えていたとする。」

「……………」

「そしてその秘密をとある二人は共有している。」

「……………」

「だが、それがばれてしまった。」

「……………」

「しかしその二人は何としてもそれを隠したい、または隠さなければならなかったんだ」

「……………（汗）」

「そこでもう一つの仮定だ。」

「……………ゴクリ」

「その一人も実は言えないような秘密を抱えている」

「……………あわわわわ…イカンこのままだと名探偵コ〇ンばりの名推理でバレかねん……………!!」

何としてもそれだけは避けねば。

「な、なあ分かったお前の言いたいことはよく分かった。そうだよ…俺は秘密を抱えている」

「ほう…やはりか」

と、また愉快そうに口の端を歪める

チツ…敵に回したらほんとデビル涼月並みに厄介だ

「ああそうだよ俺は実はじょ「そうよ、実は私とジロー君は付き合っているの」……………は？」

とまあなんともおかしな言葉をはいた誰かの『凜と』した声が響く

……………まあ俺をジロー君何て呼ぶ奴は一人しかいないがな

「なっ!?!? 何で涼月がここにいんだよ!?!?」

「あら? 彼女なのに一緒に帰るのは駄目なの?」

「かつ！？彼女！？」

「何を今さら驚いてるの？昨日なんてベッドの上であんなことやそんな事をしたのに」

「確かにベッドの上であんなことやそんな事をされたけどさあ！！」

「お、お前らそんな…」

はっ！？雄二！？くそっ！！そんな目でこっちを見るなあ！！

「と、言うことよ。坂本くん。私達の秘密はこれ。ついでにバラしたら…」

カチャリとケータイを取りだし

「『あの子』に貴方のデタラメを流して…終わらせるわよ？」

その瞬間、ただでさえ少し蒼かった雄二の顔がマジで蒼くなった

「なっ！？何でお前があいつと……いや、聞くまでもねえか。分かったその協定結ばせてもらう。何としても……！！」

あれ？何でだ？なんだか逆に雄二の方が躍起になってる気がするな。

「ま、まあ一度これはおいといてだ。雄二、次はどここのクラスに仕掛けるんだ？」

「ん？なんだ？気付いてたのか…」

「あいつらと一緒にしないでくれ…」

俺も成り行きでFクラスには居るが一応CかDはあるんだよ

「まあ次は…Bクラスだな……つと俺はこっちだ。じゃあな」

ああ、と短く返事をし、今度こそ絶望する。

え？何？Bクラス？ハッハッハッ…勝てるわけねえじゃん…

でも何故だろうな

負ける気がしない。

「よし…じゃあ今日は帰って勉強でもするかな」

そういう家に向かって早歩きで足を進める

後ろをみないように、意識しないようにして歩きながら

「ねえジロー君？さっきから何で無視するのかしら？」

……………これを見ないように

「ねえジロー君？」

スタスタスタ…

「ねえジロー君？」

スタスタスタ…

「ああん！ジロー君そこはめえ！！」

ゴツンッ！！（電柱に頭をぶつけた音）

「あら？急に電柱に頭をぶつけてどうしたのお？」

死ね…マジ死ね…この悪魔め…

「何なんだ！？一体！！俺は今から帰って寝るんだ！！」

「ん？そんな事言ってられるのかしら？」

「はあ…？お前何をいって…」

ほら。と涼月が指を指す方向には、

「げ…」

じいーつと電柱のかげから俺たちを見ている2つの目があった

身をまとう服は我らが高校文月学園の制服で、身長的にはきつと一年ぐらいだろう。まあ実際中学一年位に見えなくもない

まあその指をコンクリートでできているはずの電柱に指を食い込ませる位の怪力を持つのは我が家のリトルモンスター

坂町紅羽、その人であった。

## バカとチキンと名推理（後書き）

いやー何としてもDクラス編はこれで終わらしたいなあ…と思いついて

省きました、省いちゃいました。

まあそこまで後悔はしていません

そして来週はテストがありますので更新が不定期になります。  
ご了承ください



## バカとチキンのプロフィール（前書き）

今回の更新は原作と違ったところをプロフィールにしてのせようと思います。

## バカとチキンのプロフィール

吉井明久

知っての通りバカとテストと召喚獣の主人公

明久は今のところ好きな人はいない設定

昔から坂町家と仲が良かったため、ジローと共にサンドバッグに…だから明久も実は結構強かったりする。(雄二と張り合えるぐらい)バカなのは相変わらず、優しいのも相変わらず、鈍感なものも、相変わらず。

島田美波

今回は何故か手芸部の部員として活躍中  
なんと5位の实力をもっている

明久LOVEは相変わらず。  
コミュニケーションがサブミッションなのも相変わらず

〵〵一応〵〵

鉄人と坂町朱美の関係について。

12年ほど前、鉄人がトライアスロンに参加した時、坂町朱美も『暇潰し』で参加しており、鉄人が坂町朱美と同着一位を取ったときに知り合った。

そこから坂町家に来るようになり、坂町次郎とも意気投合。

ジローも昔はキャッチボールなどをやってもらっていた。

明久もまた然り。

## バカとチキンのプロフィール（後書き）

………短かつ!!

自分で書いてて泣けてきましたよ

なんか美波のキャラがマサムネと被ってる気がしてならない…

## バカとチキンと既視感（前書き）

感想があるって…いいね（泣）

では、どうぞー！

## バカとチキンと既視感

「に、兄さん…その人が今言ったこと…本当？」

げえ！？何でこんな所に紅羽が！？いや、そんなことより今は弁解が先だっ！！

「違うんだ！！紅羽今のは「ええほんとよ坂町さん」嘘なんだあああ！！！」

どうしてなんだ？俺には味方が居ないのかっ！！

「わ、私の兄さんを…たぶらかす女狐めえええ！！！」

その時なんと紅羽は俺ではなく、涼月に向かってけりを放った

ヤバイ…あの角度から入れば俺だって気絶は免れないっ…

そんな時だった。

「お嬢様に…」

タッタッタ…と規則正しい足音が聞こえる。

その後、ダッ！！とジャンプするような音が聞こえ…

「手を出すなあ！！！」

ガッ！！

おおぅ：見事なキック。流石に紅葉もひとたまりもないだろう。

「な、なに、これ……」

紅羽がぶつぶつとうわごとのように呟いた後、

「こんな……こんなの反則よっ！」

うわあああつと叫び声を上げながら、紅羽は走り去っていき、俺と近衛は、それをただ呆然と見守るしかなかった

はあ：熊五郎を修復しないといけねえのか

「ねえジロー君？熊五郎ってなあに？」

「うん、お前が今さらつと俺の心を読んだ事に関して小一時間程問い詰めたけれどスルーしておいて、熊五郎ってのは、紅羽がガキの頃から持つてるでっかいクマのヌイグルミだよ。……よくぼろぼろになるからその度に俺が修理してるんだ：まあぼろぼろになる理由は――」

「なんだ。あの子にも可愛らしいところがあるじゃないか。やっぱり女の子だな」

「……………」

……………言えない。

熊五郎がぼろぼろになってる理由は俺の代わり：つまりは代理サンドバッグなんだよ……なんて口が裂けても言えなかった。

「ま、まあなあいつにも色々あるんだよ。じゃあな、おれこっちだから――」

素晴らしい足早にそこを去った

「ふう…」

目の前にあるのはただの一軒家…じゃない。そこから見ればただの一軒家なのだが、建物の地下には道場兼ウェイトルームになっている地下室がある。

俺と紅羽はガキの頃からそこで母さんによる格闘技教育を受けてきたわけだ。俺はいつもやられっぱなしだったが。

車庫には真っ赤で高級そうなスポーツカーが停まってるが、これも母さんの趣味。

昔はよくこれで峠をかつ飛ばしたとか。どこの走り屋だよ。

玄関の扉をあける

「あれ？」

周りを見渡すと真っ暗。つまり電気が付いていなかった。おかしいな…あの調子だと絶対帰ってきてるはずなんだが…

そう思いながら廊下の電気を付けると――。

クマのヌイグルミが惨殺されていた。

「ひいっ！」

思わず悲鳴をあげる俺。

仕方ないじゃないか…熊五郎Ⅱ代理サンドバッグ↓じゃあ本当のサンドバッグは？↓もし、もしその場に俺が居たら……



止めようこれ以上負の連鎖は産みたくない

「……兄さん」

「く、紅羽!？」

聞き慣れた声に振り向くと、そこには制服姿の紅葉が立っていた

「おかえり」

「あ、ああ、ただいま……」

あれ? 思ったより落ち着いてる……なんか心なしか顔も赤いぞ?

「兄さん……一つ聞いていい?」

「な、何だよ」

「実は私、気になるひとができたの……」

イカン、めまいがしてきた

「それって明久の事じゃ、」

「違うの……何て言うか、あ、あき兄の事は……すっ好きだけど!!」

「まあ……でその、なんだ……誰なんだよ……そいつは」

「……ねえ、近衛先輩って付き合ってるひととかいるのかな?」

タイムタイム。待ってくれ。追い付け俺の頭。助けて天国のお父さん

「い、居ないんじゃないかな？」

「えへへ…そんなんだあ」

「でさ、兄さん」

「な、なんだ、我が妹よ」

「実はね、さっきのキックで、ずきゅんってきちゃったの」

「へ、へえー……」

「近衛先輩って強くてかっこいいよね」

「あたし――、あき兄の次に好きになっちゃった」

大変だ、天国の親父。

あんたの娘が、女の子に恋しちゃったぞ。

## バカとチキンと既視感（後書き）

あーなんか今回はなんか頭が回らなかったです…すいません

次回は頑張らせて頂きます!!

**バカとチキンとお姉さま（前書き）**

はあ…お久し振りです。

なんか、テストが…ヤバイ…

まあそんなのは気にしちゃダメですよね？  
では、どうぞっ！！

## バカとチキンとお姉さま

「あははははは」

屋上に響く笑い声。

澄切った青空の下、涼月は腹部を押さえて酸欠になりそうな位笑い悶えていた。

「笑うなよ…こっちはかなり深刻なんだぞ…」

「きつとスバルの蹴りでイケナイ趣味に目覚めちゃったんじゃないかしら？」

「その言い方はやめてくれ、胃に穴が開く。」

でも…あの蹴りが原因なのもまた事実

いや、紅羽にはそんな趣味はないぞ？ただ…

『自分より強いひとが好き』

思えば紅羽は『明久以外』昔からそう言っていた

しかし悲しいことに紅羽は坂町家の人間、格闘技の申し子である。

生涯無敗。

それこそ同年代の男で勝てるやつなんているはずもない

筈だか、『近衛スバル』

文字通りその強さにずきゅんと来てしまったわけだ

まあ問題は、

「良いじゃない、お似合いの二人だと思うわ」

「……お前、本気で言ってるの？」

「多少の障害なんて二人の愛があれば乗り越えられるでしょう？」

「同意を求めないでくれ……てかそんな事聞くためにお前を呼び出した訳じゃないんだよ。」

今ここに近衛は居ない、居るわけがない。

そんな訳で俺と涼月は二人きり。

普通の男子なら大喜びものだが、俺にかかれれば地獄と化する

まあFクラスの連中に見られれば…死刑だな。

だが、そんな事は言っていられない。状況は一刻を争うのだ。

「あいつは近衛の秘密を知らないんだぞ。それともお前は近衛がそういう関係になっても良いのかよ」

「あら、最近じゃそう言う恋愛も珍しくないんじゃない。意外と近くにそういう趣味の人がいるかもしれないわよ」

「……………」

居ねえよ。と言いたい所だが実際この前『そういう趣味の人』を見てしまったから言い返すことが出来ない

「とにかくだ、協力してくれ涼月。おまえにだって責任はあるんだぞ」

「責任？」

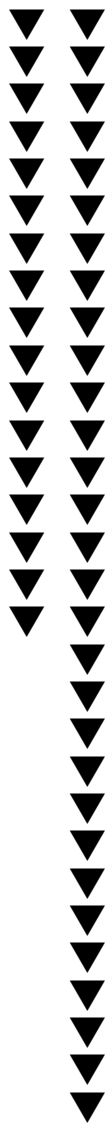
涼月が怪訝そうな顔をした

「そうだよ…お前今日も近衛をこっちに寄越したろ」

「そうね。なにか問題でも？」

「大ありだ。お前のせいだなあ……………」

あれは、今日の朝だった



「おはよ…兄さん」

「よ、よう、紅羽。どうした？何か元気ねえけど…」

熱でもあるんじゃない…

「うん。何かドキドキしちゃって眠れなくて」

「……………」

………ああ…そっか

「そういう兄さんも顔色悪いけど、大丈夫？」

「ああ大丈夫だ。少しだけ深刻な悩みがあるだけだ。………それより先、シャワーに入ってこいよ…俺は後で入るからさ。」

「うん、ありがと。じゃあ先入ってくるね」

パタパタと紅羽がリビングから脱衣所に向かっていった

その少し後に、がチャリと玄関の扉をあける音が聞こえた

「お、おはよう。」

え？まてまて…この声は…

「こっ近衛！？何で俺の家に！？」

「む。そんなの一緒に登…いや、お前を監視するために決まってるだろう。それよりちゃんと玄関の鍵は掛ける。不用心だ」

「……………」

「どうした？そんななにかが起きそうな顔をして」

いや、ほんとなにかが起きそうな気がしてならないんですもん。もしここで紅葉が半裸できたら終わ——

「兄さーん。お風呂場のシャンプー切れてるんだけど新しいの知らない……」

と言いながら紅羽は戻ってきた。

半裸で。

サアアア…と何か血の気が引いていく音が聞こえる。その音の出



所は紅羽か俺、はたまたは両方か。

坂町家が沈黙に包まれる。逃げ出したい。とても逃げ出したいのに脚が動かないこの不思議。何なんだろうね

まあ突然の来訪者を見て紅羽は完全にフリーズしている

「……………」

「……………」

「……………」

黙りこくる俺達。

でもいずれはその沈黙も、

「にゃあああああああっ!!」

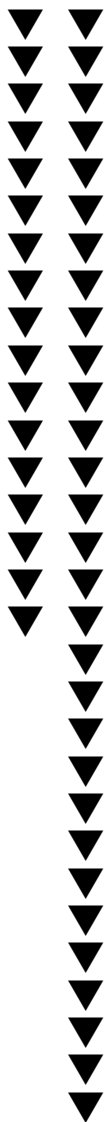
……………こうして破られる

紅羽は断末魔のごとく悲鳴を上げ、リビングから立ち去った。

方向的にきつと自分の部屋だろう

そしてまた、二人の間には沈黙が訪れた。

そしてこれが、今日の坂町家に起きた惨劇である



「あははははっ!!」

涼月は俺の話を聞いて、さっきより更に大爆笑しやがった

「笑うなっ!! こっちは大変だったんだぞ!!」

あの後、俺が何を言おうと紅羽の部屋の扉は開くことがなかった

「大丈夫かな…あいつ。不登校にならなきゃ良いけど…」

「あら、それなら大丈夫よ」

そういい、涼月は俺の背後を指差した

「うわっ…」

その方向にあったのは屋上の扉……から隠れて見ている目。怖いな…

自分の存在がバレたからだろうか？

どぼんつと扉を開き、見慣れたショートカットが現れた。紅羽だ

「兄さん。聴いたよ」

「な、なにがだよ…ってかいっからそこに」

最初からそこにいられたのなら…マズイ

「今さっき…で、兄さん。何で嘘なんてついたの？」

「嘘？嘘ってなんの？」

「兄さん、涼月さんと付き合っていないじゃない」

「!!」

おっ！これは嬉しい誤算！！これで様々な誤解を今からとこ――

「何で？どうして？どうして近衛先輩と付き合ってるの!？」

………あるえ？おっかしーな

「ちよっ、ちよっとまで紅羽。今なんつった？」

「だって昨日から兄さん急に近衛先輩と仲良くなってるし、今日とか家に来てたし」

「それぐらいで俺にそっち系な疑いをかけんのか!？お前は自分の兄をなんだと思ってやがる!!」

「……………BL？」

「うわああああっ!」

妹に…同性愛者だと思われるなんてっ……

「違う!!俺は同性愛者何かじゃない!!」

ちゃんとエロ本だって持っている!!と言いたいが涼月が居るため言えず。

「じゃあ何で近衛先輩は家に来るの?どうして急に仲良くなったの?」

うぐっ…

言葉が、つまる。だってこいつは、

――近衛が女の子だと、知らないから。

「わかったわ。こうなったら本当の事を言いましょう」

仕方ない……といった感じにため息をつき、言葉を紡ぐ

「す、涼月……」

「仕方ないでしょう。ここまで来たらもう隠し通せないわ」

「坂町さん。貴方の見解は間違っていない。確かにスバルは貴方のお兄さんのことが好きよ」

え？今こいつ…

「やっぱり」

頷く紅羽。いやいやいやいや、やっぱりじゃねえよ。なに言ってるの？この悪魔

「でも安心して。ジロー君とスバルは付き合っていないから」

「えっ……そうなんですか？」

「そうよ、だって…」

と、少し間を置いて、

「ジロー君は、この私と付き合ってるんだから」

なんて。

『は?』

「ちよつ、ちよつと待ってください!! 付き合ってるのは嘘なんじゃないんですか!?!」

「あら? 私は一言も嘘とは言っていないわよ? 誰からそれを聞いたか知らないけど『私とジロー君が付き合う↓当然スバルとも仲良くなる』って考えればおかしくないでしょ?」

「た、確かに…」

単純バカな紅羽はいとも簡単に信じる

「でっでも! やっぱり信じられません!! 何で今まで欠片も接点の無かった二人が付き合うんですか!! おかしいですよ!! 証拠もないですし!!」

ぐっ…しんじなかったか!! 何だ? 今日の紅葉は妙に勘が良いぞ?

そんなとき涼月はクスツと笑い、

「脇腹の痣」

と言った。

その言葉に紅羽の動きは停止する

「ジロー君って左の脇腹のところに痣があるでしょう? それを知っているのが、証拠よ」

「そ、それは、どどどどういう意味ですか?」

「あら？聞きたい？」

ふふっと涼月は笑い

「私がジロー君の服を脱がしたからよ。勿論、ベッドの上でね」

ああ駄目だ。絶対勘違いされた。

確かに服は脱がされた。なにもなかったはずだけど。

しかし、そんな裏事情を知らない我が妹は……

「そ、そんな……ベッドって」

「付き合ってるんだから普通でしょ？」

「で、でも兄さんは女の人に触られるのは苦手で……！」

「実際人間なんて吹っ切れちゃえばいけちゃうものよ？」

「……………」

涼月の言葉がよほどショックなものだっただろうか？  
今や紅羽はひっくり返る寸前。誰かタオル投げ入れてやれー

「でも、だから私はあなたを応援したいの」

「……え？」

さっきとはうって変わって天使のような微笑みと優しい声色で語りかける涼月

「スバルにはね？ちゃんとした人と恋愛してほしいのよ。あのこの主として。だから、坂町ーいえ、紅羽ちゃん」

そこで涼月は懷から四枚のチケットを取り出した。あれは……

「今週の日曜日、遊びに行きましょう？」

それは、最近リニューアルオープンされたレジャーランドのチケットだった

「遊びに…ですか」

「そう、私とジロー君とスバルと貴方の四人で、ね。どうかしら？とても楽しそうだけど」

その口ぶりは、デビルではない

涼月奏。学園一の美女

「紅羽ちゃん。私は貴方に頑張って欲しいの。だから、一生懸命応援するわだってあなたは、将来私の妹になるかもしれないんだもの」

終わった。俺の頭のなかではなるはずのないゴングがカーンカーンと高らかに鳴り響いていた

「涼月せん……いえ、お姉さま」

その目にはもう、迷いはなかった。

「あたしが必ずや近衛先輩をいけない道から救いだして見せますっ！」

「ふふっ…宜しくね。紅羽ちゃん」

がっしりと握手を交わす二人

……なんつーか……あれだな。

……女って怖え



**バカとチキンとお姉さま（後書き）**

なんかほとんど原作通りの気がしてならん

やばい…著作権に引っ掛からなきゃいいんですが…

## バカとチキンとBクラス（前書き）

はあ…が、頑張った…

で、ではどうぞ…

バカとチキンとBクラス

キーンコーンカーンコーン♪

いつも通りの昼休みの鐘がなる

そうしてからいつも通り、明久、雄二、ムッツリーニ、秀吉、姫路、島田というメンバーで昼飯を食べる。

——と思ってた。

「一緒に弁当を食べよう」

近衛のこの一言によって、そんないつも通りが壊された。

まあ当たり前だが：

ザワザワ：ザワザワ

『おい、聞いたか？あの『スバル様』が一般人を誘ったぜ？』

『あれってたしか…坂町…近……なんとかっていう奴だよな?』

「誰だ？ そいつ？」

『ほら、あの初日来なかった……』

等と一気にクラスがザワザワとなる

あーあ…俺は目立たずに、静かにして暮らしていきたいのに…

誰だ今、あいつらと友達って部分でもうアウトって言った奴は。

……まあ反論は出来ないが。

「とにかくここは五月蠅い。屋上に行こう」

そう言うとき近衛は俺の手を掴み少し急いだ感じで屋上への階段を上っていった

屋上に着いた俺は取り敢えずベンチに座り買っておいたクロックパ  
ンを開け、かぶり付く。ん、うまい

「ん？何で近衛は座らないんだ？ほら、座れよ」  
俺がそう促すと、

「そ、それじゃあ座るぞ？」

と、おずおずとしながら俺の横にちょこんと座ったそうしてパンの  
袋を開け食べ始める近衛

「なあ、どうしたんだ？なんか今日のお前おかしいぞ？」

「……………」

はい、無視頂きましたー

………かなり虚しいんですけど。

「おい、最低限の言葉のキャッチボールはしろよ。二人で飯食ってんだし」

「五月蠅い。黙れ」

ひでえ…これはきつとデッドボールだ。

「……元々僕には昼休みに会話をする習慣なんてない」

だからこいつが涼月と食べてるときも喋んねえのか。はあ…これじゃあ涼月が可哀想だ。

「それ…でもさ、今は喋ろうぜ。その方が飯だってうまく感じるよ」

「お前はいつも誰かとそうやって食べてるのか？」

「ああ。今はFクラスの奴とか、一年の時は黒瀬と明久とかと食ってたな。まああいつらとは中学校から一緒だしな」

「中学校か。ボクは行ってないからよく分からないな」

え？マジで？

「僕もお嬢様も高校からだ。小学校や中学校は名前だけ入学して、一度も行っていない。それが決まりだからな」

決まりってのは涼月家だろうな…多分…はあん、金持ちの考えることはさっぱりわかんねえな。

「だから初めて来たときは右も左もわからない状態だったよ。お嬢様は聡明で要領が良いから上手く対応されていたけど……ボクには無理だった」

そう言うことか……だから、無理だった。

無理もないよな。俺もいきなり高校からなんて考えたくもない。交遊関係0から高校。免許取りたてのドライバーがいきなり高速を乗るに等しい

「だから、お前みたいに友だちとお昼を食べたことはないんだ」  
近衛は弱々しい笑みでそう言った

「呼べよ……」

「え？」

「いや、だから名前で呼べよ、俺のこと。坂町近次郎だからジローでいい。まあ明久は近次郎って呼んでるけどな」

何で自分でこんな事をいつてしまったかは分からないけど何か……嫌だった。近衛の弱々しい顔が。

「でも……良いのか？」

「何が？」

「そんな友達みたいによんで……嫌じゃないのか？」

ああああああ!! なんなのこいつ!!

「めんどくせえ奴だな。俺は昔からジローって呼ばれてんの。だからそれ以外の呼び方で呼ばれんの気色悪いんだよ。だから、そう呼べ」

「でも、友達みたいに……」

「少なくとも俺はお前のこと友達だと思ってるよ」

我ながらよくこんな台詞吐けたなと思う。きっと思い出すたび悶絶するに違いない。

「わ、わかった……じゃあ……呼ぶぞ？……ジロー……」

頬を染めながら恥ずかしそうに言う近衛瞬間、自分の発言を呪った。

……やべえコイツ超可愛い……流石は学園一の美少年。その名は伊達じゃない

「お、おう上出来じゃん……」

あー何か恥ずかしくなってきた。なんなのこれ？

と、一人で軽く恥ずかしいのを誤魔化していると、

コッソ、と不意に俺の肩に近衛の頭が当たった。

「ん？……もしかして眠いのか？」

見てみると近衛は欠伸を噛み殺しながら目をシヨボシヨボさせていた

「いや、違う……別に……眠くなんてない……」

言いながらも、睡魔に襲われているのかもう眠りそうだ

「別に寝ても良いぜ？授業の時には起こしてやるから」

「そんな気遣いは無用だ……見てろ。こんな眠気なんかすぐ吹っ飛ばしてー……」

と、いった次の瞬間にはもう、近衛の意識は無かった。

まあいい天気だし。仕方ないよな

力を失った体が傾いて俺の肩に近衛の顔が置かれる

うーん、やっぱり可愛い。男の癖に寝顔まで可愛いとは……。

「……って、おい。近衛は女だよ。」

と近衛が肩で寝ているので小さな声で自分自身に突っ込みをいれる忘れてた。男子の制服着てるからすっかり忘れてたけど近衛は女の子だった。

頭のなかでは近衛Ⅱ男という方程式が成り立ってあるらしいお陰で鼻血はでねえけどな

そんなことを考えているとキィ…と屋上の扉が開いた

「あら、珍しい」

艶やかな黒髪を揺らしながら颯爽と近づいてくる女子生徒、涼月だ。

「ふふっ緊張の糸が切れたみたいね」

「糸？まあ今日の近衛は変だったけど、あれって緊張したのか。でもなんで？」



「何でって……そんなのあなたと会うからに決まってるじゃない」

「は？」

「彼女は高校生活からスタートしてるの、そのなかで知らない人と話したりする事、ましてやそれがジローくん、あなたなら尚更ね」

だからなんで俺なんだよ

「しかも、スバルには誰にも言えない秘密があるのよ。女の子っていうね」

「……………あ」

ようやくわかった。

近衛は他人と関われないうんじやない。関わらないうんだ。

そうすれば、バレることがないから

「でもこの結果は私としても嬉しいわ。スバルにとって初めての友達ができたんですもの」

「あっ！そんな貴方朗報よ。」

急に涼月はそんなことをいった

「何だよ」

「もうBクラス戦、始まってるわよ」  
あはっ…と笑って涼月はそう言った。

.....

「そう言う事は、先に言えええええ！」

それは俺の魂の叫びだった

## バカとチキンとBクラス（後書き）

大丈夫かなあ？この設定。

矛盾してなきやいいけど…

## バカとチキンと「S4」と(前書き)

あああ…サブタイトルの語呂が悪いいいい…

## バカとチキンと「S4」と

（明久side）

「ん？今…」

「どうした？びびってトイレでも行きたくなったか？明久」

隣にいるゴリラがそんなことを言う

「いや、今近次郎の声が聞こえた気がしてさ」

「あ？……そういやジローと涼月と近衛が居ねえな。……まさか！」

急に雄二の顔が陰しくなる。もしかして…

「何？雄二。何か知ってるの？」

「い、いや！！俺は何も知らん！！」

……おかしい。いつもなら冷酷な詐欺師のごとく嘘をつくコイツがこんな反応を示すなんて…

「さあ、明久！！そろそろ気を引き閉めろ！！……よし！！明久！！逝ってこい！！」

雄二は話をそらすかのように声をあげる。まあ確かに今はBクラス戦に集中しないとね。

じゃあそろそろ行くかあ!!

キンコーンカーンコーン

その音が合図だった。

「よおーし!! 行ってこい!! 目指すはシステムデスクだ!!」

『サー、イエッサー!』

敵を教室に押し込めることが目的なので、とにかく勢いが重要。

「いたぞっ!! Bクラスだ!」

「よおーし!! 生かして帰すなあー!!」

そうして戦いが始まった。

『Bクラス

野中長男

VS

Fクラス

近藤吉宗

総合

1943点

V

S 764点

』

なっ!?! なんて強いんだ!?! まさに桁が違う!

Bクラスの皆は僕らより圧倒的に強く第一陣がことごとくやられていく。

くっ…これじゃあフォローしきれない…

そんなときだった。

「お、くれ、ました…ごめ、んな、さい……」

息を切らして姫路さんがやって来た。全力疾走に着いてこれなかったんだろう。

「姫路さん、いきなりで悪いんだけど…」

「あ、はい、いつて来ます……」

そういうトテトテ走っていく姫路さん。ああ癒される…

「試獣召喚!!」

姫路さんの喚声応えて魔方陣が展開。お馴染みの召喚獣が顔を出す

それにしても……

「へえ、姫路さんの召喚獣って腕輪なんて着けてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので…」

？結構解けたら腕輪……あっ!!

「う、腕輪!?! そんなの私達で勝てるはず無いじゃない!!」

と、腕輪を見てBクラスの二人の顔が一気に蒼くなった

「じゃあ行きます!!」

と言い、姫路さんの召喚獣が駆ける

「ちょっと!?!ま、待って!!」

そんな制止の声も聞かず姫路さんの召喚獣の腕輪は光り、

キュボツ!!

相手の召喚獣が火だるまになった。

そう言えば、腕輪は点数が一定を越えたら手に入るんだった。  
僕には全く縁がないから忘れてた。

「う、ごめんなさい。これも勝負なので!!」

そういうもう一人の召喚獣に斬りかかり、勝負はついた

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!!」

「なっ!?!……くそっ! 姫路瑞希、噂以上に危険だ!」  
これで相手の士気もがた落ち。そして、

「み、皆さん、頑張ってください!」  
という姫路さんの応援で、

「やったるでえーっ!!」

「姫路さんサイコーッ!」

信者急増中。

「よし、じゃあ姫路さんはとりあえず下がって」



「あ、はい」

確か腕輪の特殊能力は点数を結構消費するから今は一旦下がらせて、今のこの状態なら僕たちでも行けるはずだ

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦士だけはするな！！」

そんな相手の指示。とりあえず僕たちの狙いは成功。

姫路さんのお陰だね。

「明久。ワシらは教室に戻るぞ」

「ん？何で？」

戦況を眺めていた所に秀吉がやって来た  
戻る？何かあったのかな？

「Bクラスの代表じゃが…」

「うん」

「あの根本らしい」

「根元って、あの根元恭二？」

「うむ」

根元恭二という男は、とにかく評判が悪い。噂ではカンニングの常習犯。目的の為に手段を選ばないとか曰く、球技大会で一服盛った、喧嘩で刃物はデフォルト装備とか。さすがにそこまで最低のゲス野郎だとは思わないけど…用心に越したことはない。  
……まあもしそんなことしたら、殺すけど。

「あ、明久？なんだか顔が怖くなっておるのじゃが…」

おっとしまったしまった。顔にででたかな？

「大丈夫だよ。秀吉、じゃあ行こう？」  
そう言って僕は歩き出した。

我がFクラスに向かって。



（ジローside）

あれから十分がたった

あのあと俺達は屋上を出て、Fクラスに戻ろうとした。

でも

ドドドドドドっ！！

後ろから聞こえるのは複数の足音。

「殺せエー！！」

「あいつだけはあああ！！」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すケケケケケケケ！！」

多分六人ぐらいだろう………全員女だ。

「良かったじゃない？ジロー君。ハーレムよハーレム。男子なら一度は夢見るものじゃない？」

はあん、ハーレムね、こんなハーレムなら要らない。

「うるせえ！！てかてめえ走れや！！」

ついでに言うとなんは今、涼月と近衛の二人を持って走ってる。

覚えているだろうか？

俺が女性恐怖症と言うことを。

女性に触れられれば、俺は鼻血が出て、失神する

近衛はまだ男として見れているが…涼月がっ……

「あっ！！いや！！ジロー君そんなとこっ…触ったら…」

「死ぬ。マジで死ぬ。」

この悪魔が！！エクソシストさーん来てくださーい！！

そんな調子で俺にちよっかいをかけてくる

わざと体制をずらして太ももを……やめよう。理性が持たん。

「シネエエエ！！」

と、後ろのBクラス女子一人がカッターを……って！

「ちよっ！？待てよお前！？今やってんのは試召戦争だろ！？召喚獣で挑めよ！！」

「うるせえ！！スバル様に手を出しやがって……魂まで殺しきってやる！！」

そう、俺を追って来ているのは「S4」という過激派のスバル様フアンらしい。

俺には今日辺りから何故か、『近衛がBLでその相手が俺』という訳のわからん噂が流れているらしい。

その噂をこいつら「S4」が聞いたらしく、今、こうなってる。

『殺せエー！！』

「うわあああああ！！」

俺は女性恐怖症のせいで今にも失神しそうな体にムチを打ち、走る

え？鼻血？何を今さら、もう一リットルはゆうに出てるぜ

「ねえジロー君。」

「なあ、なんだよ…涼…月」

やばい走った疲れと女性恐怖症のダブルパンチが…

「Fクラス、もう通りすぎたわよ」

なんなの…もう

「だからさあ……何で先にそれを言わねえんだよおおお!!」

## バカとチキンと「S4」と（後書き）

あれ？明久がすこし…という変化を見せました。

ようやくS4の登場です。もうひとつの派閥もAクラス戦が終わった頃には出したいと思います！！

## バカとチキンと総員突撃（前書き）

はあ…なんか、難しいな。

だんだんホントに分からなくなってきましたよ。

## バカとチキンと総員突撃

（明久side）

「うわ…これは酷い」

僕は秀吉の提案で一度、Fクラスに戻るようになった。

でもまさか……

そこにあったのは、半分に折られたシャーペンや消しゴム。足の折られた卓袱台など。とても回復試験が出来るような状態ではなかった。

見るも無惨な状態に沸々とどす黒い感情が漏れ出てくる。

この感覚は……そう遠くない過去に味わった。

殺意だ。

ああもうやだなあ…この感じ。分かっているんだけど抑えられなくて何か、ああああ！！

イライラするううう！！なんか腹立つ！！雄二をぶん殴りたい！！

……ふう、よし。一旦落ち着こう。深呼吸深呼吸。ヒッヒッフウ  
！……え？何？笑えない？



しかしまあ…変だな。何で雄二が居ないんだろ？雄二ならこんな事は見越してそうなんだけどな。

と、考えているところにその人物がやって来た。

「ふむ…やはり、か…」

雄二は入るや否や考え込む。

「ねえ雄二？どうするこれ？」

「いや、これぐらいの事なら別に作戦には支障はないからあんまり気にするな」

「そっか…あ、それはそうとどうして雄二は大体は予想ついてたのにこの教室に居なかったの？」

「実は俺も噂は聞いていたんだが半信半疑でな、確証がねえからあんま気にしてなかったんだ。それといなかった理由は協定を結びにいていた」

「協定って…Bクラス？」

「ああ四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為の禁止ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、こっちとしては体力勝負の方が良いんじゃないの？」

「姫路以外は、な。今日は決着がつくことは無いだろう。押し込んだらそれできっと今日の戦争は終わりだ。そうすると明日の勝負はクラス全体の戦闘力より姫路一人の戦闘力が重要になるからな」

「そっか。だから協定を結んだんだね」

「ああ、この協定はかなり俺達に都合が良いからな」

でもなあ…何かおかしい。

教室から雄二を離れたかっただけならもっとテキトーな協定でも良いんじゃないかな？

こんな事をするところを考えればなんかもっと最低なことできそうだけどな

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうで何かされてるかもしれない」

と言って秀吉は走っていった。

で、それと入れ違いになるように一人の男子が入ってきた。

それは僕の幼馴染み。近次郎だ。

「し、死ぬ…」

「あら！？ジロー君！？大丈夫（棒読み）」

「むっ…ここは…ジッジロー!? 大丈夫か!?!」

「死ね…こ、この悪魔が…」

「ねえ…? 近次郎…どうしたのこのカオス」

そこにいたのは近次郎だけではなくなんと背中には近衛くん。前には涼月さん。というなんとも言えない状態の近次郎がいた

「って大丈夫なの近次郎!?! そんな涼月さんを」

まで言いかけて

「明久っ!!」

と言われ…あっそっか皆近次郎が女性恐怖症って知らないのか

「てかお前はいったい何があっただ? ほらティッシュやるよ」

さっきからずっと黙ってた雄二が切り出す

「ありがと…実はな」

く閑話休題く

「うわ…可哀想」

僕は思わず呻く

「明久にそれ言われたら終わりだな」  
と雄二が言う。

近次郎の話によると、昼御飯↓涼月登場↓戦争始まってる↓S4に見つかる↓逃げ回る↓涼月さんのファンにお姫様だっこをしているところ見つかる↓倍増。

と雪だるま式に追われる人数が次第に増えていったという

しかも、近次郎には女性恐怖症がある。

普通の人なら大喜びの涼月さんのお姫様だっこも近次郎に掛かれば拷問と化す。

きっと死ぬ思いで走ってきたんだろう。

「はぁ死ぬ…」

完全に燃え尽きた顔で近次郎はそういった

「取り敢えず涼月と近衛はこの一応大丈夫な卓袱台とペンと消しゴムで回復試験を受けといてくれ。お前らの手は借りなくても大丈夫だと思ったが結構危なそうだ」

「分かったわ。それじゃあ行くわよ、スバル」

「畏まりましたお嬢様。じゃ、じゃあな。じ、ジロー!!!」

ん？いつの間に近次郎と近衛くんは仲良くなったんだろ？

それにしても近衛くんも可愛いなあ。やっぱり近衛くんも第三の性別。『秀吉の』……

「おい明久。頭の悪そうなことを事考えてないでこいつの話を聞け」

と急に雄二に意識を戻されそちらに目を向けると須川君がいた。

「吉井！！聞いてくれ！！島田が人質にとられた！！」

「えっ！？島田さんが！？」

「くっ…島田はFクラスの中では貴重な戦力だ…よし、ジロー島田を助けに行ってこい」

「ああ分かったよ」

「近次郎side」

「ああ分かったよ」

ようやく体力も意識も戻ってきたしな

「それとだジローこのバカも連れていけ。普段は役たただがまあシール…ごほんごほん。少しは役にたつだろう」

「おい雄二、貴様今僕の事をシールドって言おうとしただろ……！！」

「ああもう行くぞ明久！！」

喧嘩を止めるべく俺は明久を急かす

「へっ？あつ、ちょっと待ってよ近次郎」

俺は明久を置いていくような形で島田のところへと向かっていった



「島田さんっ!!」

後ろにいた明久が吼える

そこにいたのはBクラス男子二人に捕らえられた島田と召喚獣だった

「よ、吉井!!」

なんかドラマのワンシーン見てるみたいだな

「それ以上寄るなっ!! これ以上近付いたらこの召喚獣に止めを刺して補習送りにするぞ!!」

あれ? なんだか明久の顔がニヤついてる気が……

「総員突撃用意いっ!!」

「ちょっとまってえー!!」

「? どうしたのさ近次郎。」

「いやいやいや!! おかしいだろ。助けに来た筈なのになにやろうとしてんの? お前」

すると明久はとても悔しそうな顔で。

「くそっ……!! 僕だって本当はこんな事したくないんだっ!! でも、

僕は指揮官として：やらなければならい事だつてある！！これはっ  
：いつもの仕返しとかじゃなく指揮官としての判断なんだ！！」

……つまりお前は今までの恨みのこの場で晴らしたいと。

「ま、待て、吉井」

「こいつがどうして俺達に捕まったか知ってるか！？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

おおぅ…流石謎の手芸部第五位。殺気がパネェっす

「コイツ、お前が怪我したって言う偽情報流したら、部隊を離れて  
一人で保健室に向かったんだよ」

なっ……もしかして島田って…

「島田さん……」

「な、何よ」

島田の顔は心なしか紅かった。ああやっぱそうか。

「怪我をした僕に止めを指しに来るなんてあんたは鬼かつ！！」

お前はバカかつ！！

「違うわよ！！」

島田のいつもの行動が悪いんだろうが、報われないなあ

「ウチがあんたの様子を見に行っちゃ悪いっての！？それでも心配したんだからっ！！」

おっ！！これは流石に明久も…

「島田さん…それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

「へっ。やっとわかったかそれじゃあおとなしく…」

「総員突撃いーっ！！」

「だからなんでそうなんだよおおお！？」

俺は心の底からシャウトをあげた。

「皆っ！！あれは偽島田さんだ！！変装した敵だぞ！！」

……………もうなんか疲れたよ。

そしてFクラスの面々にボロボロにやられた二人組の男子は

「ギャアアアアア…」

「助けてええー……………」

近くにいた補習教師に連行されましたとき。



「さて、残りは…」

と明久が呟くと、

「皆っ。気を付けろ！！変装を解いて襲ってくるぞ！！」

「よ、吉井…ヒドイ…。ウチ、ホントに心配したのに…」

「白々しい演技はよせ！！島田さんならそんな台詞、吐きはしない  
！！」

「ほんとよ！！本当に心配したんだから！！」

「皆、取り囲むんだ。いくらBクラスでもこの人数なら勝てるから」

「ホントに、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』  
って聞いて心配したんだからっ！！」

……………それはそれで…どうなのかな？。

「包囲中止！これ本物の島田さんだ！」

「島田さん、大丈夫だった？」

うわっ…見てらんねえ…これから起きる惨劇がもう見えるぜ

でもそんなことになるとは思ってない明久が優しく島田に手を差しのべる

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」

やめろ明久っ！！お前が言葉を紡ぐ度にお前の命のカウントダウンがすごいスピードで減ってってるんだよ。

「教室に戻って休憩すると良いよ。つかれてるでしょ？」

あわわわわわわ……

「それにしても、卑怯なやり方だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

そっくりそのままお前に言っただけだよ。ホント。

「あー、島田さん。実はね」

「……………何よ」

ここで何を言うかによって、明久の生死が問われる。

明久は最高の笑顔を作って、

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いてたんだよ」

殺されかけていた。

その後、俺はぼろ雑巾と比べても雑巾の方が綺麗に見えるほどになった明久を抱え教室に戻っていった。

## バカとチキンと総員突撃（後書き）

視点の入れ換えがぐたぐたになっちゃいました……

あと、バカテストをやるかどうかとても悩んでいます

## バカとチキンと協定違反（前書き）

ほんっつとに申し訳ございません。

この頃ずっと朝↓学校↓終わり↓バイトの連続で書く暇が無かったんです。

言い訳しましたすいません。（泣）

## バカとチキンと協定違反

（明久side）

「う……ん。あれ………ここは…」

この汚い天井は……Fクラスか。

「お、気付いたか」

聞きなれた声が近くから聞こえた、近次郎だ。

「うん、一応……いてて……」

「待て明久！！今動くな！！」

急に近次郎の顔色が変わり僕の事を心配します。

え？何、僕そんなヒドイ状態に陥ってたの？

「ねえ最初の一撃で意識を刈り取られたから覚えてないんだけどあのあと僕ってどうなったの？」

と、不意に聞いてみると……

「……………」

顔をそらされ完全に黙られました。

「何！？何があったの！？僕にいったい何が起きたの！？」

それに対して近次郎は、

「聞いて、後悔しないか？」

……………何それ怖い。

この一言によって僕は記憶の修復を自らの手で止めた。

「でも、まあ…あれだよな。ひとつだけ言えるのは…」

「な、何？」

息をのみ、恐る恐る聞く、

「明久。お前、母さんと紅葉にシバかれてたこと心の底から感謝しろよ？」

……………怖っ。もういやあっ！？何それ！？  
あ！！！！  
いったい僕に何がああ

そうやって頭のなかで葛藤していると、

「あ、気がつきましたか？心配しましたよ。吉井くんったらまるで  
〈バキューン〉されて〈ピーー〉された後に的確に〈検閲削除〉を  
〈チーン〉で……………」

「ギャアアアアア！？」

止めてえええ！？精神があああ！？

「姫路。止めてやれ。明久の精神が崩壊しかかってる」

「え？あ、はい。ホントにどうしたんですか？明久君」

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」  
おっこらせ…ぐあ…節々が猛烈に痛いっ！！

「今は協定どおり休戦中です。続きは明日です」

「戦況は？」

「一応計画どおり教室前に攻めこんだ。が、こちらの被害も少なくはないがな」

「そっか…でも今のところ順調なんだね」

「まあな」

「でも相手は『あの』根本恭二だぞ？」

うん。近次郎の言う通りだ。

「あら？根本って人は何か危ないところでもあるの？」

と、後ろにいた涼月さんが聞いてきた

「ああ、根本ってやつはな……」

閑話休題

「ふうん…ありがとね？坂本くん」

ちっ…雄二の癖にいい思いしやがって

「いや、気にするな。と、言うかお前はテスト終らせてきたのか？」

え？まだあれから30分位しか経ってないのに！？

「ええ、『Bクラス程度』ならこれぐらいで足りるわ」

「……………（トントン）」

ん？ムツツリーニ？どうしたんだろう？

「お！ムツツリーニ。何か情報は入ったか？」

そういうとムツツリーニは雄二に耳打ちを始めた

「ん？Cクラスの動きがおかしいだって？」

「……………（コクリ）」

「ふん。おおかた漁夫の利を狙ってるんだろう」

雄二が鼻をならして言う。

確かに勝者は士気は高くても点数は低くなってからなあ…

「まあ仕方ねえ…テキトーにDクラスを攻めこませるぞーとか言っ  
て協定を結べば済む話だ。おい、明久、近次郎、姫路、ムツツリー  
ニCクラスに行くぞ。涼月と秀吉は残っていてくれ。後の作戦に師  
承がでかねないからな」



「りよーかい」「むう…分かったのじゃ」「分かったわ」

秀吉は少しだけ渋々といった感じで返事をした

痛むからだを無理矢理おこし扉を明けると……

「ねえ吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど、どうしてくれんのよ」

何だろう。この理不尽な怒りは。

「それ明久悪くなくないか！？……まあ殆んどが明久のせいだが」

え？僕なんで責められてるの？泣いちゃうよ？

「まあ…いいや。ねえ須川くんに島田さん。これからCクラスに行くんだけど一緒に着てよ」

「良いぞ」

「私もいいわよ」

よし。盾、もとい仲間をゲットした。

こうして須川くんと島田さんを加えた計七人で僕たちはCクラスに乗り込んだ。

（近次郎side）

「Fクラスの代表だがCクラスの代表は居るか？」

と、横にいる雄二が臆しもせず淡々と告げる。

……何でこいつこんな敵意ビンビンな状態で普通に話せんのか？

でもなんだろう……やけに殺意が俺のところに集まってる気が……

あつ……分かった。殺意がこんなヒドイ理由は……

『あのヤロウ殺す……』

何て言う女子の声。多分……S4の方々だろう……あれ？あの光ってる刃物っぽいものって……

「大丈夫？近次郎。凄い顔真っ青だよ？」

当たり前だ。こんないつ死んでもおかしくないこの状況。冷や汗が止まらねえよ。

「私だけど、何か用？」

と言って奥から出てきたのは……こ、こ、なんだっけ……こや……小山だっ……！

あれ？何かこいつ……変な噂無かったっけ？

「ああ。Fクラスの代表としてクラス間交渉にきた」

誰かと……付き合って……とか……ん？誰だっけ？

「クラス間交渉？ふうん…」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

確か……Bクラス代表の………え？

その時。全てが繋がった。

「雄二！！その話は駄目だ！！」

皆がきょとんとした顔でこっちをみる。ヤバイヤバイ…これは絶対…

「不可侵条約ねえ…。どうする？『根本クン』？」

嵌められた。

「当然却下。だって必要ないだろ？」

「なっ！？根本くん！？Bクラスの君がどうしてこんなところに！！」

ニヤリと口元を歪める。…うわっ…ぶん殴りてえ

「ヒドイじゃないかあゝFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言っ—」

「先に協定を破ったのはそっちだからな？これはお互い様、だよな

！」

そう言って後ろからBクラスの連中を呼び、攻撃を仕掛けようとする。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を――」

「させるかっ！！Fクラス須川が受けてたっ！試獣召喚！」

Bクラスの芳野が雄二に攻撃しようとしたが間一髪で須川が割って入ってくれた。

「僕は協定違反なんてして「無駄だ明久っ！！奴等は試召戦争に関する一切の行為を盾にしらを切る！！」くっ…」

「ま、そゆこと♪」

こいつはいつか必ずぶん殴ってやる。

「明久、ここは逃げるぞ！！」

戦闘を行っている須川に背を向けCクラスを出ていく。

「逃がすな！！坂本を討ち取れ！！」

背後から聞こえるサイテー根本の指示

これはマズイ。点数的には絶対勝てないし、頼みの綱の姫路も確か数学の点数は消費していた筈、まあ相手もそれを読んだんだろうが…

「はぁ…ふう…」

「姫路、大丈夫か？」

姫路が段々遅れをだす。運動が得意では無い上に体の弱い彼女にこの全力疾走はきついだろう

「あ、あの、さ、先に…行ってください。」

行きも絶え絶えに姫路が言う。

「雄二！！」

「なんだ明久！！」

「ここは僕が引き受ける！雄二は姫路さんをつれて逃げてくれ！！」

「よ、吉井くん…私のことは…気に、しないでください」

「分かった…ここはお前に任せる」

流石雄二だな。感情に流されず今一番必要な手を打つ。

じゃあそう言うことなら…

「俺も残らせてもらうぜ」

「……………（ピタッ）」

お、ムッツリーニもか、気が合うな

「いや、二人には逃げて欲しい。二人ともまだまだやることはあるでしょ？」

あ、明久が格好いい……だと？

しかしまあ明久の願いだからな。仕方ねえ。

「んじゃうちは残らせてもらっていい？隊長どの？」

「宜しく頼むよ」

そう言っ明久は微笑んだ。

「分かった明久。俺はいかせてもらおうが…」

「生きて帰れ」

それだけ言々と俺は明久に背を向け走っていった

## バカとチキンと協定違反（後書き）

久しぶりに書いたらとても文章がぐたぐたになってることを自覚しました。

これからはバイトがダウンにある日はあまり更新できないと思います。

でも！！絶対頑張って続けます！！

## バカとチキンと脅迫ネタ（前書き）

……昨日更新できませんでした……すいません。orz

だが私は頑張る続ける！！

と言うことでどうぞッ！！



## バカとチキンと脅迫ネタ

「で、どうすんだよ雄二」

俺達が今居るのはFクラス。

あの後何とか敵の包囲網を潜って逃げてきた。

「……………やってやろうじゃねえか」

ボソツ…と雄二が呟いたあと、

「あゝ疲れた」

「よ、吉井くん！！無事だったんですね！！」

「うん。このくらいなんともいであっ！」

あ、明久の足の爪先が踏み抜かれた

「ふんっ」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

「（キッ！）」

「あ。いや、美波」

ん？美波？へえ…島田もやれば出来るじゃないか

「……随分二人とも仲良くなったみたいですね？」

うおっ…怖ええ…癒し系が堕ちた…

「え？これで？」

うんまあ…なんとも言えねえ

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事だったようじゃな」

「うん。ただいま」

「んじゃコイツらが戻ってきた事だし、お前ら」

「ん？」

その場に残っている俺たちに目を向け、

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラスの後にCクラスはきつい」

「だよなあ…負けても終わり。勝っても…か」

「心配するな」

頭を悩ます俺らをよそに雄二が野性味たっぷりの活き活きとした顔で告げる

「手はもう、ある」

何か凄いなこいつ。こっちはこんなところで悩んでるのにこいつはいつも何歩も先をいってやがる

「ククク……そっちがそう来るならこっちにだって考えがあるぜ？」

悪鬼羅刹……降臨

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

その話で今日は終わりになった。



「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校したばかりの俺たちを前に雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスにだ」

「あ、成る程。で、何をするの？」

「秀吉にこいつを着てもらう」

雄二が鞆から何かを取り出す。

それは赤と黒を基調としたブレザータイプのうちの制服（女子用）

……何でそんな物もってんの？お前に何があったんだ？

「秀吉にはこいつを着てもらって木下優子に化けてもらう」

そういうことね。んで圧力をかける、と

「と言うことだ。秀吉、頼む」

「う、うむ」

雄二から制服を受け取り……ってうわあああ！？

……その場で生着替えをはじめた。

うわっ…ヤバイヤバイ…目が離せない。

聞こえる音は衣擦れする音とムツツリーニの指が擦りきれらんじやないかと言うほどのシャッター音と真隣から聞こえるハアハアという……え？

「いいわ…秀吉君の生着替え…ハアハア…男なのに…フフフフ…とても苛めなくなっちゃう…」

……お前か。

ちょっと意外な涼月の気持ち悪さを見付けてしまった。

「よし、着替え終わったぞい…ん？皆どうしたのじゃ？」

「さあな。俺にもわからん」

「おかしなやつらじゃのう」

おかしいのはお前の見た目だ。という皆の声が聞こえた気がした

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「あ、僕もいくよー」

と言って明久達が付いていった。俺たちもいくか

「さて、ここからは一人で頼む」

「うむう…余り気が進まぬのう」

「そこをなんとか…」

「……………分かったのじゃ」

そう言ってCクラスの教室の前に立つ

「心配だなあ…………」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

ガラガラ、と秀吉がCクラスの教室の扉を開けた

秀吉はどうやって挑発するんだろうな？

ははっ静かにしなさい豚ども！！とか？笑っちゃうな

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

……あれ？笑えない。

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上に無い挑発だね……」

もうなにも言わなくても敵意は十二分にあちらに向いてる気がする

『な、何よアンタ！』

このヒステリック染みた甲高い声は小山か：

『話しかけないで！豚臭いわ！』

ええ〜？自分から話し掛けたくせに？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数が良いからっていい気になってんじゃないわよ！何のようよ！』

うん。見事に冷静な判断が出来なくなってる。秀吉様様だな

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢なら

無いの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！？言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

おい待てェ！！Fクラスとは一言もいってねえよ！！

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達に相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

秀吉はいつもまともに見えるけど流石はFクラス。やることが違う。

「ちようど試召戦争の準備もしてるみたいだし、覚悟しておきなさい。私達Aクラスが直々に手を下してあげるから！」

そう言うとかツカツ靴を鳴らしてこちら側に歩いてきた

「これでよかったかのう」

どこかスッキリしたような顔をした秀吉が近寄ってくる

「ああ。流石は秀吉。完璧だ」

まあ…確かに……

『Fクラスなんて相手にしてらんないわ！！Aクラス戦の準備を始めるわよ！！』

作戦は上手くいったな。罪悪感が酷いが。

だが、

「よし、んじゃFクラスに戻ろう。時間が無いぞ」

俺達には今、人の事など気にする余裕はない。  
何せあと十分でまた戦争が始まるんだからな

そして俺らは早足でFクラスに戻っていった。



「壁と道を上手く使うんじゃ!! 戦線を拡大させるでないぞ!!」

秀吉の指揮が飛ぶ。

今はもう戦争中。あの後午後九時から試召戦争が開始され、俺らは  
昨日中断されたBクラス前という  
位置からの進軍を開始した。

雄二の命では『敵を教室に押し込めろ』とのこと。

だが、ここで問題が起きた。

姫路の様子がおかしい。

姫路は指揮官なのだが何故か一向に指揮を出さず気まずそうに俯いている。



これを明久に言ったところ『僕に任せて』と言われた。

……更に心配になったのは気のせいだろうか？

「塩生は極力単教科で挑むのじゃ！！補給も念入りに行え！！」

と、言うわけでいまのところ指揮官は副指令の秀吉。

「左側出入口、押し戻されています！！」

「古典の戦力が足りない！！援軍を頼む！」

チツ…Bクラスは文系が高かった筈。ヤバイなこれは…よし、ここは…

「おい明久ア！！あれを使え！！」

俺がそう合図をすると、明久はいつの間にかもう古典の先生の方へ駆け出していた。

「だあああ！！」

明久は人のかき分けかき分け、目的地にたどり着いた末…

「……ッラ……ずれてますよ」

「ッ！！」

古典の竹中が明らかに動揺するのがわかる。

これはいざという時の為の脅迫ネタ　　ゝ古典教師編ゝ。

だがこんな所で使う羽目になるとは…少々計算外だ。

「少々席をはずします！」

狙い通り少しの間ができる。

「古典の点数が少なえ奴は左側の出入口へいけ！！消耗した奴は補給に回れ！！」

ふう…これで少しは持つだろう。さて、この間に。

「明久」

俺は姫路の近くにいた明久を呼び出す

「ん？何？近次郎」

俺は姫路に聴こえないように…

（……おい明久。今の内に姫路が『ああ』なった理由を調べとけたのむぞ）

（……うん。……分かった）

そう言う明久はまた、姫路の所に戻っていった。

大丈夫かなあ……



**バカとチキンと脅迫ネタ（後書き）**

次は明久視点で行こうかな……？

なんせ明久格好いいし…どうしよ。

どっち視点にしましょうか…

## バカとチキンと壁破壊（前書き）

気付けばもう20話目。

何か早いですね。

なのに文才はちつとも手に入らないこの酷さ。

笑えてきますよね…フフフフフフ（泣）

## バカとチキンと壁破壊

（明久side）

あの後僕は姫路さんの様子がおかしい理由を調べるため  
姫路さんに話を聞くと、

「何でも無いんです！！」

と、言って顔を剃らされてしまう。

……何かあったのは明らかだ。

「姫路さん、何かあったなら言ってくれない？ほら、作戦のことと  
こともあるしさ」

「ほ、本当に何でも無いんです」

そうは見えないよ…何かあったのは明らかだ。

「右側出入口、現国に変更されました！！」

「数学教師は！！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

右側までもBクラスの得意分野に切り替えられると…かなりピンチだ。

「私が行きますっ!!」

そう言って姫路さんが戦線に加わろうとする。

けど、

「あ……」

急に動きを止め、俯いてしまう

姫路さんが見た方向を目で追うと

そこには腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者、根本恭二の姿があった

あいつが何かをしたのか？

そう思い僕は根本くんの周りを観察する。

と、

「あ……」

案の定、根本の手にはあるものが握られていた。

それはただの紙。でも、お金では買えなくて、

ある人にとっては大切に、ある人にとっては無価値な。

そんな姫路さんが一生懸命思いを綴った手紙だった。

「なるほどね。そう言うことか」

思わず口から笑みが零れる

上手い方法だ。合理的で失うリスクも少ない。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合悪そうだから戦線には加わらないようにして、体調管理はしっかりしないとね」

「……はい」

「んじゃ僕は用事あるから行くね？」

そう言って戦線から抜けFクラスへ走っていく

「あ……！」

姫路さんが何かを言いたげに呻く。けどんなことは気にしてらんない

「いやー面白い事をしてくれるじゃないか根本くん」

一つの思いが僕のなかを支配する。

あの野郎、ぶち殺す。



（近次郎 side）

あれから大体10分程経っただろうか。

明久に姫路の事を任せ、俺は戦争に集中していた。

俺のところは一段落ついて他の部隊に向かおうとしたときだった

「近次郎、僕に付いてきて欲しい」

とのことで俺は今、何故かFクラスに居る

明久から話を聞いたところあの毒キノコは姫路から手紙を奪い、それを脅しとして使っているらしい。

全く、ホントバカなやつだよ。なにせ――――

「どうしようかな…撲殺？ いや、血痕残るかな…うん、やっぱりムツリーニに頼むのが一番だよね…フフフフフフ」

――なにせ明久の事を怒らせるなんて…ホントバカだ。

「で、何のようなんだ？」

存在を忘れていたが、今は雄二に交渉中。

「うん、僕…」

明久はしっかりと雄二を見据え、

「根本くんの制服が欲しいんだ」

と、言いはなっ……え？

「…おい明久。それじゃあただの変態さんだぞ」

そう言う明久はハツとし

「ゆ、雄二。勘違いしないで！！今は…」

「まあ…良いだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやるよ」

あ、受け入れられちゃった。何か明久には元々そっちの趣味があったことは知ってると言わんばかりの態度だな。

「で、それだけか？」

「いや、それと姫路さんを今回の先々から外して欲しい」

その話を聞いて雄二が顔をしかめる。

「理由は？」

「……言えない」

「それは……どうしてもなのか？」

「うん。どうしても」

雄二は顎に手を当てて考え込む。

実際今明久はかなりの無茶をいつている。  
俺だったら多分頼みは聞けないだろう。

「頼む!!雄二」

明久は雄二に深く頭を下げた。  
こいつはここまでして……

「雄二、俺からも…頼む!!」

明久につられて俺も頭を下げる。はぁ…何か損な役割ばっかな気がする。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路にやってもらう筈だった役割をお前らがやれ。失敗は許されない」

雄二の口調からして、俺たちの失敗がFクラスの負けに繋がるといつて良いだろう。

「で、やるか？」

ニヤリと、口元を歪めこちらを見る雄二。

そりゃあ勿論、

「絶対成功させる!!」

「よし、いい返事だ」

「んで俺たちは何をすればいいんだ？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。教科は何でもいい」

「皆のフォローは……無さそうだな」

「ああ、しかも出入口は今のまま」

「難しいこと言うな……」

「ま、頑張れや。んじゃな」

「あれ？雄二はどこかに行くの？」

「ああ。Dクラスに……『アレ』をな」

アレ……って室外機の事か？

いったい何に使うんだか。

「明久」

ふいに、雄二は出ていく瞬間明久に話しかけていた

「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリーニのように、お前にも秀でている部分があるんだ。ジローもまたしかりな。だから俺は、お

前たちを信頼している」

「……雄二」

うん。やっぱりなんだかんだでこいつも良いヤツだよ。ま、言うまでもないけどさ。

「作戦に変更はない。しっかりやれ」

そう言い残し、雄二は出ていった。

だがこいつの俺と秀でている部分ねえ…考え付かん……！

「……あ」

そんなとき、明久が何かを思い付いたかのような声を漏らした。

「……でも痛そうだなあ…」

明久はぶつぶつと一人で何かを呟いたあと

「……よっしゃ！あの外道に目に物見せてやる！！」

と、一人で意気込み、

「ねえ近次郎」

「……僕と、戦ってくれ」



「二人とも、本当にいいんですね？」

Dクラスに試験召喚勝負の立会人として呼ばれた英語の遠藤先生が俺ら二人に念を押す。

「はい。もちろんです」

「ああ、明久とは一度やってみたかったしな」

「でもそれならDクラスで戦わなくても良かったのでは？」

この先生の言う通り、今いるのはFクラスではなくDクラス。  
まあ：Dクラスの教室にFクラスの生徒がいて戦おうとしているんだ。

状況が読めなくても当たり前だな

「仕方ないんです。明久は観察処分者です。Fクラスで戦えばクラスがボロボロになっちゃうんですよ」

元々ボロボロだが。

「でも——」

「いいんです。やらせてください。僕は今、戦わなくちゃいけないんです」

明久の有無も言わさない口調。これは本気だなあ。

「――分かりました…喧嘩でお互いを知るのも大切かも知れませんが、承認します」

その言葉が、合図。

「試獣召喚!!」

二人の呼び声に答え足元に浮かぶ幾何学的な模様。

そしてその中から現れるのは二匹の召喚獣。

一匹は木刀と改造制服で身を包んだ召喚獣。

もう一匹はボクサーのような格好で構えをとる召喚獣。

「行けっ!!」

明久の召喚獣がいきなり突っ込んでくる

が、

俺の召喚獣はあっさりそれを避け明久の召喚獣の攻撃は、俺の後ろにある壁に当たる

ドンッ！！

「ぐ——うっ！」

明久の顔が苦痛に歪む。そりゃそうだ。

明久は観察処分者。フィードバックがあるからな

「——んのおっ！」

更に明久はモーションの大きな攻撃でまた俺を攻撃をしてくる

ヒョイ。

そんな擬音が聞こえても良いぐらいにまた俺の召喚獣は明久の召喚獣の攻撃をすんなり避ける

ドンッ！！

また明久の召喚獣の攻撃は壁を殴る

『お前らがいい加減諦めろよ。ほんっと暑苦しいことこのうえねえよ』

遠くから聞こえてくる毒キノコの声

『ハッ：軟弱なBクラス代表サマはもうギブアップか？』

と、聞き慣れた我がFクラス代表、坂本雄二の声



ドンッ！

『はア？ギブアップするのはテメーだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

あ、今ちよつとイラッときた。

『…………お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

「はああああ！！！」

ドンッ！！

これで、四度目の攻撃。

すこし血の臭いがすると思ったら明久の拳からは結構な量の血が滴り落ちていた。

『…………さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやってんのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃねえのか?』

『けっ!言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ!』

『…………体制を立て直す!一旦下がるぞ!』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げんのかよ!』

「明久、そろそろだ」

「う、うん」

「坂町君、吉井君、あなたたちはいったいなにをしているんですか?」

やべえ…バレかかっている…早くしろ!!明久!

「おおおおおっ!」

明久はこの一撃に全てを賭けるように声をあげ突進する。

ドンッ!!…………ピシピシ

シーン。

静まり返る教室。

やっべえ!!明久のやつあとすこしなのに!?

くそっ仕方ねえ!!

「明久っ!! その召喚獣動かすな!!」

俺は明久に釘を刺す。

「えっ? わ、分かったけど…何で?」

「…………明久。先に言っとくぞ…」

「——悪い」

俺はそう言って、『明久の召喚獣を媒介に壁を殴った』

ドガアアアン!!

まあ…俺の場合点数が高い訳だから壁は結構簡単に崩れた。

でも、

「いっつつつだアアアアアい!?!? 何これえええ!!!!!! 腕がつつ!!!! 右腕が熱いイイイ!?!」

……約一名の犠牲を払って。

「んなっ!?!」

崩れた壁の向こうから見たのは驚く毒キノコの顔。

今はもうBクラスの本隊は雄二を打ち取るために出払っている。

そのため今はまたとない根本を討ち取る機会。

「根本！覚悟！」

「Fクラス坂町が——」

「Bクラス山本が受けます！！試獣召喚！！」

チッ！！近衛部隊かつ！！

まだ教室に残っていた近衛部隊に俺たちの奇襲が行く手を阻む。

まだ根本のところまでは20メートル位あるな。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！！」

取り繕うように俺らを笑う根本。

それにしても対して俺は、

「……ああ。確かに奇襲は失敗したな」

「はあ？なに言ってるんだ？強がってんじゃねえよ」

「いや？別に強がってなんかねえよ。ただ俺は『ありのままの事実を』述べただけだぜ」

「意味のわかんねえ事を…やっちゃまえ」

根本の合図でBクラス生徒のそれぞれが召喚獣を呼び出す。

「これで、おわりだな」

「ああ、これで終わりだよっ!!」

俺がそう言うと同時に

ダンダンッ!!

と、窓から二つの影が現れた。

一人は体育教師、もう一人は、我がFクラスに存在するエロの伝道師  
ムツツリーニだ。

「……………Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ」

「……………Bクラス代表、根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「行けえええ!! ムツツリーニイイ!!」

明久の雄叫び。

今はもう完全に丸裸の根本恭二。守ってくれる駒はもういない。

「――試獣召喚」

|   |      |      |   |
|---|------|------|---|
| 『 | Fクラス | 土屋康太 | V |
|   | Bクラス | 根本恭二 | S |
|   | 保健体育 | 441点 |   |
|   | 203点 |      | V |
| 』 |      |      | S |

ムツツリーニの召喚獣が持っている小太刀で相手の召喚獣を一閃。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

## バカとチキンと壁破壊（後書き）

今回はバカテスの本編を見てないと分からないところがありましたね。スイマセン。

次からは気を付けたいです！！

## バカとチキンとメイド服(前書き)

久しぶりの一日二回更新。

そして今は授業中(笑) (\*≧≦≧≦≧≦\*)



## バカとチキンとメイド服

「明久、随分と思い切った行動に出たのう」

「うう痛いよう…痛いよう」

「はあ…結局破壊したのは俺だからな…どうしよ」

これで観察処分者にされるやもしれん

「なんとも…お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと誉めてもいいと思うよ？」

「あとの事を考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃったな」

「……それ、遠回しにバカって言ってない？」

ごもつともで。

……普通は壁破壊など行わない。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩をバンバンと叩く  
馬鹿が強み…嬉しくねえ

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といか。な、負け組代表？」

さっきまでの強気が嘘のように床に座り込んだままの根本。いい気味だな。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の言葉に周りはざわつき始める

はあ…分かってはいるけど…せっかくのBクラス。惜しいなあ

「落ち着け、皆。前にもいったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここは通過点に過ぎない」

「うむ、確かに」

「ああ、だからこいつに『ある条件』を飲んでもらえば解放してやる」

その言葉で皆の表情にも納得が生まれる。

まあこれである程度はこいつの性格を理解したことだろう。

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。正直お前は去年から目障りだったからな」

酷い物言いだが本人さえ否定しない。

それだけのことをやって来たんだろう。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

「Aクラスに言って試召戦争の準備が出来てると言ってこい。そうすれば設備に関しては見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまで戦争の意思と準備があると伝えてこい」

「それだけで……良いのか」

疑うような根本の視線。

『当初』の予定ではそれで良かったんだが。

「ああ。Bクラス代表がコレを来て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二は取り出したのは、先ほど秀吉が来ていた女子の制服。

これは明久の要望のための行為。

分かっているとは思いが決して雄二の趣味ではない……はず。

「ば、バカなことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……！」

根本が慌てふためく。まあ嫌がるよな。

でも、

『任せろ！！Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！！』

今ここにお前の味方は居ない。

「ちよっ！！ギャー！！触れるな変態！！ぐふう」

Bクラス生徒に腹パンを入れられようやく静かになった根本の制服を脱がしているとき、

「待って！！」

突如上がった凜とした女の声。

涼月だ。

まさか…この毒キノコを助けようと言うのか……！

この無価値なキノコを無慈悲なデビル涼月が助けるのか！？

「誰が持ってきて置いてったのかは知らないけど……こんなところに何故かメイド服が…」

訂正。悪魔はどこまで行っても悪魔だった。

「ねえ坂本くん。折角なんだしこれ着させましょうよ。ね？秀吉君の着た制服を着せるのも嫌だし」

うおお…普段超優等生气取ってる涼月がここまで剥き出すとは…結構涼月も切れてんのか？

「あ、ああ分かった。じゃあ明久。ほらよ」

そう言って明久に投げ渡したのは根本の制服。

そのまま明久は根本の制服の中を漁り、

「ん、あったあった」

そう言って取り出したのは一通の手紙。アレが姫路が書いた……

ピラッ…

窓から入る風のせいで姫路の書いた手紙がこちらに飛んできた。

『小学校の頃から貴方の事が気になっていました。私は貴方の事が好きです』

そんな一文が俺の目に飛び込む。

小学校から一緒って言えばもうこれは明――

「あ、なか見ちゃった？」

「わ、わわ悪い！！見るつもりはなかったんだよ！！まさかお前宛の――」

「くそう……雄二が妬ましい。殺したい。殺したい！！」

「……は？。お前……この手紙、誰宛だと思ってんの？」

そう聞くと明久はきよとした顔で

「え？雄二でしょ？」

「……………ダメだこいつ」

ため息しかでねえ。

「え？まあいいや。ねえ近次郎。これどうやって着けるのかな？」

そう言う明久の手にはメイド服。

確かに分かんない

「ぐう……や、やめろ」

ありゃ？さっきの腹パン浅かったのか？

「「寝てろ」」

がすっ！！

「ぶぺらっ！！」

「よし、じゃあ続きに取り掛かろうかな……えーっと……」

そんなこんなで明久と一緒に悪戦苦闘していると……

「私がやってあげるよ」

多分Bクラスの生徒であろう女子がそう言ってくれた。

「悪いな」「ありがとう。助かるよ」

二人でその女子にそう言ってFクラスに向かう。

「あ、折角なんだし、可愛くしてあげてね」

「それは無理。土台が腐ってるから」

ははは、確かにな。

「じゃ、宜しくね」

明久のその言葉を最後に俺たちはFクラスに向かった。



今俺が居るのはFクラス。

「落とし物は持ち主に、っと」

姫路の席においてあった鞆のなかに、明久は手紙を戻す。

「よしじゃあ帰——」

「吉井くん!!」

「え？」

うわっ…よりによって本人か。

多分俺はお邪魔虫になるだろうから退散しますかね。

「明久！俺は用事あるから先に行くぜ？」

「ちよっ！？待ってよ近次郎！そのひめ——」

俺はそう言ってクラスから出ていって何故か屋上に向かう。  
強いて言えば気分的に。

俺はすこしだけコンクリートの剥がれた階段を上っていき。  
最後にある鉄製の重い扉を開く。

ギー…

鉄と鉄が擦れるような不快な音のあと、扉の隙間からは生暖かい風が入ってくる。

「おっ、見事に誰も居ない。ラッキー」

今俺が居る屋上は大体は授業をサボったりするやつの名所なんだが、  
今は誰もいなくて静かだ。

「はあ…今までの喧騒が嘘みたいだな…」

ふと、そんな言葉を漏らす。

「そうね。でもまたすぐに、ね？」



「――ッ!?……脅かすなよ」

大体の人はわかってくれているとは思うがこの声の主は神出鬼没の涼月奏。

と、

「むう、ジロー探したぞ」

その執事。近衛スバルである。

「で、何のようなんだ?」

俺がそう訪ねると涼月は、

「次は、どうなると思う?」

次、とは恐らくAクラス戦の事だろう。

「勝てる、とは言えないが元々雄二は勝てない戦いはしないだろ。あいつを信じるしかねえな」

とりあえず本音を言う。何か嘘ついてもバレそうだし。

「そうね。じゃあ貴方はどう思ってる?」

「は? 何に対してだよ」

「Aクラス戦に関してよ。貴方は、勝ちたいか、勝つのか」

負けがねえ…

「え？そりゃあ…か…ちたい…かな？」

「ふうん…：貴方は自信がないのね。やっぱりチキン野郎だわ」

うぐう！！

「そ、そう言うお前はどうかんだよ」

俺がそう聞くと

「分からない」

「は？」

「分からないの」

「おいおい…言った本人がそれかよ…」

「だって彼、弱点はあるもののほんつと流石は元神童。私の予想を大幅に越えてくるのよ」

「だから、分からない」

この詐欺師も顔負けの頭脳をもつ涼月にここまで言わせるなんて…  
すげえな雄二は。

「ところでね、ジロー君」

涼月はさっきの神妙な顔とは一変。にんまりと笑う。

まるで子供が新しい玩具を見つけたような顔で。

「貴方に朗報があるの」

その一言で俺の中の警戒レベルはマックス。

オーイ、シエルターを展開しろー！！

「なあ…涼月。お前の朗報は俺の凶報でしか無い気がするんだが」

「あら？今さら気がついたの？スバル、お願い」

そう言うのと、今まで気まずそうに下を向いていた近衛がついに決意したように顔をあげる。

「じ、ジロー。落ち着いて聞いてくれ」

この近衛の口振りからしてただ事じゃないことをいち早く察知。

A○フィールド展開っ！！

近衛は執事服のポケットから白い一枚の紙を取りだし、俺に突き付けた。

その瞬間。俺の中のシエルターなど一瞬で吹き飛んだ。

そこにあったのは、

『2年Fクラス、坂町近次郎。この者を観察処分者に認定する。』

さっきまで生温かった風が妙に冷たく感じる。

「嘘だろおおおおお！？」

そしてこの俺の叫びは屋上を支配した。

## バカとチキンとメイド服（後書き）

やっちゃった…としか言いようがないですね。

まさかの観察処分者認定。

でも打たれ強い近次郎なら頑張れるっ!!

## バカとチキンと幼馴染み（前書き）

あーとても眠いです…でも負けない………！！

と言うわけで第22話、どうぞっ！！

## バカとチキンと幼馴染み

……あの最悪の通知の二日後。

残すはAクラスのみとなった俺らはもうじきお別れになる

『予定の』Fクラスで最後の作戦会議を行っていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの奴等には無理だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

……おいおい…あれマジで雄二か？

少なくとも俺の知る雄二はあんな素直に礼を言ったりはしない。

すると明久も同じことを思ったのか、

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ俺でもそう思う。だがこれは俺の偽らざる気持ちなんだ」

こいつにそんな事を言われると……何か、こうクルものがある。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、勉強だけがすべてじゃないって事を教師共に見せつけてやるんだ!!」

『そうだそうだった!!』

『勉強だけが全てじゃねえんだ!!』

最後の戦いを前に、皆の気持ちは一つになっているような、そんな気がした。

「皆ありがとう。そして今回の戦いなんだが…これは一騎討ちで決着をつけたいと思っている」

主力メンバーは皆聞いていたから驚いていないが…

『どういう事だ?』

『それで勝てるのかよ』

当然周りはざわつき始める

「皆、聞いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ代表同士だしそれはあたりまえなんだが…

「バカの雄二が勝てるわけがなあああ!?!」

あっ…馬鹿…

そう言った瞬間明久の眉間ジャストにカッターが投げられる

シュッ（雄二がカッターを投げる音）

バシッ（明久が真剣白羽取りをした音）



パチパチパチ（皆の拍手の音）

「雄二貴様っ！！今僕を殺すつもりだったろう！？」

「おいおい…人聞きの悪いことを言うなよ。俺は明久がとれると思つてたから投げたんだ。信頼は大切だろう？」

「それは信頼とは言わないっ！！」

「まあ明久の言う通り確かに翔子は強い。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれない」

「……あれ？認めてんなら明久に Cutter 投げなくても良かったんじゃない？」

「だが、それはDクラス戦でもBクラス戦でも同じだっただろう？」

「だから今回も必ず勝つ！！俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

『おおおおお！！』

この演説で皆のテンションはピーク。

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

日本史？霧島は世界史が苦手なのか？いや、いくら苦手でも雄二は負けるはず……

「ただし、内容は限定する。レベルは小学校程度。召喚獣の勝負はなしの純粋な点数勝負とする」

ふむ……これならミスをしない限り雄二にも勝ち目はある。

「でもそれだけじゃ雄二負けちゃうんじゃない？」

確かに翔子はそうだ。

簡単なのは霧島にとっても一緒。

これでは負ける可能性がまだまだ高い。

「おいおい明久。俺がそんな運に頼るような真似をすると思うか？」

「え？じゃあ霧島さんの集中力を乱す方法でも知ってるの？」

「いや、俺が勝てる理由は、『大化の改新』」

「それって…大化の改新の時に誰が何やったとか？」

「いや、もっと簡単な明久でもわかるやつだ」

「明久でもわかるやつ……年号かのう」

「おっ。ビンゴだ秀吉。」

ああ、無事故だから645って奴か。簡単だな。

「この問題が出たら、俺たちは勝てる。あいつは必ず、間違えるからな」

「なあ思ったんだが……」

「ん？何だ近次郎」

「お前……霧島と仲が良いのか？」

さつきからあいつだの翔子だの……とてもじゃないが赤の他人の呼び方ではない。

「あああいつとは——幼馴染みだ」

「あつ……お前それは」

ここで聞いてしまった俺も馬鹿だが素直に答えるこいつもこいつ

こいつが一番理解してるもんだと思ってたが

勉強くくくくくくくく越えられない馬鹿の壁くくくくくく遊び  
くくくくくくくく憎しみくくくくくくくく越えられないF  
クラスの壁くくくくくくくく彼女作り

と言いかにも最低の二文字が浮かぶ性格をしていることを。

「総員、狙ええええ！」

「なっ！？何故明久の声で皆上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！！Aクラスの前に貴様を殺す！！」

……こんな感じに目を血走らせている明久だがFFF団には所属していない。

雄二のことになると…ね。

「俺がいったい何をしたと！？」

はぁ…こいつらホントなんなんだ？こういうときだけすげえ皆の気持がシンクロしてる。

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川くん。靴下はまだ早い。それは押さえ付けた後に口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

……何でこんな奴が幼馴染みなのかたまに不思議に思う。

「あの、吉井くん」

そんなアホなやり取りをやっていると姫路が明久に話し掛けていた。

「ん？何？姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。綺麗だし」

「……………」

あ。

「え？何で姫路さんは僕に向かって攻撃体制をとるの？って美波！？教卓を投げようとししないで！！」

あの姫路までがここまで毒されるなんて…流石はFクラス。毒される速度が違う。

「まあまあ落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いてこのカオスを静まらせる秀吉。ナイスだ。

「む、秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えるのじゃ。霧島が「男に」興味があるわけなからう」

「あ、そっか」

「むしろ可能性があるのは……」

皆の目が二つの答えにたどり着く

「え？私何かしましたか？」

「あら？皆さんどうしたの？私に何か付いてる？」

ああ付いてるよ悪魔がな。

「とにかく、小学校の頃に俺は翔子は間違っ  
て嘘をおしえてしまっ  
たお陰で今回の勝機が出てきたわけだ」

「そしてそれを利用してあいつに勝つ。あいつは一度覚えたことは  
忘れないからな。そうすれば俺たちの机は」

『システムデスクだ!!』

そうして俺たちはようやく、Aクラス戦に突入することになった。

## バカとチキンと幼馴染み（後書き）

うわっ……見事にそのまま。

これこそヤバイですね。

誤字脱字、感想、案など書いてくれると嬉しいです!!

## バカとチキンと首脳陣（前書き）

この頃かなり短いですよね…読みごたえなくてすいません。

あの…短くてもいいから早くと  
遅くてもいいから長くだったら  
どちらが良いですかね？



## バカとチキンと首脳陣

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表の雄二や俺たち主力メンバーの首脳陣揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いなの?」

現在、雄二と交渉のテーブルにいるのは秀吉——の双子の姉。木下優子。

「勿論。俺たちFクラスの勝利だ」

木下が怪しむのも無理はない。下位クラスに位置する俺らが、一騎討ちで最上位のAクラスに挑むのだからな。

「試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな」

ここまでは予想通り。こっからが俺たちの交渉だ。

「ところでCクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り、Aクラスに喧嘩を売ったものの半日で決着がついたらしい。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来てた『あの』……」

「ああ、アレが代表のBクラスだ」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから3ヶ月間準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね」

そう、この戦争に負けたクラスは3ヶ月間の準備期間をしなければならぬ

まあ戦争が泥沼化しないための対策なんだろうけど

「知ってるだろ？実情はどうであれ、対外的には『和平交渉にて終結』ってなってることを。規約には何の問題もない。……BクラスだけじゃなくてDクラスもな」

「……それって脅迫？」

「人聞きの悪い。ただのお願いだよ」

うわっ雄二の悪役面がさらに悪者っぽくなってるし……

「うーん……」

木下が頭を悩ませていると…

「……受けてもいい」

「おわっ!？」

突然現れた、涼月のような落ち着いていて、それでいて凜とした声。

「……雄二の提案、受けてもいい」

こいつが皆の憧れの的。霧島翔子である。

「え?……はあ…代表がそう言うんなら…分かったよ。その勝負、  
うけるよ」

「本当!？」

「でも、こちらからも条件。そうだな…うん。代表同士の一騎討ち  
じゃなくてお互いに7人ずつ出して先に四回勝った方が勝ちって  
言うのならないよ」

「くっ…」

見た目とは裏腹にきっちりこっちを警戒してやがる。

「なるほど…こちらから姫路か涼月か近衛が出る可能性を考えて…  
か」

「うん。多分大丈夫だとは思うけどね。代表？これで良い？」

「……うん、ありがとう優子。雄二、私からも条件がある」

「条件？」

頷いて、雄二の横にいる姫路を値踏みするかのような視線で一瞥したあとこういい放った。

「……負けた方はなんでも一つ言うことを聞くこと」

や、ヤバイこれはピンク色の世界が展開される可能性も……

いやいや待て、俺までそんなこと考えてどうする……冷静になるんだ……！！

おっとヤバイ。こんなことを考えてたら結構話が進んでたよ。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！姫路さんが了承してないじゃないか！！」

……お前は完全に霧島をそっちの奴と考えてんだな…

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

自信満々のこの台詞。やはりこいつはなにかを知っているようだ。

……いったいなにを隠してんだ？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

なんか……想像してたのとは違ったな。

でもなあ……

俺は溜め息をついて涼月の方を見る。

「あら？なに？ジロー君」

「いや、なんでも」

……こいつも霧島みたいな奴だったらなあ……もつと良かったのに……

「それでもないわよ？」

「なあ、だからさ、心読むのいい加減やめてくれない？」

「ふふ……それよりも今の言葉絶対に忘れないでね？」

涼月は軽やかにターンし、来た道に戻っていった。

ん？そうか、交渉は終わったんだな。よしじゃあ俺も戻りますか。

そうして俺たちはAクラスをあとにする。  
俺らの試召戦争の終結は、すぐ目の前まで迫っていた。

## バカとチキンと首脳陣（後書き）

危ないです……ホントに文がぐちゃぐちゃに……

どうしましょう……これじゃあお気に入りがゼロになるのも時間の問題ですよ…

誰が……お願いします……案を……案を下さいイー！

## バカとチキンと愉快犯（前書き）

ようやくのAクラス戦。

長かったなあゝ



## バカとチキンと愉快犯

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はここ数日の戦争でお世話になっている、  
Aクラス担当かつ学年主任の高橋先生が立会人を務めている。

「ああ」

「……問題ない」

…ちょっと話が逸れるが、今回のAクラス戦で戦うのは  
明久、姫路、秀吉、ムツツリーニ、近衛、涼月、雄二だ  
んで俺は補欠。

補欠なんて要らんだろ。と、雄二に抗議してみたところ

「いや、多分必要になるから、頼む」

と、苦々しい表情でいわれてしまった。

だから俺は自分の一番得意な教科の数学を重点的に回復しておいた。  
そして今から戦うわけだがクラスはAクラス。  
まあ腐った畳じゃ格好つかないしな。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「あたしがいくよっ」

向こうは木下。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟、秀吉だ。

お互いがお互いを知り尽くしていると言って良いこの二人。

この後の心理戦が勝敗を決め――――

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

ん？ なんか……やばくね？

Cクラスの小山ってこの前の……

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れて行ってどうするんじゃ」

……あいつが女装して罵倒しまくったやつだよな…

『姉上、勝負は————どうしてワシの腕をつかむ？』

『アンタCクラスで何してくれたのかしらあ？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになってんのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して——あっ…ちがっ……！！その間接はそっちには曲がらなっ……！！』

ガラガラガラ

扉を開けて木下が戻ってきた。

……所々にケチャップを付けて…

ああ……これか。雄二が言いたかったことは……。

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人出してくれる？」

「い、いや…うちの不戦「私が出るわ」……んな!？」

雄二がその申し出を断ろうとしたとき、涼月が拳手をした。

「お、おい。涼月!! お前自分の番どうすんだよ!!」

「うーんそうねえ…ジロー君？」

涼月が妖しく笑う。

……涼月のこの笑顔。俺は知っている。

「な、何だよ」

「私の番。宜しくね？」

………もうほんと死ねよ。

「じゃ、頑張ってね」

クルリ、と後ろを向き、Aクラスを中心部分にあるいていく涼月。

「……お前もな」

「それじゃあ、始めましょ？木下さん」

「……ええ。じゃあ先生。お願いしますっ」

「わかりました。では古典の勝負、始めてください」

「試獣召喚っ」

「試獣召喚よ」

二人の声により二匹の召喚獣が現れる。

一匹は木下の召喚獣。

秀吉の召喚獣みたいな見た目だが木下の召喚獣はなんか目がきついな。

対するは涼月の召喚獣。

……えっ？あれが…

そこにいたのはドレス姿の召喚獣。

見た目はまるで天使を連想させるかのように美しく凛とした態度も涼月まんまだ。

皆はこれが当たり前と思うだろう。

——俺以外は。

だってあのデビル涼月だぜ？。魔王が出てきてもおかしくない。

でもその召喚獣にもなっとくする部分がひとつだけ。

涼月の召喚獣は何故か顔に仮面を着けていた。

まあ目の部分だけだが。

優等生を装っている涼月にはかなりのお似合いだ。

「流石はお嬢様だね。本人ににて綺麗だよ」

「あらそう？木下さんのもなかなかだと思うけど？」

「じゃあ始めましょうか」

「ええ、じゃあ——いくよ!!」

先手をきったのは木下だった。

持っているランスで涼月の召喚獣の眉間を貫こうと一気に攻める

しかし、涼月の召喚獣は口元を薄く笑みで歪めながら、まるでダンスを踊るように避け続ける。

「あらあら、全然当たらないわね」

スカッスカッスカッ……

突きを繰り返す木下の召喚獣。段々動きが遅くなってきた。

「くっ…このお…はっ!!」

「何で点数は高いのにこんなに当たらないのよお!!」

「あら？木下さん。私の点数を見てないの？」

「はあ？何を言って……………え？」

木下が点数が表示されているディスプレイに目を移す

するとそこには

『Aクラス  
Fクラス

木下優子  
涼月奏

VS

364点

652点

』

「……何、これ……」

圧倒的点数に木下の表情が絶望に染まる。

「ごめんなさいね？ たった二時間の勉強でこうなっちゃったわ」

……はあ。

「実はね、」

と、急に涼月が切り出した。

「私の腕輪の能力って、フィードバックの追加なのよねえ……」

ボソッとそんなことを呟いた。

「え？」

木下の顔が更に絶望に染まる。

「この点数差で、この至近距離で、致命傷の部分を狙えば、どうなるのかしらね」

「ご、ごめんな…さい」

「え？何で謝っているの？私には謝らなくても良いんじゃない？別に悪いことしてないじゃない」

「え？…だって…」

「ほらそのケチャップは何？」

「ケチャップって……………あ！」

「そう、それよ」

「でもアレはあの愚弟が…………」

「そうね、確かに秀吉君は貴女の評判を落とすようなことをしたわ」

でもね、と涼月は言葉を紡ぐ。

「でも、もっと良い方法はあったんじゃない？ほら話し合いとか」

「……………はい」

「だから誓って？もうあんなやり方はしないって」

「……………はい」

「ふふっ…それじゃあ」

これで一件落着だな。んで涼月が優しく相手に止めを刺せば――



このとき、俺はすっかり忘れてい。

涼月は、このお嬢様は――

「それじゃあ棄権します」

誰よりも完璧で誰よりも愉快犯だと言うことを。

## バカとチキンと愉快犯（後書き）

うーん…自分では涼月らしさを出したと思ったんですけど……

違うな。と思ったら感想に載せてくれると嬉しいです。

でわでわ

## バカとチキンとアンラッキー（前書き）

はあ…やばいです。文字数が少ないですね。

では、どうぞ。

## バカとチキンとアンラッキー

『は?』

皆の顔が呆気にとられる。

「ん? だから、棄権します」

『えええええええ!?! 何でえええ!?!』

「だってそっちの方が面白くない?」

「(。ロ。)...」

「その...だめ、かしら(上目遣い)」

「いえ! 大変素晴らしい決断だと思います!! (A、Fクラス両方)」

.....バカどもが...

「と、言うことで、私の負けです。高橋先生」

「わかりました」

『Aクラス      木下優子      V      Fクラス      涼月奏  
WIN      652点      』

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

そういつて前に出たのはAクラスの佐藤美穂、だったかな。

「よし、此方からは——明久。行ってこい」

どうやら此方からは明久のようだ。

「え!?! 僕!?!」

明らかなる動揺。まあこれで負けたらまあ勝利から遠ざかるからな。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと?」

「ああ。もう隠さなくても良いだろう。この場にいる全員にお前の本気を見せてやれ」

……………おい雄二。

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことがないが』

『いつものジョークだろ？』

味方であるはずの仲間からこんなことを言われる始末。

「吉井君、でしたか？ 貴方、まさか……」

明久の話を聞いて戦<sup>おの</sup>く佐藤美穂。

「あれ、気づいた？ ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「そう、僕は、ほんとうは——」

「左利きなんだ」

その瞬間、場が凍った。

「ふふふふ……吉井君。なかなか面白いわね」

涼月が必死に笑いを堪えている。うん、ギャクセンの高さは俺も認めるよ。

「……………試獣召喚します」

なんか申し訳なさそうに召喚する明久。  
正直見てらんない。

「……………試獣召喚します」

イントネーションは一緒だが明らかにこちらは呆れてますオーラが出ている。

雄二に乘せられただけなのに……哀れ。

『Aクラス      佐藤美穂      VS      Fクラス      吉井明久

389点

62点

』

……うん。更に冷たい空気に包まれた。

「では、茶番をさっさと終わらせましょう」

額に手を当てながらそう呟く佐藤美穂と

「うううう………何で僕だけこんな目に……」

と、半泣きになりながらも必死に攻撃を避け続けさせる明久。

「止めます」

ザッ!!

素早い踏み込みで一気に接近され切り払われる

筈が、

ガキン!!

「あつぶなあ!？」

何とか木刀で攻撃を弾いた。

「うわぁ…これもう使えないよ」

今の攻撃のせいで真の部分が大きく削れてしまい、もう木刀は使えなくなってしまった。

でも、

「明久、お前そっちの方がやりやすいんじゃないの？」

「あ、分かる？さっすが幼馴染み」

その時、明久が雄二のような顔で笑う。

「どういうことだ？ジロー」

疑問符を浮かべながら聞いてくる近衛。

「何て言うか…ほら、明久ってバカだろ？」

「ああそうだな」

即答かよ。まあ言い返せないが。

「で、あいつはな、俺と一緒にシバかれていた訳だ」



「ああ」

「でも、あいつは『俺』みたいにはならなかった」

「そう言われれば…そうだな」

「その理由がそれなんだよ」

「は？」

わからない、と言った感じに返してくる近衛。

「あいつはバカで単純で素直だからこうなったんだ」

「……………」

「推測だけど、あいつは昔から頭で考えるよりやるってタイプなんだよ」

「んで、明久は昔から体に数々の技を受けている。世界最強の女子プロレスラーやらその遺伝子をしっかり受け継いだ俺の妹からな」

「だから分かるんだろ、その身に受けた分、『技の事』がな」

勿論痛みもだ。

「じゃあ——いくよ!!」

明久が先手を取る。

明久の召喚獣は細かい動きから一転、

一気に間合いを詰め、

「お、ソバット」

雄二がふと、漏らす。

ガンっ!!

雄二の言う通り今明久の召喚獣が行ったのはソバットと言う足の裏を使った打撃技。

「まだまだ!!」

そのあとも明久はその流れを使い

ローキックやミドルキックやストレートナックルやブローを綺麗に放っていく。

「くっ…」

佐藤美穂の顔にも段々と焦りが生まれてくる

「……流石はAクラス。打撃だけじゃホントに歯が立たないや」

「んじゃあ…これはどうだっ!!」

「アレは……ダブルリストロックか…」

お、以外とプロレスに対しては博識なんだな雄二は

「あら？あれなら私も知ってるわよ」

涼月がこちらに寄ってきた。

「確かあれって別名は『チキン』ウィングアームロックって言うわよね？ジロー君？」

……なんなんだ。こいつはチキンに怨みでもあるんだろうが？

「くっ…はああ！！」

今まで明久の召喚獣によって固められていたがやはりAクラス。

力の差が半端無いため、体ごと投げられてしまう。

でも

「イヤー久し振りだなあ…この感じ。段々楽しくなってきた」  
♪

口元が緩んでいる明久。

さっきから召喚獣を動かして疲れている筈なのに、否、感じているからこそリアルに戦いを楽しんでいる。

その様子に、

『うおっ…あれマジ吉井かよ』

『さっきのってやっぱ本当だったんだな』

『がんばれ吉井！！俺は信じてたぜえ！！』

嘘つけ。

「……………チツ」

雄二がしかめっ面になる

「…………お前は明久の不幸とAクラスゲットのどっちが嬉しいんだよ」

「……………」

「…………そこまで悩むならもう良いよ」

こんな漫才みたいなことを続けているときも勝負は止まらない。

「くっ…はっ…」

やはり召喚獣の操作に慣れていない佐藤美穂はひとつひとつの行動に対しては苦悶の声を漏らす

「いっくよー」

それに対して明久は嬉々としてひとつひとつの攻撃を避けつつも、前に出る。

明久の召喚獣は何故か落ちていた木刀を手に取り壁に刺す。

なにがしたいんだ？

「よしっ！！」

ダンッ！

次の瞬間明久の召喚獣はそれを足場に空に飛び、

あれって…！ムーンサルトプレスかよ！！

ドスンっ！！明久の放った攻撃は相手の召喚獣にジャストミートし、相手を倒した。

と、思ったのだが、

ザクッ。

そんな小気味の良い音が辺り一面を支配した。

「えっ？………ついていたあああああ！？頭がっ！！頭がああ！！」

訳のわからん俺は取り敢えずディスプレイを見てみた。

するとそこには、

『 Aクラス      佐藤美穂      VS      Fクラス      吉井明久

12点

DEAD

』

やっぱり、明久が負けてる……何でだ？

もう一度召喚獣の方を見るとさっきのムーンサルトプレスで上がっていた土煙的な何かが晴れてきた。

すると、

明久の召喚獣の頭の上に佐藤美穂の武器がざっくりと刺さっていた。

「ふん。きっと明久の野郎のアンラッキースキルが発動したに違いねえ。」

そういう雄二の口元は心なしか……いや、にやけている

「んじゃあ、高橋先生。明久の負けだ」

「はい、二回戦目、Aクラスの勝利です」

「う、うう……こんな終わり方……泣きたい」

「……そ、そのさっきはすいません。貴方の事を見くびって居ました。」

そういつて頭を下げる佐藤美穂。

うん。エリートクラスだからって良いヤツは居るのかもしれん。

見下さないヤツとかな。

「良いんだよ。僕も戦えて楽しかった。クラスは違うけどこれから  
も宜しくね? (ニコッ)」

「えっ? / / はっはいッ / / /」

「ん? だいじょうぶ? 顔が赤いよ? 保健室に連れていこうか?」

「だ、ただ大丈夫でしゅっ!!」

そういうと彼女は走り去っていった。

……明久。またやりやがったな……

こうしてAクラス戦。明久対佐藤美穂はあまり好ましくない終わ  
り方をした。

## バカとチキンとアンラッキー（後書き）

ひとつひとつの戦いで一話が終わるだつ……！！  
どんだけ文才が無いんだあぁ！！



## バカとチキンと保健体育（前書き）

一日空けてしまいすいません…次回は頑張ります。

ではどうぞ！

## バカとチキンと保健体育

「では、三回戦目の方。どうぞ」

あの戦いから五分位後、ようやく三回目の戦いが始まろうとしていた。

「……………（スック）」

どうやら此方からはムツツリーニが出るらしい。

「じゃ、ボクが行こうかな」

そういつて前に出たのは薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子だった。

あいつは確か……………知らん。誰だっけ？

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。宜しくね」

ああ。だから知らないのか。納得納得

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリーニにそう尋ねる。

「……………保健体育」

そして選択したのはムツツリーニの唯一にして最強の武器。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

こいつは得意とか得意じゃないとかの次元じゃない気がする。

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね♪」

何だろう。こいつと仲良くなったら更に俺の普通が無くなりそう。

「そっちの眼鏡のキミと吉井君だっけ？特に吉井君の方は勉強苦手そうだし、保健体育で良かったら僕が教えてあげようか？もちろん実技で」

こっちに振るなよ。

「フツ。望むところ——」

バカな明久はそれにオッケーしようとしていたが…

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

ちよっ…まで、その言い方だと…

「そうですっ！永遠に必要ありません！！」

「……………（泣）」

あ、泣いた。

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

大丈夫だ明久。そうなる可能性は俺の方が数倍高いからな。  
…………自分で言ってる泣きたくなくなってきた。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手にもって出現する。  
ムツツリーニはBクラス戦でも見せた小太刀の二刀流。

一方工藤は、

「でけえな…あの斧」

そう、工藤の召喚獣が持っていたものはかなりでかい斧。  
あんなんで切られたら即死だな。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

そう艶っぽく笑う工藤は腕輪を光らせ召喚獣を走らせていた。

「はっ早い!!」

横で明久が呻く。てかこいつホントに強いぞ。

さすがのムツツリーニも……

「じゃあね、ムツツリーニ君」

最後に工藤はムツツリーニにそう言い、雷光をまとわせた斧を降り下ろし、ムツツリーニの召喚獣を一刀両断した。

筈、だった。

「……………加速」

ムツツリーニがそう呟いた瞬間ムツツリーニの召喚獣の姿がぶれ、いつの間にか工藤の召喚獣の後ろに立っていた。

「……………加速、終了」

その言葉を言った次の瞬間、工藤の召喚獣は血飛沫をあげ床に倒れ伏せた。

|       |      |    |      |      |
|-------|------|----|------|------|
| 『Aクラス | 工藤愛子 | VS | Fクラス | 土屋康太 |
|       | 446点 |    | 572点 | 』    |

おおぅ…一教科でここまで取れんのかよ…やべえな

「Bクラス戦では出来がイマイチだったらしいからな」

あれでイマイチねえ…運が良かったらどんな点数とちまうんだよ…

「そ、そんなっ……………！この、ボクが……………！」

工藤が床に膝をつく。そこまでショックなんだな。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

此方からは姫路が出た。

俺の予想だが多分あちらからは…

「それなら僕が相手をしよう」

……やっぱりか。

あいつは久保利光。学年第六位の実力の持ち主だが姫路、涼月、近衛の振り分け試験のリタイアによって第三位にいる。

そして、

「ここが一番の心配どころだな」

「だな」

そう。いってしまえばこの姫路の勝敗によって勝ち負けが決まると言っても過言ではない。

久保と姫路の点数差などとても僅かなもの。となれば勝敗を決めるのは召喚獣の扱いの旨さ。

でも、姫路は運動が苦手でしかもこの連戦続き、疲れがたまっていないわけではない。

どうなるかな……

「科目は？」

「総合科目でお願いします」

「それでは…」

高橋先生が前と同じように操作を行う。

それぞれの召喚獣が呼び出されて——一瞬で決着がついた

『Aクラス      久保利光      VS      Fクラス      姫路瑞希

399

7点

4409点      』

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!?!』

至るところから上がる驚きの声。

点数差およそ400オーバー。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ!?!」

久保が悔しそうに姫路に尋ねる。

無理はない。姫路はFクラスという環境が劣悪なところにいた姫路と、

周りは自分と同じエリート達、互いを切磋琢磨するにはとても良い環境にいた久保。

この二つを見てどちらが強いかなど一目瞭然の筈なのに、  
姫路は勝った。しかも400点も差をつける形で。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路のそんなセリフ。

……Fクラスの皆、ねえ…。

そのなかには俺も含まれているのだろうか？

「ではこれで、二対二です」

これで俺達は同点。後三回の戦いで決まる。

「次の方、どうぞ」

「スバル。行ってきたさい」

涼月のそんな声。



「はい。分かりました。お嬢様」

深く涼月に一礼した後、こちらに向き、

「ジロー！！絶対勝つぞ！！」

と、はにかみながら手を振ってきた。

そんな近衛を見て思わず口許が緩む

「ああ！！勝ってこい！！」

ただ俺は激励した。

「ではAクラスからは「わ、わたしでしゅっ！！」……宇佐美さん、  
ですね」

はて、宇佐美？これまた聞いたことがない名前。

「わ、私は『手芸部』二年、学年次席のうしやみマサムネですっ！  
！」

………出たよ………なんなの？手芸部って何？学年次席？止めてくれ  
よ。こええよ！！

とにかくまた新たに気付いたことをいってみると、

手芸部にはまともな人間はいないって事かな。



## バカとチキンと保健体育（後書き）

ようやく出せた宇佐美マサムネ！

後はナクルかなあ。いつ出せるんだろうな

**バカとチキンとプレッシャー（前書き）**

よし、何とか更新しましたぜ。

あつしたの学校やっばいかなー♪

……ではどうぞ（泣）

## バカとチキンとプレッシャー

「では、宇佐美さん。科目を」

高橋先生がそう告げる。

「では英語を」

むっ。英語か…近衛は英語得意なのか？

そう思いふと、近衛の方を見ると……

「くっ…よりによって…」

と、悔しげに呻いていた。

ああ…駄目なんだな…英語。

「フフン。スバル様の事なら何でも知ってるんだからっ!!」

胸を張ってそう言う彼女……何でもってことは…

「お前……もしかして『S4』ってやつ协会会员か？」

そう、この名はいっちまえばスバル様ファンクラブ。

……いや、どっちかと言うと狂信者だらけの宗教と言った方がしっくり来るな。

「ええそうよ坂町近次郎」

と、彼女は俺のフルネームを紡いだ。

「何でお前なんか俺みたい奴の名前なんか知ってんだ？」

「当たり前じゃない。標的……訂正。獲物の名前を忘れる訳無いじゃない」

「おい、お前。訂正した意味無いぞそれ」

標的？獲物？何言ってるんだこいつ。

まるで俺の命が狙われてる見たいじゃないか。

「そうよ。知らなかったの？」

と、隣にいた涼月が表情一つ変えずに言う。

「だからさ、止めようぜマジで。人の心とか読むなよ」

これじゃあ涼月の前で考え事なんて出来そうにない。

ん？てか……

「俺命狙われてんの！？」

「あら？スピーディーな突っ込みが取り柄のジロー君の反応が遅かったわね。それじゃあお笑いやっていけないわよ？」

「やる気はないから安心してくれ。それで戻るが何？俺命狙われてんの？」

「ええ。細かく言うと『あの男がスバル様に触れられないように四肢を……』とか『舌を切り取って……』とか『去勢手術……』とか。それから……」

「分かった。もう何も聞かない。てか言わないでくださいお願いします」

何？百歩譲って四肢をく云々を流したとして最後何？去勢く何？俺の男としての尊厳が無くなってしまいの？

そんな感じでガタガタしばらく震えていると……

「はぁ！！」

パンツパンツパンツ！！

という発砲音が……って！

|             |               |             |
|-------------|---------------|-------------|
| 『Aクラス<br>バル | 宇佐美マサムネ<br>VS | Fクラス<br>近衛ス |
|-------------|---------------|-------------|

英語

472点

327点  
』

VS

これは結構な点数差。近衛……勝てるか……？

「ぐう……」

近衛は自分と同じ執事服を着てとてもカッコいいエンブレム入りの銃を手に、必死に相手に歯向かっていた。

「むだでしゅ!! しゅ、シュバルシャマ!! あなたの弱点は見切ってますッ!!」

……所々がカミカミ過ぎて格好ついてねえ……?

そんな相手、宇佐美の召喚獣は……ウサギ。

ではなく例外と普通な見た目の召喚獣。ただかなり体中に盾がついている……という感じだ。

そしてもう一つ。違和感。

みんなの召喚獣の尻尾は犬のような感じの尻尾なのだが……こいつの召喚獣の尻尾は丸くてふわふわな

「ウサギの尻尾じゃねえかよ」

そう、ウサギの尻尾。完全に、だ。

多分この学校の学園長もこの名前を見てウサギだと思ったのだろう。ナイスだ。

「ち、違っ!?! これはウサギの尻尾何かじゃないのよ!!」

「へえ……じゃあなんだ?」

俺はからかうのが楽しくなり少しだけ茶々を入れてみた。



「こ、これはっ……！封印の尻尾よっ！！」

「なんか厨二臭いネタ来たっ！？」

その返しは予想しなかったぞ……。

「じ、ジロー！！邪魔をするなっ！！」

おっと、少しやり過ぎたようだ。近衛に怒られてしまった。  
イカンイカン。

「はぁ！！」

パンツ！！

キン！！

パンツ！！

キン！！

射っては弾かれ射っては弾かれの繰り返し。

宇佐美も攻撃にでねえしこの勝負終わるのかね？

と、思った次の瞬間、

「これでっ！！」

と、近衛が頬を緩ませながら最後の弾丸を放とうとして引き金を引くと…

カチャン…。

『え?』

皆のそんな声が響く。

これってまさか…

「あ、リロード忘れてっ…」

「すいませんっ!! スバル様!!」

ズバッ!!

宇佐美の持っていた剣で一刀両断されてしまった。

|             |         |    |             |
|-------------|---------|----|-------------|
| 『Aクラス<br>バル | 宇佐美マサムネ | VS | Fクラス<br>近衛ス |
|-------------|---------|----|-------------|

|    |      |
|----|------|
| 英語 | 472点 |
|----|------|

VS

AD

』

DE

「うう…すいません、お嬢様。間抜けなミスで」

「そう自分を責めないで? スバル。あなたはよくやったわ? ほら点数もかなり上がったじゃない」

そういつて近衛を慰める涼月。こうみると優しいお嬢様何だけどなあ…

「まっ。お前はよくやったよ。よく頑張ったな、近衛」

「……ジロウ…」

うわっ…止めてくれよ。その声とその視線は反則だ。触ってもないのに鼻血がでちまいそうだ。

「……分かった。後はお前に任せた。頑張ってくれ」

その近衛の一言に俺は、

「ああ!!」

と答え、ある事実に気が付く。

「……もしかしくなくても…次って、俺？」

「ああ、期待している。お前が負けたらもう終わりだ」

「ええそうね。ここで負けたら『本番弱チキン』って渾名が付いちやうわね。でもまあ？『チキン』でもないジロウ君がここで負けるとは思えないけどね」

「ああ!!期待している!!頑張れ!!ジロウ!!」

皆からのプレッシャーと約一名からの悪魔の囁き。

……でもこれはマジで負けらんねえ。

腕一本ぐらいなら覚悟の上だコンチクショウ。

やってやる。

きっとその時俺は、かなり獰猛な笑みを浮かべて居ただろう。

## バカとチキンとプレッシャー（後書き）

スバルファンの方すいませんっ!! orz

今回は諸事情の為に負けていただきました!!

えーと、次のジロー戦なんですが、敵はオリキャラ（男）です。

そいつをこれから良い奴にするかしないかはまだ決まってません!!

まあ多分そこはアンケートを取ることになると思うのですが…

これでアンケートが一票も無かったら笑っちゃいますよね（笑）

## バカとチキンとチキンの見せ場（前書き）

今回のあとがきには結構大切な事が書いてあるので見てくれると嬉しいです!!

ではどうぞ!!

## バカとチキンとチキンの見せ場

「では、次の方、どうぞ」

高橋先生のその一言で前にでる。

「ではAクラスからは「俺が出るぜ」大宮冴木君、ですね」

こいつは……。

「彼は大宮冴木。大宮家は涼月家と一応同じくらい名門なんだけどね…彼はそれを盾に傍若無人に振る舞ったり、結構大変な性格をしてるのよ」

へえ…

「例えば……」

と、涼月が目の前にいる奴の例えを出そうとした時、

「なあ涼月奏？お前はいつになったら俺との結婚を承諾するつもりなんだよ？」

「……………とかね」

うわぁ…涼月のこんな顔はじめて見たよ。  
きつとマジで面倒臭い性格なんだろうな…

「貴方との結婚を承諾？笑わせないで。何で貴方と結婚なんてしな

きゃならないの？」

「はっ。んなもん決まってるだろ？大宮家と涼月家。この二つが手を結べば今の財政だってひっくり返るさ。だからお前と俺は結婚するんだよ」

「そうね。確かに大宮家と涼月家が手を結べばそうなるわね。でも、だからといって私はお金のためになんて結婚するつもりなんてないの。ましてや貴方と結婚するつもりなんて更々無いの。いい加減諦めてくれない？」

涼月が淡々とそう述べるとあの大宮は、

「まあ良い。お前はいつか俺に結婚してとすがり付く。その時を待っててやるよ」

最後に涼月を根本のようないやらしい笑みで一瞥しそう吐き捨てた。むっ。今のは結構腹がたったぞ。

「そろそろ良いですね？では、教科をどうぞ。坂町君」

「数学でお願いします」

「試獣召喚！！」 「試獣召喚だ」

俺達の足元に幾何学的な…え？もう良い？分かったよ。

|       |      |    |      |       |
|-------|------|----|------|-------|
| 『Aクラス | 大宮冴木 | VS | Fクラス | 坂町近次郎 |
| 現国    | 490点 | VS |      | 439点  |



』

「ふんっ。雑魚の割にはなかなかやるじゃねえか。坂町近次郎」

「そりゃどうも。それにしてもあんたみたいな金持ちに名前を覚えてもらえるなんて光荣だな」

完全に皮肉です。

「ああ。しっかり覚えてるさ。お前は――」

そこで言葉を切り俺ではなく、更に俺の後ろを見据えだした。

俺の後ろになんかあるのか？

と、思い後ろを見ると

「ジロー危ない!!」

という近衛の声。「どうした？」と声を出そうとしたが思わず黙った。

いや、正確には黙らされた。腹部に感じる痛みのせいだ。

「『俺の』涼月奏を奪ったやつだからな」

「ガッ!?!」

まるで腹を殴られた様な痛み。でも何か違う。

あ——。

一つだけ、心当たり。

それは

「…フィードバックっ…」

そうだった。思わぬところで思い出したぞオイ。

俺は壁破壊のせいで観察処分者に認定されちゃったんだな…。

うわー明久いつもこんな痛み感じてたのかよ。

でも、まあ。

「…我慢できなくもないかな」

召喚獣を見ると点数が一気に80も削られてた。

「へっ。お前が観察処分者になった情報はもう知ってんだよ」

「へっ。そうかよ。だから簡単に倒せると思ったか？」

「ん？大丈夫だ。安心してくれ。お前を、いや、お前は」

「簡単には殺さねえ」

相手はその言葉を最後に、俺に向かって召喚獣を疾走させる。

相手の武器はどうやら鉄線。さっきからキラキラした糸が見える。

多分さっきの攻撃も鉄線を手に巻いて攻撃力を増したものでしょう。

「くっ…負けっかよ!!」

俺も負けじと猛攻を繰り返す。

「らあ!!」

ドコォ!!

「チッ…。50も減らされたか」

「はっ。なめんなや」

俺は相手を挑発するかのようにはっ笑う。

「雑魚の癖に…調子乗りやがって…」

急にぶつぶつと大宮が言い始めた。こわっ…。

「許さねえ…テメエなんか殺してやる」

…今で切れたのかよ…こいつの心はペットボトルのキャップより狭いな。

キューン。

と、急に相手の腕輪が光った。

と、同時に、

ドスドスドス!!

と言う余り聞きたくないような音が辺りを支配した。

一瞬の出来事に何が起きたかも分からない。

でも、

「ぐあああああ!？」

熱い。頭に氷を突っ込まれたかのようにガンガンなって、  
四肢が燃えるように熱い。

「ハハハッ!!これが俺の腕輪の力!!『ロックオン』だ!50点  
消費する毎に相手に絶対ダメージを与えられるって言うな!!」

「どうだ?痛いか?苦しいか?テメエみたいな凡人が俺に逆らって  
んじゃねえよ!!オラッ!!」

ゴスッ!!

「ガハッ!？」

また腹部に強烈な痛みと衝撃。

「ほら、言えよ。『ごめんなさい』って。そしたら許してやっから」

「だ、誰が…言うか…バァカ」

ゴスッ！！

「ゴァッ!？」

「もうやめてっ!!」

俺の意識が、軽く飛びかけているところに、一つの声が響いた。

それはいつもの凜とした声じゃなく、少し焦りのある、涼月の声。

こいつのこんな声、滅多に聞けないだろうな。よし。脳内のハードディスクに永久保存しとこう。

「もうやめてあげて」

「……はぁ？何言ってるんだよ。悪いのはこいつだぜ？」

「黙れっ!!ジローにそんな卑怯なことをして!!」

「黙れ。バトラーごときが俺にそんな口を聞いて言いと思ってるのか？」

近衛が俺のために怒ってくれたがそれを軽くあしらう。

「あら？スバルはあなたの執事じゃ無いの。貴方を罵倒しようが何しようがここでは立場は一緒よ。それにスバルをバカにするのは私が許さないわ」

「はんっ。そうだったな。まあ所詮なりそこないだからな。仕方ない」

「スバルをバカにするのは許さないと言っただけだよ？」

「ああ？ 何度でも言ってやるよ。その執事は刃物きよ」「テメエ今なんつった？」…あ？」

ヤベエヤベエ。今のこの屑の一言で一氣に力わいてきちゃったぞオイ。

「なんだ？ 死に損ない。まだ飛んでなかったのか」

「ああ。お前の一言のお陰でちよっくら起きてなきやならない理由ができたんでな」

「テメエをぶん殴るって言う理由がなあ！！」

その時、俺の腕輪が輝く。

「お前。近衛がどんな気持ちで頑張ってるのか知ってるか？」

「友達が欲しいのに作れない理由を知ってるか？」

「近衛がどれだけ苦勞して執事やってるか知ってるのかよ！！」

「何も苦勞してない人間がっ！！近衛に対してなりそこない？ ざけんな！！」

「し、知らねえよ。んなもん！！てかなんでお前は立ち上がれんだ

よ!!フィードバックが効いてねえのか!？」

「いや?今も力抜けばいつでもあの世にトリップ出来るぜ?多分」  
でもな、と俺は付けたし

「俺んちの一家団欒に比べればこんなの青空の下のピクニックに近いんだよ」

「お前さ、おはようの変わりにエルボー・ドロップを食らったことはあるか？」

「嫌いなおかずを残しただけで母親から垂直落下式のブレーンバスターを喰らったことは?幼稚園の時妹とおままごととして、何故かアキレス腱を切断されたことは?」

「白目を剥いて口から泡吹いて失神したことは?朝、目が覚めたらいきなり病院の集中治療室に居たことは?うっかり妹の着替えに遭遇して、心肺停止状態に追い込まれたことはあるか?」

ねえだろ。と俺は付け足す。

こんな経験をしてるのは俺だけだ。  
明久も似たようなもんだがまだ軽い。

「う、五月蠅い!!俺にそんなことは関係無い!!お前は俺に黙って負けていろっ!!」

「……お前さ、まだ俺に勝てると思ってんの?」

「は？」

相手は恐る恐るディスプレイに目を向けた。

|       |      |    |      |       |
|-------|------|----|------|-------|
| 『Aクラス | 大宮冴木 | VS | Fクラス | 坂町近次郎 |
| 現国    | 340点 | VS |      | 439点  |

「んなっ！？何でお前の点数が！？」

大宮の顔が驚愕に染まる。

「多分腕輪の効果だ。まあそんなことはどうでも言い」

「ヒィ！？」

「よし、300かな」

→殴る回数だ。

「わ、悪かったもうしない！！だから、だから！」

「……謝る相手がちげえだろ……！」

更にイライラしてきた。

他人はすぐに見捨てる癖にじぶんのことになると必死に媚びる。



「わ、悪かったもうしない!! もう近衛をバカにはしない!!」

「ふう…分かった。」

グジャッ!!

「まあ許さないがな」

|       |      |    |      |       |
|-------|------|----|------|-------|
| 『Aクラス | 大宮冴木 | VS | Fクラス | 坂町近次郎 |
| 数学    | DEAD | 点  | VS   | 158   |
| 点     | 』    |    |      |       |

あ、点数戻ってる。きっと時間制限があるんだな。

「これで、3対3ですね」

と、高橋先生が淡々と言う。

この人自分のクラスが負けても気にしないのか？

まあ何にせよ…

「後は任せたぞ…雄…二」

今まで何とか意識を保っていたのだが流石に耐えきれず意識を手放した。

## バカとチキンとチキンの見せ場（後書き）

はあく始めてオリ展開かけた気がするっ!!

で、おおみやさえき大宮冴木

良い奴にするかしらないか。

アンケートをとりたいと思います。

○票だった場合、私が独自に決めます。

## バカとチキンと愛の告白（前書き）

またもや授業中に仕上げました。

ではどうぞー！！

## バカとチキンと愛の告白

「来たっ!!」

これは……明久の声か…

「う……つつ」

俺は痛むからだを無視して、体をなんとか起こす。

「あ、ジロー!! 大丈夫か!? 怪我は!？」

近衛が今にも泣き出しそうな顔でこちらを覗きこむ。

やめてくれ…そんな顔は見たくない。

「気にするな。大丈夫だよ」

と、何とか笑顔を顔にはりつけ、近衛を出来るだけ優しく諭す。

「そ、そうか。良かった。お嬢様も大変お気になさってたからな…」

「涼月が？」

信じられん。あの悪魔様が俺の心配してくれるなんてな、やっぱり優しいのかもしれん。

「ははは…まあありがとな。で、今はどんな状況だ？」

回りを見ればみんなの顔がにやけて……って！

「まさか……！あの問題が出たのか！？」

「ああ！！そうなんだ！！」

じゃあこれで、俺たちは……！

《日本史 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がミカン箱になった。

何この状況。

俺は寝てた分気分の落ち方も結構なものだった。



「3対2でAクラスの勝利です」

またもや高橋先生が淡々とそう言う。そうだよ完敗だよ。

「……雄二、私の勝ち」

膝をついている雄二に歩み寄る霧島。

「……………殺せ」

「良いだろう！！殺してやるっ！！歯を食いしばれ！！」

うおっ！？明久が血走った目で雄二を殺そうとしてやがる。

「やめろ！！明久！！」

「何で止めるんだ近次郎！！こいつには喉笛を引き裂くと言う体罰がひつようなんだ！！」

「吉井君！！それは体罰じゃなくて処刑です！！」

「……でも危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い分けはしねえ」

ってことは凶星かよ。

「それなことより約束」

あ。と、皆が一気に固まる。

忘れていた。

ヤバイ…このままだと姫路の――――

「分かってる。何でもいえ」

霧島は少し紅い顔で姫路を一瞥したあと雄二に向き直る。

「……雄二、私と」

皆が息を飲む。

「……私と、付き合って」

………は？

「やっぱりか…まだ諦めないのか？」

「……私はずっと雄二が好き。だから付き合って」

皆が本当に固まる。俺も含めて、

「良かったわね？翔子ちゃん。ほら、記念にこれあげるわ」

涼月は何故かわ変わらない態度で霧島にあるものを渡す。

それは、映画のチケット。

「……うん。ありがと奏。じゃあ早速行ってくる」

「逝ってらっしゃい。坂本くん？」

「ぐあう……待ってくれ翔子！！やっぱりこの約束は無かったことに！！」

「……だめ、絶対」

「坂本くんもお嬢際が悪いわね。スバル？どうやら坂本くんが眠りたいようだからあの安眠グッズを」

「はい、お嬢様。坂本喜べ。これでお前も」

バチィ！！

「ゆっくり眠れるぞ」

うわぁ…何あれ？安眠グッズ？永眠の間違いじゃないだろうか？  
明らか首吊り用の縄とか入ってるぞ？

ぐいっ      つかつかつか

気絶した雄二を引きずって霧島が教室を出ていく。

「……………」

「……………」



「……………」

しばしの沈黙が教室を支配する。

余りの出来事にF F F団ですら呆然としてる。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としている俺らの耳に野太い声がかかる。

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

明久がそう聞く。

「ああ。今から『我が』Fクラスに補習についての説明をしようと思ってるな」

……………ん？我がFクラス？

「おめでとう。お前らが戦争に負けたお陰で福原先生から俺に担任が変わってるな。これから一年は死に物狂いで勉強ができるぞ」

『なにい！？』

Fクラスから上がる声。

「いいか。確かにお前らはよくやった。正直ここまでこれると思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、世間を渡っていく上では大事な武器のひとつだ。全てではないからと言っていないがしろにして良いものではない」

うわあ…面倒くさいことになりそうだなあ…

「吉井、坂本、坂町。お前らは特に念入りに監視してやる。何せA級戦犯と開校以来の観察処分者二名だからな」

「ちょっと待ってくれ！！俺もなんですか！？」

「ああ悪いが坂町。観察処分者になってしまった以上は仕方ないんだ。でも、お前のやったことは誇って良いぞ。きっと朱美さんも喜ぶだろう」

「……………はあ」

もうなんでも良いや…どうにでもなれ。

「さあ…て、アキ。補習は月曜からみたいだし…約束どおりクレ―プでも食べにいきましょう」

「それは週末……………」

「だ、ダメです！！吉井君は私と映画を見に行くんです！！」

「ええ！？姫路さん。それは話題にすら上がってないよ！？」

はあ…わが幼馴染みながら羨ましいよ

「に、西村先生！！補習は月曜からと言わず今からやりましょう！！思い立ったが仏滅です！！」

「吉日だ。バカ」

「ははは…バカだなあ、明久も。よし、補習は月曜かららしいし…」  
そう思って立とうとしたときに、

「あら？どこへ行くつもり？」

と、後ろからの声。涼月だ。

「どこって帰るに決まってんだろ」

「そう。じゃあ一緒に帰りましょう？」

「？…まあいけど」

「ああんじゃ行こうぜ涼月、近衛」

そういつて三人でAクラスを出る。

これからは3ヶ月間戦争は出来ない。

でも、その間『勉強』が出来る。

その勉強の成果で次はどこに攻めこむんだろうな？

まあいいや…そのときはそのときだ。

俺は独りでに天を仰いで

「悪くねえな」

と呟き、涼月とスバルと一緒に自分の家へと歩いていった。

## バカとチキンと愛の告白（後書き）

ようやく一巻分が終わった！

そして気がつけば一日3更新もしてたー！！

**バカとチキンとレジャーランド（前書き）**

30話目です！

そしてPV50000突破！！

……って喜んでいいんですかね？（・ω・）

## バカとチキンとレジャーランド

日曜日。そう、涼月達と一緒に遊ぶ日である。

燦然と輝く太陽の下、俺は余りの楽しみにニヤニヤしていた。

「兄さん。ニヤニヤしすぎ」

妹からのジト目で多少のダメージを受けたがそんなことはどうでも良い。

そう、今日の俺はいつもと違う。つまりはかなりのハイテンション。

だってダブルデートだぜ？ しかも涼月奏と一緒に。

いくら悪魔だからって見た目は超絶美人の涼月。テンションも自然と上がる。

明久の遊びを断ってまでこうしたんだ。

楽しまなくちゃ損だ。

「もう、分かってる？ 今日のデートは私と近衛先輩が仲良くなるのが目的なんだからね」

「ああ。分かってる分かってる」

「ほんとかなあ？」

紅羽が不満気にぷうつと頬を膨らませる。

「そういやお前昨日涼月と電話でなにか話してたけどなに話してたんだよ」

そう聞くと紅羽はさも当たり前のように、

「はにゃ？ そんなの作戦会議に決まってるじゃん」

……………ナンテコッタ。

なに不吉な事言ってるんだコイツ。

高潮していたはずのテンションが急転直下に暴落してしまった。ていうかあの屋上での出来事以来、コイツらめっちゃめっちゃ仲良いんだよな…それこそ気持ち悪いぐらいに。

「実はもう色々と準備してるんだ」

「ふうん」

そっかそっか。勝手にやってくれ。俺の知らん所だな

「ちなみに兄さんのバックにも仕掛けてあるから、不用意に開けないでね？」

にやははっと笑う妹。

もうマツハの勢いで鞆を開けたね。



すると中には……

聖典（エロ本）だった。

しかも俺の部屋に隠してあるはずの秘蔵コレクションの一冊だった。

「うおおおおおっ!？」

叫び声を上げながら、出てきたブツを間髪入れずに近くのゴミ箱へ  
ダンクシュート。

「酷いよ兄さん! せっかく用意したのに!! それともなに!?!? メイ  
ドさんのやつが良かったの!?!」

「止めてくれ紅羽!! こんな往来で兄の趣味を暴露するなっ!!」

「うう……これで近衛先輩に兄さんは女の人が好きっていうのが、  
分かってもらえと思ったのに……。一生懸命お姉様と考えたのに」

……甘かった。考えてみりゃあの涼月と紅羽が一緒なんだ。化学変  
化でニトロが生産されたっておかしくない組み合わせじゃないか。

「でもまあいいや。……仕掛けはまだまだあるし……」

紅羽は俺の隣で邪悪な闘志をメラメラと燃やしていた。

……怖っ。

こいつの行動力と涼月の頭脳が合わさっていると思うと軽く発狂し  
そうになる。

これはこっちも本気で対策を練らねば……！

俺は今日こそ！！楽しい一日を送るんだ！！

コイツらのボケに付き合っていたら簡単に日が暮れちまう。

せめて近衛を味方につけて……

と、考えていると、いつの間にかレジャーランドの入り口が見える  
ところまで来ていて、そこで見知った二人の姿が見えた。

よし、ミッシェンスタート。

まあ普通に挨拶をして普通の会話ができれば上出来かな。なんて考  
えていた。

が、

「よう、近ンガッ!？」

近衛の肩に手を置くと瞬時に口の中に何かを押し込まれるような感  
覚が走った。

黒くて硬い金属質の物体。さらけ出されるオートマチック。

——拳銃。

俺の口に突っ込まれているものは日本では絶対にあっちゃいけない  
ものだった。

「……………」

えーっと、これはきつと近衛なりのジョークかな？ ははは…笑えないや。

「動くな。動いたら容赦なく撃つぞ」

と、刃物のように鋭い目でスゥと目をこちらに移してふう…と息を吐き出した。

「ジロー。迂闊に背後に立つな。危うく穴だらけにするところだったぞ」

近衛は何事も無かったかのように拳銃をくるくる回しバックにしまった。

「あ、あの、近衛さん？」

「ん？ なんだ？」

「そ、それって…」

「ああ、ジローも小さいと思うか。僕もこんな小ぶりな銃じゃ心配だったんだ。やっぱりもう少し大きくて貫通力のある——」

「ちげええっ！！ その物騒なモンをどっから手に入れやがったって聞いてんだよ！！」

「安心しろ。これは護身用のガスガンだ。本物じゃない」

ああ良かった…だよな。さすがの近衛もそんな法外な代物持つてくるはずが……

「ただし、ばっちり改造が施してあるから、急所に当てれば十分に人を殺傷出来る」

「思いつきり銃刀法違反じゃん！なんでそんなもん持ってきてんの！？」

「何をいう。出掛けるときはハンカチ、拳銃、ケータイ。これが執事の一般常識だ」

絶対違う。それさえあれば何かサバイバルでも出来そうだよ。

「スバル？大丈夫だから着替えてきなさい」

「ですか……お嬢様」

「大丈夫。私には紅羽ちゃんが付いているんだし、ね」

そういつて紅羽の頭を撫でる涼月。

なんの話かは知らんが下手な変態やらそこら辺の奴なら紅羽がごみ掃除よろしく簡単に駆除してしまうだろう。

「にやはは。そうですよ、近衛先輩。お姉様は守りますから」

「……………分かりました。ではすぐに戻ります。行くぞジロー」

そういつて足早に更衣室に向かって歩き出す近衛。

「ちょっ!!ま、まて!!」

俺も少しだけ駆け足で何とか近衛に着いていった。

すると、

すると入り口の近くにいた涼月の口から、

「頑張って? ジロー君」

と言う声が聞こえた気がした。

まあ気のせいだろう。それよりも近衛に着いていかねば。

俺はそのとき知らなかった。

これこそ、この場こそ、

一番の厄介事が起こる場所だと。

## バカとチキンとレジャーランド（後書き）

ふう…今日はまよチキの9巻とはがないの7巻を買い、  
みなぎってきた！！

な状態です！

うざいでしょうがまあ気にしないでください！

うふふフフふ…あははははは

## バカとチキンとパラダイスサマー（前書き）

皆様、大変久しぶりでございます。

そしてごめんなさい。

書こう書こうと思ってても疲れて書けない日々が続いてこうなりました。すいません。

そして今回、

ほとんど原作（笑）

いや笑えませんよね…すいません。ほんとすいません。

ではどうぞ。

## バカとチキンとパラダイスサマー

「お、おい!! 待てよ近衛!!」

俺は今、必死に走る近衛の後を追っている。

何故かって? 知らねえよ。

あった瞬間、口んなかに銃刀法違反的なアレが突っ込まれるわ、着替えるだけな筈なのにすげえ必死だし。

楽しみだった筈の俺の気持ちは大暴落である。

何とか更衣室を見つけ、近寄って見ると近衛が突っ立っていた。

「なにしてんだよ。早く入るぞ」

俺はため息を吐きつつも近衛を中に引っ張ろうとすると、

「だ、駄目だジロー…。入れない」

「はあ? なに言って――」

そこで、気付く。

近衛って女じゃん。

「……………」



絶句する俺。

ええと…これは…どうしたものか。

当然目の前の更衣室は男性用。

中を覗けば男の裸が溢れかえっており、凄まじく描写のし辛い光景が広がっている。

でも近衛は『男装執事』、ここで着替えるしかない。

「……分かった。俺が引っ張ってくからお前は目を閉じてろ。それなら行けるか？」

俺が即興で作った案に近衛はコクンと首を縦に振った。

かくして俺達は魔の領域へとふみこんだ。

俺は盲導犬の如く、中のシャワールームまで近衛を移動させカーテンを閉めた。

これなら中をみられる心配もなく着替えられるであろう。

え？ 覗かないのかって？ フツ…愚問だな。

見た後の事を考えてみる。

見た↓近衛からの攻撃↓気絶↓起きる↓紅葉からの攻撃↓瀕死↓涼月からの…ブルブル。

という肉体的にも社会的にも精神的にも殺される事になってしまう。

……目の保養より命の方が惜しいんだよ。

数分後、着替えた近衛の格好は当然女物ではなくオレンジのパーカータイプの上着と膝上丈のハーフパンツ。

俺の着替えも既に終わっているの、後はロッカーに近衛の持ってきた荷物を入れ、同じ要領で戻るだけ。

と、思い荷物を持つとズッシリとやけに重い。

なに入ってるんだろう。

そんな軽い気持ちでバックのチャックを開けたら中にはさっきの銃やらスタンガンがところ狭しと入っていた。

……きつと警護用なんだろうがこんなの持ち込んでるってバレたらテロリストと勘違いされるだろう。

「ん?」

と。

何故か近衛のバックの中身に違和感が走った。

……いや、元々違和感だらけなんだが。

なんか……決定的な何かが足りないような、そんな感覚。

「……まあ、いつか」

これ以上このモヤモヤ感を抱えているとイライラする。

そう思った俺は考えを放棄し、荷物をロッカーに押し込んでから、やっとのことで更衣室から脱出した。

なんかすげえ遊ぶ前から疲れたよ。

「遅かったわね」

更衣室を出たところで見知った悪魔の声でした。

「中でいけない事でもしてたんじゃないでしょうね」

「そんな訳あるか。こっちの苦勞も知らないで——」

そこまで言っと思って思わず黙る俺。

目の前には水着に着替えた涼月。ビギニだ。色は黒。

イメージ通りと言えぱそうなんだが、いかんせん破壊力がありすぎる。

スタイルは抜群。出るところは出てるのにウエストや太ももはスラッとしてる。

なに食ったらこうなんの？

正直言わせて貰うとこれを見ただけでも俺の今までの疲れは消えたと言っても過言じゃない。

……んで、そのとなりに居るのは我が妹の紅羽。

こっちは……その、出来ればコメントを控えたい。

いや、別に可愛くない訳ではない。

んだけど、ね？隣のナイスバディと比べてしまうと、ね？  
少々哀れみの視線を向けたくなる。

「兄さーん。今失礼な事考えなかった？」

イカンイカン。顔に出てたか？気を付けなきゃフラグなしで強制イベントが発生しそうなんで目線をプールに移そう。

まあ俺の場合、フラグなんて日常生活で立っているがな。

……死亡フラグという名のフラグが。

てかでけえな。

流石は全天候型レジャーランド。

温室に保たれたドーム内と陽光が降り注ぐガラス張りの天井。

プールの種類も豊富でウォーターライダーは勿論、海を再現した波の出るプールまで。

まさにトロピカルサマー。南国ムード全開である。

まあこんな凄いレジャーランドなのだがまだ夏本番じゃない為か、

そこまで大混雑ってわけでもない。

まあちょうどいいな。

「あ、あの、近衛先輩」

紅羽がモジモジしながら近衛に話し掛ける。

「その水着、とっても似合ってます!! カッコいいです!」

「ああ。そっちの水着も可愛いな」

「ええっ! い、いや、そんな……可愛いなんて…」

頬を赤く染めてはにかみながら照れてる。

……なんかフクザツな気分だ。何て言うか、紅葉って女の子だったんだ。家でもこれぐらい女の子らしくしてほしいナ……。

「それで……良かったら一緒に泳ぎませんか? じつは私、泳ぐのが苦手で……その、出来れば教えてほしいなあなんて思ったりして……」

嘘つけ。お前かなり泳ぐの得意だろ。

確か五十メートル潜水とか余裕でできたはずだ。

ほんとお前タイタック号見付けてこいよ。

多分紅羽なら水圧にも耐えられるんじゃないだろうか?

「別に構わないが……」

近衛が困った様子でチラッと涼月を見る。  
主の安全が気になるのか

「大丈夫よスバル。いざとなったらジロー君が命懸けで守ってくれるから」

誰が約束したよオイ。

「分かりました。お嬢様がそうおっしゃるのであれば」

ああ。突っ込む前に会話が終わってしまった。

何？俺はいつたい命懸けで涼月を何から守ればいいの？

「頼むぞジロー。信用しているからな」

念を押すようにそういつて近衛は紅葉と共にプールの方に歩いていった。

そんな事言われてもな。信用してくれるのは嬉しいが俺はいつたい涼月を何から守ればいいんだろうか？

「ふふっ。そんな困った顔しなくても大丈夫よ。あの娘ちょっと神経質になってるだけだから」

「ちよっとって……あれでか？」

あれじゃまるで涼月の事が誘拐されないか気にしてるようにしか思えない。ルパンから予告状でも届いたか？

「まあ場所が場所だからね」

「はぁ？　なんだそれ。お前らここに来たことあったのかよ」

「ええ。子供の頃に一度だけ。その頃はこんなに立派じゃなかったけど」

涼月が懐かしむように目を細める。

「懐かしいわ。あのときは色々大変だったから」

「大変って……。それこそ誘拐でもされたのかよ」

「……………」

……あるえ？

かなりの冗談で言ったんだが、何故か真剣な顔で黙り混んでしまった涼月……。

まさかホントに……。

## バカとチキンとパラダイスサマー（後書き）

さあてどう説明致しましょうかこの終わり方のテキスト具合。

たかだか一週間嘗めてはいけませんね。

更に腕が落ちているのを痛感させられました。



## バカとチキンとツンデレ月さん（前書き）

一昨日ぶりです。チキン執事でございます。

なんかこのごろ全く書ける時間が見つかなくなってきた……新しい小説書こうと思ってるのに…

まあそんなことはおいといて、どうぞ！

## バカとチキンとツンデレ月さん

「お前……まさかホントに……」

「ええ。私達は一度ここで誘拐されたわ。まあ犯人はすぐ捕まって私たちもすぐ解放はされたんだけどね」

「……マジかよ」

「本当よ」

俺は得意の嘘かと思ったがこんな涼月の表情は見たことない。

……本当と思わざるを得ないな。

「じゃあ近衛があんなにピリピリしてるのって……」

「きつと昔の事を思い出したんでしょうね。それに、スバルはあの事件以来変わっちゃったから」

「変わっちゃった？」

なんだそれ。事件は解決したんだろ？

「多分、スバルは責任を感じてるのよ。私がさらわれたのは自分のせいだ。執事として主を守れなかったってね」

「そんな無茶苦茶な……」

いや、でも『涼月家の執事』であることに並大抵ではないプライドを持っている近衛だ。

自分が守らなければいけない主を、それも目の前でさらわれたのは相当ショックだったのかもしれない。

「アレ以来、私とスバルの関係はギクシャクしたまま。貴方だって学園での私とスバルの様子は見たでしょ。家でもずっとあんな調子なの。……スバルは負い目があるのかもしれないわ」

「……………」

「けど私は仲良くしたいのよ。……昔みたいだね」

そう言えば昔は近衛は涼月の事を『カナちゃん』って呼ぶぐらい仲良かったんだっけ。

事件が起こる前はいまよりずっと仲が良かったんだろう。

……それこそ、友達みたいに。

「ん？って事は涼月は近衛とまた仲良くなりたいたいからここを選んだのか？」

「ふふ、どうかしらね。でも——」

そんな簡単な事じゃ無いわ、と涼月は少し自虐的な笑みを浮かべた。

「ジロー君。貴方の女性恐怖症って言う弱点が有るように、スバルにも弱点があるのよ。私の執事をやっていく上で、決定的な弱点がね」

「致命的……」

そう言えば近衛は料理が全くできないとか言ってたっけ。だから購買でパンを買ってるって言ってたが……。

でも料理は料理人が居るし、関係ないな…。

「それさえ克服出来れば、スバルにも余裕ができるかもしれないわね。そうしたら…また戻れるかもね」

「涼月……」

「はい、この話は終わり。私たちも泳ぎましょう。時間は有限よ」

プールに向かって歩き出した彼女は、もう『涼月』に戻っていた。

「あ、あのさ」

「なに？ジロー君」

なんでか分からないが何か、何かは分からないが何かを涼月に伝えなければいけないような気分になり、自分でもなんで言ったかわからないような言葉を紡いだ。

「なんて…言えば言いかは分からないんだけど…お前も頼れよ、俺を。ほら俺達、『友達』、だろ？」

それを言いきると涼月は一瞬きょとんとしたような顔になり、そのあと急にいつもの涼月らしく妖しく口の端を吊り上げ笑った。

「ふふっ。そうね。どこまでもチキンなジロー君でもいた方が増し

だものね」

「ぐっ…！おまつ…」

と、俺が言い返そうとした時に、

「ほら、行くわよ。いまの貴方は私の恋人なんだから」

むにゅん♪

と。

ごく自然に彼女は俺の腕をくみ……ってぎゃあああ！

マシユマロがつっ！？俺の二の腕付近に確かな弾力を持った柔らかな凶器の感触が！

「大丈夫？急に顔が真っ青になったけど」

ぎゅっと俺の腕を抱きしめながら涼月は訊いてきた。

……怖え。

この女、パニックってる俺を見て心底楽しんでやがる。

「そんな怖いかおしないで。言っておくけどこんなのまだまだ序の口よ。多少荒療治じゃないと、貴方の恐怖症は改善されそうに無いから」

微笑みながらHPが残り半分もない俺を引っ張っていく涼月。

えー。ここまでの俺の反省点を説明させていただきます。

最初は、涼月がいる時点で疑って掛かるべきでした。

次は医務室の場所を確認しておくべきでした。

と、全力で後悔しながら、俺は偽物の恋人に手取り足取りを合わせた。



「ジロー君、次はアレに乗りましょう」

「あ、ああ……」

涼しげにそういう涼月と、瀕死の俺。

これまでに何回鼻血を出しただろう。リットルはいったか？

さっきからこいつはまじで酷い。

ウォータースライダーのときは背中に……やめよう。鼻が熱くなってきた。

てか思ったんだがここでFFF団とか明久達に会ったらどうな r 「くらえっ雄二イ!!」 「ゴハッ!? オイバカ久! 顔面はねえだろ!」 「五月蠅い!! 貴様のせいで僕が美波に殺されかけたじゃないか!!」 「……るんだろな。」

え？なに？明久の声が聞こえた？気のせい気のせい。参ったな。鼻血を出しすぎた「明久に雄二よ！ムツツリーニが大変じゃ！！至急応援を頼むのじゃ！」……せいでは無いらしい。

どうする？明久なら黙って居てくれそうだが…雄二やムツツリーニ、なんて特にヤバイ。

やはり隠れるか？でも涼月が……いや、その時は無理矢理にでも隠そう。

そのあと近衛に殴られるのとFFF団に処刑されるのだったらまだ近衛がましだ。

と、0・3秒の脳内会議終了。

思い立ったが吉日。善は急げ。何でもいい。

とにかく見つかるまえに隠れなければ！

「涼月！」

「え？」

俺は女性恐怖症の発作を我慢して涼月の肩に手をあてプールに潜る。

と、なるはずが

「きゃっ…」

ふにゃふにゃ。

ん？

なんだろう。この柔らかさ。さっきも触ったようなこの既視感。





別の意味で大ダメージだった。

やべえ。やべえよ。なにこの涼月。この可愛さ。この愛くるしさ。

よし、決めた。これは涼月第二形態ツンデレ月さんと呼ぼう。

デレが来るのかどうかは分からないがツンだけでも十分に威力は高い。

ヤバイヤバイ。涼月奏。恐ろしいぜ…ここでも俺を追い詰めるとは…

そして俺は、気付く。

ん？あれ？なんか大切な事を忘れてるような…

「あれ？近次郎だ。どうしてここにいるの？」

こうして俺の頑張りは脆く儂く、簡単に崩れ去った。

**バカとチキンとツンデレ月さん（後書き）**

ツンデレ月さんここに覚醒っ！

また出すかは決めてませんが……（▽、＊）ゞ

まあ出せたら出したいですねっ！

## バカとチキンと沈黙ヒツジ（前書き）

はあくバカテストやろうと思ってても忘れてしまう……。。

次ぐらいからやってみようかな？

ではどうぞ！

## バカとチキンと沈黙ヒツジ

「あれ？近次郎だ。どうしているの？」

やっちまった……。

いや、待て。明久なら黙ってくれるかも知れないっ！

「あ！涼月さん？って事は近次郎って涼月さんと遊ぶためにここに来たの？」

「あ、ああ。で、どうして明久はここにいるんだ？」

「ほら、日曜日遊ぼうっていったでしょ？あのとき実は皆霧島さんからこのチケット貰ってたから皆で行こうって事になってたんだよ」

……そういう事か。

「そうか。所で明久。お前どこかに行こうとしてたんじゃないのか？ムツツリーニがどうか」

「ハッ！！忘れてた。ヤバい！急がなきゃ！あ、後で遊べたら一緒に遊ぼうね！！涼月さんも。それじゃ！」

それだけ言い残すと明久は走って去っていった。

「ふふふ。相変わらずね、吉井君も」

いつの間にかツンデレ月さんから戻った涼月がこちらを見て笑っていた。

「ほら、呆けてないで泳ぎましょう？ 彼氏さん？」

そういうとまたおれの腕に腕をオオオオ！！

……結局鼻血は午前中だけでも二桁に届いた。



あの後からも指がふやける位に泳ぎまくったので、午後からはアトラクションで遊ぶことになった。

まあ、俺もそちらの方がいい。さっきも言ったように鼻血を出した回数は午前中だけでも二桁に届く。

恐るべし涼月。吸血鬼かこの女。そんなに俺の血が見たいか。

ここはドーム内のくせに様々なアトラクションが揃ってる。

涼月曰く、一番の話題はお化け屋敷らしい。

水着のままでも入れるらしく、昼食を食べたあとに四人で行こうということになったんだが……。

「……なんで、こいつが……」

俺はただただ驚愕していた。

『沈黙ヒツジと愉快的仲間たち』

目の前の看板には赤い文字でしっかりとそう記されていた。

「あら？しってるの？」

「いや、知ってるも何も……」

沈黙ヒツジ。

こいつは前に紅羽と共にゲーセンに行ったら紅羽が欲しがり無理やりUFOキャッチャーで取られいつの間にか鞆に付けられておりそして近衛に要らないから渡すと近衛のお気に入りになってしまった一品。

否、逸品

正直な所を話すと結構トラウマだ。

出来ればもう二度とお目にかかりたくなかったよ。この頃のおれのうで不運もこいつの呪いだと思ってるぐらいなのに。

アトラクションである廃病院っぽい建物の外観には、例のかわいくデフォルメされた羊が所々にあしらわれている。

やっぱり口元が赤いのが何匹か居る。

……てかなんだよ。このキャッチコピ―。

『今流行りのコワカワイイ！君のハートも心筋梗塞！』

って縁起でもねえ。訴訟とか起こされても不思議じゃねえぞ。

「なあ……これやめねえ？」

「どうして？もしかして怖いのは苦手？」

「そういう訳じゃないけど……」

確かに怖いのは少し苦手だ。だがな、それよりもこのキャッチコピーキャラクターがやなんだよ。

なんか、シュールっていうか不気味だし。そもそもタイトルからしてもうアウト。

コイツに愉快的な仲間が居るとは到底考え付かない。

「うう、あたしもちょっと苦手かもです」

紅羽は青ざめた顔でそういう。そういや昔からオカルト系は苦手だったな。実体のない相手なんて勝てる気がしないとか。まあ、こいつらしいが。

「でも、近衛先輩が入るなら……」

「……………」

嫌な予感を感じながら隣に目をやる。すると案の定、近衛は不気味な羊達に熱烈な視線を向けていた。

うわー。こいつ完全にファンになっちゃったんだな。

あのストラップあげなければよかった。

仕方なく、俺達は近衛を先頭に順番待ちの列に並んだ。

順番待ちをしている間退屈させないためなのか、並んでる列からは出口の様子が見られる。

出てくる客のリアクションで恐怖心を煽ろうって事なんだろうが……。

「ひいい呪われるうう！」とか「助けて、アレが頭の中から消えないの……！」とか「来るぞ！ヤツラが来るぞ！ヒヤハハハハハハお前ら全員もうダメだあああっ！」とか、出てくる客がみんな常軌を逸した発言をしてるのを見せるのはどうかと思う。  
てか、こんなのみせてんのにどうして客が減らないの？

中には失神して白目を剥いたまま担架で運ばれ照る女の子までいた。心臓の悪い方はご遠慮下さいって注意書がマジで怖い。というか、心臓が悪くなくても死ぬそうな気がする。

「あわわわわ……」

と、紅羽も顔を真っ青にしながら涼月に抱きついてガクブルしてる。無理もない。列に並んだ時点で体調崩してリタイアする客だって居るくらいだ。

「紅羽ちゃん。やっぱりやめた方がいいんじゃない？」

もはや顔が蒼白を超え土色になってしまった紅羽に涼月がそうささやいた。

うん、俺もそう思う。このまま行ったら戻ってこれなさそう。

「私がついていってあげるから、列から出ましょう？　と言うわけでジロー君。スバルと一緒に楽しんできて」



「よし、わかった……じゃない!!俺も入らないとダメなのかよ!」

「いえ?別に私は構わないけど……困ったわねえ?まさかジロー君がそんなチキンくんだったとはね。はぁーだから名前にまで」

「うるせえ!!皆まで言うな!!そして俺は――」

「チキンじゃないなら行けるわよね?じゃあ。私たちはさっきお昼を食べた売店で待ってるから」

そういうと涼月はさっさと列から抜けてしまった。  
くっ……!!デビルめ。

だが俺にもプライドというものがある。  
こうなったら入ってやる。三日ぐらいならうなされてやろうではないか。俺は毎日痛みでうなされてるからな。

と、俺は覚悟を決め近衛と共に順番待ちをしていた。

## バカとチキンと沈黙ヒツジ（後書き）

寝起きに書くとても文脈がぐちゃぐちゃ…。

でも、頑張ります。書いてる内に上手くなることを願います。

## バカとチキンと出血大サービス？（前書き）

まず、始めに一言。

今回はマジで原作通りです。

自分でもビックリした。いや、本当に。

すいません。きっと途中から飽きてくるでありますように、よろしくお願いします。

## バカとチキンと出血大サービス？

「ふう……」

俺はドーム状の窓から見える青空を見上げ天を仰いだ。

さっきのお化け屋敷だが、入らなかったんだよ。

いや、正確には入れなかった。心情的には危機一髪。

実はあの後、俺達が入場一步手前の時、お化け屋敷館内で行方不明者が出たとかなんとか。

……どこのB級ホラーだよ。

まあ、皆もあまり入りたくはなかったみたいでそれを聞くと皆は抗議する様子もなく、足早に去っていった。

俺の隣のやつ以外は。

「うー……あと少しで入れたのに……」

と、近衛は悔しがる。まあ、仕方ないさ。ははは。

さあて、これからだが、うん。することもねえし涼月達と合流するか

「そういや午前中はどうだった？ずっと紅羽と一緒にいたんだろ？」

いや、まあね？あり得ないけど……あり得ないけどー！！

もし急に仲が良くなってたりしたら…怖いじゃん？  
万が一ってことで。

「ああ、楽しかったよ。女の子と遊ぶのは久しぶりだったからな」

「あの娘…紅羽ちゃんは明るくていい娘だ。きっとジローとも仲がいいんだろう？」

「ああ…普通の兄弟よりは仲が良いだろうな。…毎朝サンドバッグにされることを除けば」

「…羨ましく。ボクは家族とそこまで仲が良くないからな」

そういう近衛の顔は、暗い。

ひょっとしてケンカでもしてしまったんだろうか？

「実は、昨日もお父さんとケンカしてしまった」

「そうなのか？でも、きつとお前の親父さんだってケンカしたくてしたわけじゃないだろ。なんか理由でもあるんじゃないの？」

理由もなく息子をしばく母親も居るけどさ。

「でも、正直なんであそこまで怒っていたのか分からないんだ。八つ裂きにしてやるって叫んでたし…」

それはヤバイ。なにその猟奇的発言。怖っ。

俺からしたら「いただきます」と同じくらい家では使用頻度の高い

言葉だが一般家庭ではなかなかでない言葉だろう。

「分からない。どうしてお父さんはジローをそんな風にしたいんだろう？」

「……………え？」

「そのクソ眼鏡を俺の前に引きずり出せ！八つ裂きにして吊るしてやる！って大声で叫んでいたから、ジローの身の安全のためにも早く仲直りしたいんだ」

「ちょ、ちょっと待て！どうしてお前の父親は俺にたいしてそんなぶちギレてんの！？」

ワケわからねえよ。俺がいったいなにした？

「僕にも分からない。ただ始めて会った時のことを話したただけなのに…………」

ん？

「始めて会った時のこと？」

「ああ。始めて会った日。ジローが人気のない理科室でボクを押し倒して胸を触って鼻血を出したって」

「お前バカア！？んなもん勘違いされるに決まってんだろ！！」

怒り狂うのも無理は無さすぎる。どうしよう。とにかくこれから近衛の親父には会わないようにしよう。

殺されかねん。

と、そんなことを話していたら波の出るプールの前まで来ていた。

このプールは海を再現していて、足元が砂浜になっているという凝った作りだ。ここを過ぎれば、涼月達と合流できるはずだ。

と、そんなとき。

「なあ、ジロー。あれって人じゃないか？」

不意に近衛がプールの方を指差した。

つられてそちらを見ると、プールの奥の方で小さな人影のようなものが浮いたり沈んだり……っておい。

あれってどうみても溺れてないか？

「た、大変だ！早く係員を呼ばないと！」

しかし、回りには係員の姿はなく、運の悪いことに溺れている子の姿は死角かなんかで見えていないんだと思う。

こうなったらっ！

「近衛っ！お前は係員を探して連れてきてくれ！」

いいながらメガネを外して水着のチャック式のポッケにしまう。

距離は三十メートル位。行けるな。

「までジロー！助けに行くんならボクが――」

俺はその言葉を聞き終わる前に、飛び込んでいた。

クロールで水を掻き分け掻き分け掻き分ける。

時々来る波が少し邪魔だが泳ぎには少し自信がある。

なんせ昔紅葉とケンカしたとき極寒の真冬の川に突き落とされたけど無事生還したぐらいだからな。

「おい！大丈夫か！？」

溺れている子供を抱き抱えながら叫んだ。

近くには誰も使っていないビート板が波に揺られている。

これを使ってここまで来たけど何かの拍子で離して溺れたのか……！  
だが、俺は足が付くしもう急ぐ理由もない。

そうして子供を抱えもどろうとしたときだった。

「って……あれ？」

陸に戻ろうとしたとき、ようやく異変に気が付いた。

俺の回りの水が真っ赤に染まっていることを。

「なっ……！！」

二秒くらい呆気にとられたが理由はすぐに判明した。



鼻血。

そう、鼻血だ。

よくよく見ると子供は女の子。いくら小さかろうと女は女。

そして当然この子も今ので、パニックに陥ってるわけで

「た、たすけて！」

と、言って首の辺りにぎゅっと抱きついてくる。

その柔らかさはまさしく女の子の肌で：

「ぐはっ!？」

思わずぶっとびそうになった。意識を何とか繋ぎ止める。

ぎゃーっ。女の子にさえも反応するなんて俺はなんてチキン野郎なんだっ！

「——く、ううっ！」

朦朧とする意識のなか、必死にプールサイドまで引き返す。

本気で血がとまらない。

マジでこれ某サメ映画バリの出血量だ。

ムツツリーニと張り合えるやもしれん。

ああ、昨日の夜にレバーとホウレン草をバカ食いしたのが不味かったかな。

今日に備えたつもりが、かえって逆効果とは。

ああ、体の力が抜けていく……。目の前が暗くなってきた。

「ジローっ！」

周りの雑音がひどく静かに感じたとき、やけに大きな声が聞こえた。

このこえは……。

霞む視界に映るシルエット。

それが誰が分かった時、俺の意識は失われていた。

**バカとチキンと出血大サービス？（後書き）**

この頃お気に入り登録件数が増えなくて泣きたくなってきました。

やはりダメですよね……（泣）

でも、頑張ろうかな…はい、頑張ります。

では次回もよろしく願います。

## バカとチキンとスタンド・バイ・ミー（前書き）

ぐたぐたですね。ええ。この頃小説買いまくって読みまくってうまくなってるのかな？

とか思ってますけど、小説読みまくって寝不足になってるせいで本末転倒な状況。

でも、まあ、頑張ります

## バカとチキンとスタンド・バイ・ミー

「なあ近次郎。お前自分の名前をどう思う？」

薬品臭い病室。真っ白な空間。

真っ白なベッドの上で、まだ幼かった俺に親父はそう言った。

痩せ細った親父の顔。

いや、元々痩せ細っていた。

親父は元々体が、特に心臓が悪かったらしく、何とか誤魔化し誤魔化し生きてきたのだが、俺が生まれて五年後——ついに医者に手術しないとくたばると宣告された。

手術の成功率は五分五分。

生きるか死ぬか半々である。

そう、この日はその運命手術がある日だった。

これが親子最後の会話になるかも知れないっていうのに、親父は呑気にそんなことを訊いてきたのだ。

……否、この日だから聞いたのか？

しかしこの頃はそんな考えもなく純粹に、心に合ったひとつの言葉をはいた。

「かっこわるい」

「バカ野郎。せっかくオレがつけてやった名前をかつこわるいとか言うんじゃない」

と、言った後、親父は俺の頭に拳を降り下ろした。

……軽い。とても軽く痛みさえない。当たり前だ。こんなガリガリな腕に殴られて痛い筈なんてあるわけない。

でも、

「……痛てえよ」

なぜか、痛くもないこの攻撃に対して俺はこう言わなければならない気がした。

そして親父はニヤリとそれでいて誇らしげに笑った。

「いいか？お前の名前には大事な意味があるんだ。ただの古くせえ名前じゃねえんだぞ」

「……やっぱ古くせえんじゃない」

「まあまあ黙って聞け。……なあ近次郎。お前、『スタンド・バイ・ミー』って知ってるか？」

それを聞いて幼い俺は数秒黙りこみ、「ガソリンスタンドの親戚？」と聞くと親父は呼吸困難に陥ってんじゃないの？と思うくらい大爆笑しやがった。

「ははは……。はあ。ちげえよ。いいか？ スタンド・バイ・ミーってのは『私の側に居てください』って意味なんだよ」

「蕎麦？」

「そっちのそばじゃねえ。要は私の近くに居てって意味だ。どうだ？ ロマンチックだろ」

「……わかんないよ」

「ハハ。まあ、そりゃそうだな。五歳児にはハードル高かったか」  
当たり前だ。

自分の名前すら満足に書けない子供に聞く方が無茶だ

きっと親父もそんなことはわかっていたはずだ。

でも——それでも親父は真剣に話の続きをしてくれた。

「いいか、近次郎。お前の名前に入ってる『近』って漢字はそういう意味なんだぜ。要は、お前には誰かにスタンド・バイ・ミーって言える男になってほしいわけよ」

「誰か？」

「そう、誰かさ。きっと誰かはお前の大切な人達だ。母さんや紅羽、それにお前が大事だっと思える人。そいつらにスタンド・バイ・ミーって言ってやれる男になれ。お前の名前にはそういう意味が込められてるんだぜ。かっこいいだろ？」

「……まあ、そこそこね」

なにがなんでもおかしいのか、父親はげらげらと笑っていた。

「強くなれよ、近次郎。お前はオレと母さんの子だからきつと強くなれる。強くなってお前の大事な人達を側で護ってやれ。約束だぜ。スタンド・バイ・ミー。それがオレとお前の——坂町次郎と坂町近次郎の約束だ」

「……うん、わかった」

実際全く分かってなかったが、俺はとりあえずそう頷いておいた。

まあ当時のオレの夢はウルトラマンだったからただ強くなりたかっただ毛かもしれないし、自分は子供ながらその言葉の真意を読み取ろうとしていたのかもしれない。

ああ——でもさ、親父。

困ったことに、俺は未だに良く分からないんだ。

スタンド・バイ・ミー。

あんたが残したその言葉の意味。

なんでそんなこと言えなくちゃなんねえんだよ——。





不意に、目が覚めた。

なんだが……懐かしい夢を……見ていたような。

眩しい光に目を細めると、視界にはガラス越しの空があった。

どうやら俺の身体はプールサイドのベンチに横になっているらしい。

「よかった。目が覚めたのか」

上からアルトボイスが響いた。

近衛だ。

ああそっか。俺は溺れた子供を助けようとしてプールに飛び込んで……うわ、思い出したくねえ。そういえば俺は女の子を抱えたまま失神したのか。情けねえ。腕時計を確認すると……どうやら十分位倒れてたみたいだ。

「大丈夫か、ジロー」

「ああ、ちょっと死んだ親父と再会してきた」

眼鏡をかけながらそう言うと、近衛は眉間にしわを寄せた。

「頼むからそういう冗談は止めてくれ。こっちはお前まで溺れたから心配したんだぞ。それに……」

「それに？」

「い、いや、何でもない。忘れてくれ」

「？まあ、分かった」

少し胸に疑問を抱えたまま、俺はベンチから立った。

「お、ジロー起きたか。ほらポカリ、やるよ」

「ああ、ありがとな雄二。——雄二っ！？」

バツと後ろを振り返るとなんとそこにはいつものFクラスメンバーが居た。

と、工藤と木下と霧島。

「……な、なんでお前らがここに……いや、そうか。霧島か」

「ははは♪ま、そゆことだね」

「……でも、ビックリした。近次郎が幼女…訂正、小さな女の子を抱えて気絶しててたから」

うわぁ……ムツツリーニに哀れみの目で見られた…。

「で、逆に聞くんだが、お前らは今日二人で来たのか？」

……………言えねえ。

ここで本当の事がバレようものなら速攻で異端審問間へレッツゴーだ。

何としても「さっき近次郎と涼月さんが遊んでたよ？」明久あああああ！！

その言葉で皆の表情が固まった。

「え？……まさかあの学園のお嬢様と……B L 君が？」

「待て工藤。お前今なんだった？」

「え？B L君だけど？」

「うわあああああ！？」

なんてこった！！ついに妹だけじゃなく別クラスにまでええええ！！

「ていうか大丈夫なの？近次郎。あの様子だと結構……」

「ああ、この頃は出血する機会が多くなったからな」

それはそれでいいのか？という雄二の声が聞こえるがここはスルー。

それにしても……。

「ああ情けねえ。張り切って助けにいったのに、結局なにもできなかったのか」

「そんなことはない。お前は十分浅瀬まで来ていた。ボクが行かなくてもあの子は助かっていたさ」

「そうか？」

「ああ。それにしても良くあそこまでこれたな。あんなに強く女の子にだきつかれたのに」

「……まあ、な」

だってあそこで倒れたらヤバイじゃん。

男子高校生・溺れた小学生を助けようとして鼻血を出して溺死。

世界変死ランキングの堂々一位を飾るだろう。

「でも、立派だったぞ。幼い女の子に抱き付かれて鼻血を出しながらも、しっかりと人命を救助した。すごい立派だ」

「……………」

すごいね。全く立派に聞こえないや。

「……まるで俺がロリコンみたいな言い方だな」

「え？……違うのか？」

「おおい！？まて待て！！俺はロリコンじゃ……おい、皆も引いてんじゃねえええ！！」

俺の魂の叫びが辺りを木霊した。

バカとチキンとスタンド・バイ・ミー (後書き)

この後なにも考えてない……！

てか、アイデアが浮かんできません。

どうしましょう。

## バカとチキンと誘拐犯（前書き）

すみません。今回はきりの良いところで切り上げるためにかなり短いです。

まあ、明日もできれば投稿しますのでお許しを。

## バカとチキンと誘拐犯

「俺達は飯食いに売店に行くからこっちか……」

「ああ、そうなるな」

その後、俺と近衛はA、Fクラスメンバーに質問攻めにされ（涼月とはどんな関係なのかとか。でもなぜが木下だけがやけに興奮しながら近衛とどういう関係か聞いてきたなあ）仕方なく答えられる程度のことは答えた。

「ハハ。んじやな。また明日、学校で」

「ああ。そうだな」

雄二とそんな軽いやり取りを行って背を向ける。

それにしてもこんなところで会うなんて涼月の仕掛けとかじゃねえだろうな？……涼月？

その時、俺は重大な事に気が付いた。

「ああ！？ やっちまった！ おい近衛！ 涼月の事忘れてた！」

その言葉を聞くや否や近衛顔は真っ青になっていった。

「なんて失態だ。ボクとしたことが、こんなに長い間お嬢様から離れてしまうなんて……」

そこまで心配しなくてもいいんじゃない？

だっていくらにはなれてようが涼月の隣にはあのモンスターが居るんだぜ？

きつとそこらで遊んでるだけだろ、

そう考えてた時だった。

「ねえねえおにーちゃん。おじさんがこれ、渡してだって」

後ろから聞こえたのは、小さな子供の声。

振り向いて子供を見るとその子供の手には黒いケータイが握られていた。

子供はそれを渡すとじゃあね、と言って走り去っていく。

なんだこれ？ いや、ケータイってのは分かるんだけどさ…涼月ってケータイ持ち込んでたっけ。

近衛に顔を向けると、

「……お嬢様のケータイはこれとは違う」

「そうなのか？ じゃあ、これは誰の——」

と、言いかけた瞬間。

不意に、ケータイの無機質な着信音が鳴り響いた。



着信アリだ。しかもテレビ電話。親切に非通知設定もしてある。

「出してみよう」

近衛がそう言い通話ボタンを押した。

そして液晶画面に写し出されたものは、犬。

……じゃないな。多分狼かな？のマスクを被った人影だった。

それにしてもマスクが、妙にリアル。

軽く怖いな。夢にでも出てきそうだ。

『アー、アー、ハローハロー？聞コエマスカ？』

ケータイのスピーカーから音声が漏れだす。

ボイスチェンジャーを使っているんだろう。

お陰で女か男かもわからない声が耳に飛び込む。

「聞こえるぞ。お前は誰だ？」

そういう近衛の声は鋭い。俺なら間違いなく二秒でゲロツてたな。

『ヒヤハハハッ！ナアンド、意外ト落ち着イテルンジャナイカ。大事ナ大事ナご主人様ガイナクナツタツテイウノニサア。エエ？近衛スバル』

ひどくねじれた声で狼は嘲るように近衛の名を呼んだ。

……待ってくれ。

なんでコイツ、涼月が居ないことを知ってるんだよ。

いや、大体は答えは出てた。

分かりたくなかっただけで。

このタイミングで涼月が居なく、テレビ電話でこちらに接触をはかってきたのは得たいの知れない変なやつ。

そして問いかける言葉は俺たちが今探している、涼月について。

「……もう一度だけ聞く。お前は、誰だ？」

近衛はケータイを持っていない方の手を爪が食い込むほど握りしめながら再度、そう聞いた。

『ン？俺カイ？俺ハ別ニ怪シイモンジャナイヨ。俺ハタダノーソ  
ウタダノー』

誘拐犯サ。

再び、画面の向こうの狼仮面は耳障りな哄笑をあげた。

俺には、それが全ての始まりに思えてならなかった。



**バカとチキンと誘拐犯（後書き）**

ああ…疲れた。

今日はもう寝ましょう。

お休みなさい。

## バカとチキンと刃物恐怖症（前書き）

ああ〜肩凝った〜。

頑張った〜。

……私の頑張りは報われなさそう。

ではどうぞっ。

## バカとチキンと刃物恐怖症

「誘拐犯…だと？」

『アア、ソウサ、ジロークン。キミノ妹トクラスメイトハ、オレガサラッチャッタヨ』

画面が切り替わり、写し出されたものはどこかの薄暗い部屋のなか、良く見るとそこには横たわるようにして二つの影が見えた。

それは涼月と――。

「紅羽！」

二人とも、まるで死んだように動かない。

意識がないのか、それとも……。

『大丈夫大丈夫。スヤスヤ眠ッテルダケダヨ。言ッタロ？俺ハ誘拐犯ダ。殺人犯ジャナイ』

再び画面が狼マスクに入れ替わる。

『マ、コレカラモソウトハ限ラナイケドネ』

「……てめえっ！」

「落ち着けジロー。挑発に乗るな」

「……っ！」

無茶言うな。無理だよ。今すぐコイツを殴りたくて仕方がない。

「答えろ、誘拐犯。お前の目的はなんだ？」

『ヒュウ♪サスガ執事クン。冷静ダネエ。ソレトモ意外ニ冷タイノカナ？ご主人様ノコトハドウデモイイ？』

「黙れ。二人に指一本でも触れてみる。一本残らずお前の指を切り落とす」

近衛の爪が、さらに深く手に食い込むのを見た。  
コイツもやはり落ち着けてはいないらしい。

『ウワー怖イナ！。ソナコトサレチャツタラ二度トジャンケンガデキナクナツチャウジャン。ア、ナンナラジャンケンデ決メヨウカ？ソッチガ勝ツタラ二人ヲ解放。オレガ勝ツタラ二人ヲ殺——』

「黙れと言ったんだ。こんなふざけた会話をするためにお嬢様たちを誘拐したわけじゃないだろう。目的……いや、要求を言え」

『ヒヤハハハッ！要求！要求カ！イイノ？ジャア言ツチャウヨ？ハ——イ、オレ様の要求ハオンリーワン。コレカラ一緒ニ仲良ク楽シク遊ビマシヨ？』

……イカれてる。

俺はそう確信した。

この野郎は絶対にまともではない。

『今カラ十分以内ニソコノ近クニアル建設中ノアトラクションニ来テネ。ソコガゲームノ会場サ。モチロン、警察ニ通報ナンテシタラ、ワカルヨネ？アア、後アノバッグノ中ノ危ナツカシイ道具ヲ取りニ行ツテモ死亡フラグダゼ』

「……………！なっ……………どうして……………」

俺は息を飲んだ。

なぜコイツがそれを知っている？

『ドウシテダツテ？ソンナノ簡単ダヨジロークン。オレハ君ヲヲズツト尾行シテタノサ。ココニ入ル前カラズツトネ』

イワユル計画的犯行ツテヤツサ。と言って、狼マスクはまた笑った。

『長カッタヨ。ズーッとコノトキヲ待ツテタンダ。ソコノ執事クンニ復讐スルチャンスヲネ。今度ハミスラナイヨウニシナクチャネエ』

今度はミスらない。

と、言うことはコイツはもしかして涼月が言っていた誘拐犯の一人なのか？

全員捕まったって言ってたけど逃げたやつが居たのかよ。

「分かった。で、そこに行くのはボクだけで良いのか？」



「——っ！？お、おい近衛！」

思わず叫んでしまった。

「バカ言うな！こんなの明らかに罠じゃねえかよ。それに紅羽も捕まってるんだ！俺も一緒に——」

「ジロー。こうなったのはボクの責任だ。紅羽ちゃんはず助け出す。だから、ボク一人で行かせてくれ。それに——」

ジローに、こんな危険なことはさせられない。

近衛ははっきりと言い切りやがった。

……ふざけんな。

黙って待ってろって言うつもりかよ。

なにもせずに神様に祈ってろってか。

自分の妹が——大切な人が危険だったのに……！

「ヒヤハハハッ！イイネエ青春ダネエ友情ダネエ。別ニオレハドツチガ来テモイイヨ。執事クンデモジロークンデモ、ゲームノ内変ワラナイカラサ。タダシ——」

果たシテ君ハココニタドリ着ケルカナ？近衛スバル。

言って、狼マスクは懷から銀色にかがやく物体を取り出した。

ナイフ。

それは刃渡り二十センチもありそうな、やけに禍々しいデザインのナイフだった。

それを知っている見た瞬間、近衛の顔が驚愕に染まった。

「お、おまえ……!!」

『ウン？ナンダイ、別ニ不思議ジャナイダロウ。キノラノコトハヨオーク調べタンダ。』  
『対策』ヲ立テラレルクライニハネ』

「……っ!!」

『サア、ソロソロ宣戦布告ハ終了。ソレデハ御機嫌ヨウ。バイバイ、執事クン』

挑発するような口調と共に電話が切れた。

それでも近衛は手に強くケータイを握りしめていた。

そしてその指は、震えていた。

「近衛……?」

不安になり名前を呼んだ。

しかし帰ってきたのは沈黙。

いや、それどころか――。

「お、おい!？」

糸の切れた人形のように、近衛は膝から崩れ落ちた。

「あ、ジロー……」

青ざめた唇が弱々しく動いた。

「し……心配するな。ちよつと……フラツとしただけだ……」

そういう近衛はどうみても普通ではない。

まるで俺の……あ。

そう。

まるで俺じゃないか。

女性恐怖症。

鼻血こそ出ていないが、今の近衛は恐怖症の発作が出たときの俺と同じだった。

そう、あの狼マスクが出したナイフを見てから――。

「……………っ!」

ドクンと心臓が跳ねた。

そうだ……涼月が言っていた。

弱点。

近衛には執事をやっていく上で致命的な弱点がある。と

今の近衛の症状。

俺の女性恐怖症に似た症状。

まさか、

「近衛……もしかしてお前……刃物が——怖いのか？」

辿り着いた答えは、いわば刃物恐怖症。

思えば、おかしな所は前々からあった。

『料理ができない』

つまりそれは包丁。

刃物を使えないから、そして、

あのバッグの中身。

そう、防犯グッズは気持ち悪い位入ってたのに、『ナイフ』などが一切入ってなかった。

「……ジローの言う通りだよ。ボクは、刃物恐怖症なんだ」

近衛のしゃべり方はまるで自分のつみを認めるようなものだった。

やっぱり刃物恐怖症。それが涼月の言っていた近衛の弱点。

ということは原因は……。

「前にここで誘拐されたときになんかあったんだな。それが今の恐怖症のきっかけか」

推測だがさらわれたときにナイフで脅されたりしたんだろう。

「ああ、情けない話だ。あの事件以来、ボクは刃物が怖くなってしまった。刃物に触る……いや、見るだけでも体に力が入らなくなってしまうんだ」

精神的外傷。

それがもたらした恐怖。

その感覚は良くわかる。

心でどう思っても、体が言うことを聞いてくれない。

同じような恐怖症を持つてるおれには近衛の気持ち痛みくらいに共感できて――。

「……………」

——待てよ。

まさか、コイツがやけにあっさりと俺の恐怖症を治すのに協力してくれたのは、同じような恐怖症を抱えていたからなのか？

自分と同じような悩みを抱えていた俺を、ただ助けるために……。

「すまない、ジロー。もう大丈夫だ」

俺の手を振り払って、近衛はふらつく足で立ち上がった。

……バカじゃねえの。

これのどこが大丈夫なんだよ。

「ジロー……ボクは、執事として欠陥品だ」

「……………」

「ただでさえ男の子じゃないのに、その上刃物恐怖症……。こんなボクが……主も満足に護れないボクが、お嬢様の執事をやっているのはおかしいのかもしれない。でも、それでもボクは——お嬢様の執事で居たいんだ」

今にも倒れそうな、近衛。

ヒツジ。

これじゃあまるで羊だ。

飢えた狼に襲われた小さな羊。

その獰猛な牙に襲われながらも必死に逆らおうとしている。

ただひたすら、自分の主を守るために――。

俺はそんな近衛を見て、

「……なっ…」

無言で拳を腹にかました。

## **バカとチキンと刃物恐怖症（後書き）**

次はきつと二日後か三日後になると思います。  
多分。

ではまた次の更新で。



## バカとチキンとバイオハザード（前書き）

すいません。最近スランプで、ちょっと書けませんでした。

なので新しい作品を投稿して気分転換を。

では、どうぞ。

## バカとチキンとバイオハザード

「ジ、ジロー……?」

腹に拳を強く入れられた近衛は苦悶と疑問の色交えた目でこちらを見ている。

「ごめんな近衛。今は何にも出来ねえけど後で何でも言うこと聞かからさ。だから、今は少し眠っててくれ」

そして俺はもう一発、確実に意識を刈り取るために当て身を入れた。随分昔に母さんから聞いたやり方だったけど、うまく行ってよかった。

静かに、近衛は意識を失ってくれた。

その体をプールサイドのベンチに寝かす。

はぁ…。何て俺こんなことしたんだろ。

どうしてこんなことをしたのか自分でも分からない。

でも、一つだけ言えることがあるなら……

「スタンド・バイ・ミー……か」

何故か親父の言葉が聞こえた気がした。

理由としてはそれだけ。思えば、最初の理科室の時やさっきのプールに飛び込んだ時の感覚に似ている気がする。

——俺が護らなくちゃいけない。

何となく、そんな風に思ってしまったのだ。

「あーあ、ほんと訳わかんねえよな……」

ガラス越しの青空に呟いた。

——さて。

んじゃ、ちょっくら行こうかな。

——誘拐犯ん所に。

向こう約100メートル先にあるそこそこの大きさの建築物、まだ外見はしっかりしてはなく、まさに今造ってます状態の建物。

それに向かって歩き出したその時だった。

「どこ行くんだ？」

死角になっている部分から聞こえたひとつの声。

そう、この声は俺の悪友にしてFクラス代表様の——。

「……雄二か」

「悪いが電話の内容は聞かせてもらった。……で、どこいくつもりだよ」

「狼退治だよ」

「……手、貸すか？」

姿が見えないため、顔も拝めないがコイツもやはり心配してくれてるらしい。

なんかむず痒いな。

「ああ。——と、言いたい事なんだけどな。正直これは俺があいつをぶん殴りに行きたいだけなんだ。だから今回は、いらね」

「そうか。じゃ、がんばれ」

雄二にしてはやけに素直で気持ちの悪い反応。

ははは、これボイスレコーダーに取っておきたかったな。

「ああ、頑張るよ」

それだけ言って、俺はまた足を進めた。



立ち入り禁止の看板を乗りこえて、師事された建物へと踏み入れる。

建設中のアトラクション。

運営は夏からのようで、中は作りかけの設備や資材で溢れていた。非常灯に照らされた薄暗い通路を歩いているとすぐに、後攻の教室ぐらいの殺風景な部屋に出る。

闇の残る室内。

部屋には窓はなく、小さな電灯だけが俺と――ソイツを照らしていた。

「サア我ガアトラクションニヨウコソ。待ッテタヨ、ジロークン。モットモ、本当ニ君ガ来チャウトハ思ワナカッタケドネ」

黒いスーツにオオカミのマスク。

そこにいたのはさっきの電話――つまり誘拐犯。

不安と焦燥。

その二つが胸のなかで混ざり、黒い感情が構築される。

ざっと周りを見渡してみるが涼月と紅羽の姿は見当たらない。

「ゴ心配ナク。二人ハ後ロノドアノ奥サ。アア、ソレニシテモサツキノキミハ格好良カッタネエ。漫画ノ主人公ミタイデ」

笑うオオカミ。

ちっ。どっかから見られてたのかよ。まあ、想定内だ。だよな、それぐらいしないとこんな行動は出来まい。

「ネエ、ナンデコンナコトヲシタンダイ？二人デ来ルツテ選択肢モアッタノニ」

興味深そうに、機械仕掛けの声は聞いてきた。

今一度言おう。

……知らねえよ。

出来れば俺が聞きたい。

確かに二人で来た方が効率的には良かっただろうし、近衛一人で来た方が俺一人より圧倒的に良いだろう。

でも、

それだけは、嫌だった。

近衛を危険な目に遭わせるのだけは……。

それに――。

「ムカついたからだろうな、あんたに」

胸の奥で、どす黒い感情が焦げ付いている感覚。

このイカれた野郎だけは許せない。

紅羽と涼月を誘拐したコイツは、近衛に欠陥品だなんて言わせたこいつだけは……。

絶対に、許せない。

「ソウカイ。マア、キミが来タトコロデゲームノ内容ハ変ワラナイカラ安心シテクレ」

——オレニケンカデ勝テバイイ。

ソレダケサ、とオオカミは笑った。

「……殴り合えってのか」

なるほど。そりゃあわかりやすい。

正直これで数学の問題とかだったらリタイアしてたよ。

「キミガ勝ツタラ二人ヲ解放。キミガ負けタラ二人ト一緒ニ捕まッてモラウヨ。ソレデ執事クンガ起キテ来ルノヲ、三人デ待ッテテモラオウジャナイカ」

「……………」

この状況になっても出るのは、近衛の名前。

目的はやっぱり近衛。

俺は眼中にも無いらしい。

けれど、本当にこいつの言う通りなら、俺にだって勝ち目がある。

伊達にあんな家庭で生きてきたわけではない。

紅羽じゃないにしろ俺だって格闘技の一つや二つは使える。

まあ、母さんに無理やり覚えさせられたんだけどな。

それに、あんなことをした以上、引けない。

勝って、紅羽と涼月を取り戻さなくちゃ――。

「アア――ソレカラ一ツダケ。一番大事ナコトヲ言ッテオクヨ」

そういつてオオカミは人差し指をピツと立て、本当に一言だけ、

「――シナナイデネ」

それが――始まりの合図だった。

驚くことにオオカミはたった一步で五メートル程あった俺との距離がゼロにされた。

そして、

「!!」

速い。

驚くほどに移動速度も早ければ攻撃へのモーションも速い。



俺はとっさに腕を構えたがそんなものも意味はなく、相手の拳は俺の腹に突き刺さっていた。

「ぐう！」

反動で後ろに吹っ飛ばされる。

反射的に両腕でガードしたが、それでも視界が揺らいでしまう。

……やばいな。

これじゃ紅羽のエルボー・ドロップ並じゃないか。

強い。

信じたくないが、コイツ、母さん並に強い……！

「調子こいてんじゃねえぞ、クソガキ」

低く掠れたハスキーな声。一瞬だけ、今までと違った声が聞こえた気がしたがそんなことは考えられなくなった。

「ごはっ……！」

射抜くようなボディブロー。脇腹を貫く激痛に呼吸が止まる。たまらず膝をつきそうになるが、踏みとどまる。

……そうだ。

まだ、倒れるわけにはいかない!!

「ヘエ、丈夫ダネエ。今ノヲ喰ラッテ立ッテラレルナンテサ」

最初と同じ軽薄な口調。

応えるように俺は笑ってやった。

「は、はは。当たり前だ。あいにくこの程度で倒れちまうような――そんな羨ましい教育は受けてねえんだよ!」

言いながら、思いっきりオオカミの脇腹を殴り返す。

入った。

ジャストミート。しかも俺の渾身の一撃だ。

しかし――。

「ヒヤハハハッ!」

聞こえたのは苦悶の声ではなく、機械仕掛けの哄笑だった。

……嘘だろ。

ビクともしない。

まさか、全然効いてないのか?

「ぎっ……!?!」

お返しとばかりに叩き込まれた左の拳に、肋骨が軋む。

次は膝蹴り。

背中まで突き抜ける衝撃が、鳩尾にめり込んだ。

「ジロークン。悪イケド、マダ続ケルンナラゲームノ名前ヲ変ナク  
チャイケナイネエ」

苦悶に震える俺に、オオカミは冷徹な口調で吐き捨てた。

「新シイゲームノ名前ハ——バイオハザード。モチロン、血塗レノ  
ゾンビクント戦ウノハコノオレダ！」

瞬間、右アッパ。

顎への一撃に膝を喰らって前のめりになっていた体が起き上がる。

やべえ、ぐにやぐにやだ。

どうやら今の一撃で脳を強く揺らしてしまったらしく、のうしんと  
うを起こしている。

これじゃ、もう防御すら——。

「……っ！」

衝撃に、身体が揺れる。またどこかを殴られた。

もう口んなかは血の味しかない。

ガクガクと力を失った膝が床につこうとして、

「ぐあっ!？」

前に倒れようとした俺の顔に容赦のない蹴り。

セリエA並みのフリーキックだ。

俺の頭がサッカーボールだったら鮮やかにゴールネットに突き刺さっていただろう。

そして後ろに倒れた瞬間に腹を台所に出た生命体Gをを踏み潰すかのように何度も何度も……。

やべえ。

口んなかから内蔵がところてんみたいに出てきそうだ。

殺される。

瞼の上から流れ出した血で真っ赤に染まった視界がそう告げていた。

最早、満身創痍。

ここで気を抜けば即座に昏倒出来るだろう。

が、

「く、はは」

やっと踏みつけが終わったとき、俺は乾いた笑い声を出していた。

「たっ……大したことねえな。うちの家族の一家団欒に比べれば、こんなの青空の下のピクニックに近いぜ……」

強がりだけで、口を動かす。

あ、眼鏡のレンズにヒビが入ってやがる。こりゃ買い換えなきゃいけないかもな。

「……っ！」

俺が立つのを待っていたように攻撃が再開される。

身体を引き裂く激痛。打ち込まれる連打。

一方的な暴力。

もはや、立っているのがやっと。

このまま、意識を失ったら、きっと楽になれる。

でも——それじゃだめだ。

だめなんだ。

「何度でも……立ち上がってやるぞ、クソツタレ」

バイオハザード？ 上等じゃねえか。血に染まった口を吊り上げて、それこそゾンビの様に微笑んでやる。

ああ。そうだ。

どうってことない。

俺の育ってきた家庭環境に比べればどうってことはないんだ。

「なあ、あんた。近衛が刃物恐怖症って知ってるんだよね？」

「…………。アアソウダヨ。ソレニシテモヨク続ケラレルヨネ。執事ナンテ」

「はあ？何言ってるんだテメエ。何で続けちゃダメなんだよ。『たかが、刃物恐怖症位で』」

「当たり前ダロウ？使エナイ執事クンハ要ラナイジャナイカ」

ヒヤハハハッ！

と、また嘲るように笑った。

プチっ。と、何かが切れるような音が俺の中で響く

「ざっけんな！使えない？んなことはお前がきめることじゃねえんだよ！涼月がそう言ったのか？何も知らねえくせにふざけたこと抜かしてんじゃねえ！！」

「——サア、ソロソロゲームセットノ時間ダヨ」

機械仕掛けの声が告げる。

その手には――ナイフ。

触れただけで血が噴き出しそうな鋭い刃。

銀色の切っ先が、俺に向けられていた。

「流石ノ君モ、手足ノ筋ヲ切レバユックリ休ンデクレルダロウ。本当ハココマデシタクナカッタケド……仕方ナイカナ」

マズハ右手ダ、と一直線にナイフが降り下ろされた。

ああ、ちくしょう。

もう、避ける気力すらない。

けど、このままで終われるか。手足が動かなくなっても噛みついてやる。

この虫歯なし天然の歯でな。

鈍い輝き。

迫り来るナイフ。

その鋭利な刃が俺に突き刺さろうとして――。

「待たせたな、ジロー」

そんな、透き通ったアルトボイスが――。

近衛が小さな掌でナイフを止めていた。



## バカとチキンとバイオハザード（後書き）

次くらいでようやくまよチキ！の原作一巻が終わるのかな？

ではまた次回にお会いしましょう。

あ、新作の方もよろしくお願いいたします。

## バカとチキンと完全決着（前書き）

本当にお久しぶりでございます。

言い訳はしません。

そしてちよくちよくちよくちよくねちねちねちねち書き続けた結果。

一万文字になりました！

ではどうぞ。

## バカとチキンと完全決着

「待たせたな、ジロー」

そのアルトボイス——近衛は、その小さな手のひらでナイフを止めていた。

「こ、近衛……！」

そこに居たのは近衛スバル。いや、『スバル様』

涼月の執事で完璧最強で女子の憧れの的、『スバル様』だ。

「ジロー、ここからはボクの仕事だ。だから、もう休んでくれ」

こちらにぎこちない笑みを浮かべながら、ナイフを受け止めた手から紅い雫を滴らせながらも絶対にナイフを放さない近衛。

「ヒヤハハハッ！オハヨウ執事クン。遅カッタジャナイカ」

オオカミは近衛が掴んだナイフをあっさりと放棄してバックステップをし距離をとる。

「アア、ソレト入場料ハ要ラナイゼ。コレハリターンマッチダ。キミニトツテモ、オレニトツテモネ。ソレニ、残念ナガラナイフハソレ一本ダケジャナイヨ」

言いながらも、オオカミは懷から先程と似たような形状のナイフを取り出した。

「ンン？震エナクテイイノカイ？アノトキミタイニガタガタブルブル。ヒヤハハハッ！本当ニキミハ子羊ミタイニズウーット震エテタネエ」

「……ああ、そうだったな。でも——」

今は違う。

近衛はナイフを床に捨てそう言った。

綺麗で、それでいて突き刺すように鋭い視線で。

「ボクは——」

絞り出すような声。

指先をみると、やはり震えていた。

刃物恐怖症。

きつと怖いに違いない。

逃げ出したいに違いない。

出来ることなら気絶だっと思っていただろう。

でも、それでも。

コイツは大切な人を助けるために、戦うんだろう。

「ボクは——執事だ」

言って、震える手を握り締める。

「だからナイフなんて怖くないんだ……っ！」

自分に言い聞かせるように呟き、拳を構えた。

その姿はまるでヒツジ。

飢えたオオカミに襲われた小さな羊。

その獐犷な牙に怯えながらも、必死に逆らおうとしている。

普通なら喰われて終わり。

哀れなヒツジは悲鳴を上げる間もなく、息の根を止められる。

弱肉強食。

弱いものは喰われ、強いものはそれを喰らう。

この世のルールだ。

でも——。

一匹、それぐらいならオオカミを殺すヒツジがいても良いのかもしれない。

勇者、主人公、特殊個体。

どんなものでも良い。

たまにはそんな、特別な、関係をひっくり返す様なヒツジがいても良いはすだ。

狼の喉を食いちぎるようなヒツジがいても良いはすだ。

狼の牙をへし折ってやるヒツジがいても——良いはすだ。

だから——。

「悪いな、スバル様」

気合いを入れなければ今にも消えそうな意識を繋ぎ止め、俺は声を出した。

「後は、頼んだ」

その俺の一言に、彼女は一言だけ「任せろ」と呟いた。

それが——開戦の合図だった。

オオカミは、弾かれた弾丸の様に走り出す。ナイフを構えて。

動きに合わせてまるで閃光の様に光るナイフ。

ただ確実に仕留めるために、刃を剥く。

しかし、近衛は避けようとしなない。

それどころか――。

「!?!」

驚愕に息を飲む。

驚くことに、近衛はナイフを飛び越えるように、跳んでいた。

宙を舞う身体。

驚くことに、そのままナイフを踏み台にするように足をかける。

「ああああああああっ!」

吼える。

ナイフを踏み台にして更に高く跳んだ近衛の身体が――廻った。

背中を見せつけるように勢いをつけて回転。

ただ蹴りの威力を上げるための加速。

そう、蹴り。

俺は、知っている。この技を、一度だけ母さんから受けて、即座に失神した。

ローリング・ソバット。

綺麗な弧を描く右脚。

決るようなその一撃が、オオカミの顔面に突き刺さる……！

「……………！」

蹴りの威力にどうやら言葉さえも出せる余裕がないらしく、そのまま無言で吹っ飛ぶオオカミ。そして、沈黙。

……………オイオイオイ。マジかよ。

スマート過ぎるぞ近衛さんよ。

あろうことかコイツはオオカミの喉を一発で喰い千切りやがった。

ああくそ。ほんとかつこよすぎるぞコイツ。

今ならキャーキャー言ってる女子の気持ちも分からんでもない。

確かに、今の近衛は惚れそうなくらいかつこよかった。

しかし、今はそんな場合じゃない。

「こ、近衛。二人はそのドアの奥だ……！」

そう言うのと近衛はそちらへ走り出す。

俺も軋む身体を何とか堪えてそちらに向かう。



ドアの向こう。

そこにあっただのは四畳ほどの小さな部屋。

手錠をかけられて床に寝かされている二つの人影。

「紅羽っ！」

横になっている妹に駆け寄る。……よかった。怪我はない。どうやら薬かなんかで眠らされたらしい。

「スバル、ジローくん……」

涼月の少し虚ろな声が聞こえる。

そちらに目を向けると近衛が涼月を抱き抱えるようにしていて、近衛は目から透明な涙を流していた。

「お嬢様……申し訳ありません。ボクが……ボクが気を抜いたせいでお嬢様と紅羽ちゃんをこんな危険な目に逢わせてしまいました。ボクは……執事失格です」

しゃがれた声で、執事は言う。

それに答えるように、主は微笑んだ。

「ううん。そんなことないわ。貴女はちゃんと私を護ってくれたじゃない。主としてこんな優秀な執事をクビにするわけにはいかないわ」

穏やかな声色。

それが引き金だったようで近衛はぼろぼろと泣き始めてしまった。

そうして言った。

主としてではなく——友達だった頃の呼び名を。

「……カナちゃん」

「なあに、スバル」

「こんなボクでも……こんな駄目な執事でも、カナちゃんのそばにいても良いのかな？」

「……ええ、そうね」

そうして彼女も言った。

友達としてではなく、主人として。

「これからずっと、そばにいなさい。執事として——友達として。一生私に仕えなさい。これは、命令よ。スバル」

その言葉に近衛は涙を拭い、執事——近衛スバルとして答える。

「……はい。かしこまりました、お嬢様」

主と執事。

お互いがお互いの関係を、存在を確かめ合うように見つめ合っていた。

ああ——とりあえず、一件落着なんだよな？

あ、そう考えてきたら段々眠気が襲ってきたぞ……。あゝ……。意識が……。

と。

不意に後ろからパチパチパチと乾いた音が聞こえてきた。

振り向くといいたのはオオカミマスク。

マスクのせいで表情は窺えないが態度を見る限り先程のダメージが無かったかのように平然としている。

嘘だろ……。

「お前……まだやるつもりか」

俺がそんな現実にくよくよ打ちのめされてるにも関わらず、近衛は拳を構える。

しかしオオカミはそれに答えなかった。

オオカミは先程のように軽薄な声も出さないで、ただただ無言で自分のマスクへと手をやった。

そこに現れたのは精悍な顔付きの二十代後半ほどのクールな感じで黒のスーツがよく似合う男だった。

男はマスクのせいで乱れてしまった髪を軽く整え、眼鏡を着けた。

そして、変化は起きた。

「なっ——」

驚いたようなアルトボイスが何もない部屋に木霊する。

ちよい、まで。なんだその『えっ!?!』なんでお前がここにいんの!?!  
『みたいなノリ。嫌な予感しかしねえぞ。』

「そ、そんな……どうして……」

目を見開いて驚愕と言った表情をものの見事に形成する近衛。

対する男は少しタイミングを見計らったかのように眼鏡をクイツとあげてから、

「スバルうううっっ!!」

見た目を裏切るようなキモい声を上げながら、近衛に抱きつきやがった。

……いや、まで。見た目云々は一度おいておいてそんなんじゃないよ。試合で勝ったバッテリーでもないのになんでコイツは近衛

に熱烈包容してんの？

「ああ、彼はスバルの父親よ」

さも当たり前のように、俺のまったく状況の読めない脳みそに新たな情報をぶちこんでくる涼月。

……はあ、父親ね。OKOK父親……はあ！？

「ちよまで！今お前とんでもねえこと言わなかったか！？」

「そう？彼は近衛流。若く見えるけどれっきとしたスバルと父親よ。ついでに言うとな私の父、学園長の執事をやってるわ」

「……………」

「どう？ビックリした？」

「……いや、うん。なんかビックリって言われても……うんまあ」

ビックリって訳ではないが、ひとつだけわかったことがある。

それは、

どうやら俺は嵌められたらしい。

頭のなかで全ての紐が繋がった瞬間、俺の意識は綺麗に吹っ飛んだ。



暖かな光り……。。

俺が最初に見た光景だった。

目を少しあけて見ると天井には見慣れないシャンデリアがそこにあった。

え？

その物体の存在に驚いた俺は慌てて腹筋に力を入れ身体を起こそうとするが、俺の身体にズキンッ。と衝撃が走る。

「痛っ」

軋むような疼痛。

その痛みにより覚醒した意識は、先程の惨劇も思い出させてくれる。身体を見ると至るところに包帯が丁寧に巻かされていて、枕元に置いてあった眼鏡も何故か修理されていた。

そして、周囲を確認。

高そうなベッドに絨毯、良さが分からないが何か高貴なオーラを感じさせるアンティークの品々。

ここは……一体……。

「よう、起きたか」

と不意に、部屋の隅からハスキーボイスが響いた。

肉体的嫌悪感を抱きつつそちらを見ると居たのは。

きつちりと整った髪に銀緑の眼鏡。

オオカミ……ではなく近衛流、近衛の父親らしい。

「どうだ？身体は痛むか？このラブコメ野郎」

「ラブコメって……どういことだよ」

「ああ？俺の娘を人気のない理科室で押し倒して胸を揉みしだき鼻血出したんだろ。そんなうやらま……。不届きな奴はラブコメにかいないだろう」

デンジャーデンジャー。コイツ実の娘の胸を揉みしだいたことを羨ましいとか言いやがったぞ。執事とかの前に人間をやり直すことを勧める。

「奏お嬢様に感謝しろ。お%Ａズキ痛みやがるし。

「仕方ないだろう。お前には最初の一撃で気絶してもらおう予定だったんだ。恨むんならタフなお前を呪うことだな。しかも俺はしっかり加減した」

「ダウト。あんた絶対本気だっただろ」

「嘘じゃねえ。俺だってお前を殺したい衝動をなんとか押さえて半殺しにするので精一杯だったさ」

ああ、コイツとは仲良く出来ないな。

仲良くする気もないけど。

近衛と同じ執事の服を着た『オッサン』。

と言うことはここは涼月の屋敷か何かなんだろう。

「……紅羽は？」

「安心しろ。彼女には隣の部屋で眠ってる。元々傷付けないシナリオだったからな」

シナリオ、ね。

やっぱりあのレジャーランドの一件は涼月の計画だったのか。

まあ、わざわざそんな面倒くさい真似をした理由は……。

「なあ、ひとつ聞いていいか？」

「なんだ？ 『お義父さんって呼ばせてください』 って頼み以外ならなんでも聞くが？」

「……呼ばねえよ。あんたは俺のことどんな人間だと思ってんの？」



「愛する娘に付きまとう害虫ってところか？」

親バカめ。このオッサンは心底俺の事を嫌いらしいな。まあ俺も嫌いだから別にいいか。

「オッサン。もし仮にだがそんな事態が起ころうともあんたのことなんてお義父さん何て呼ばねえから安心しろ。あんたはオッサンで充分だ」

「上等だクソガキ。お前にお義父さん何て呼ばれたらアレルギーで死んじまうぜ。それと俺の可愛い娘はお前みたいなおが屑野郎にやらん」

近衛流……この糞オッサンは俺に向けて中指を。俺はお礼と言わんばかりに親指を下に向けてやった。

その一連の行動を見てお互いに「ふん」と嘆息。

「はっきり言っておくが俺はお前が大嫌いだ」

「心配するな、俺もお前のことが大嫌いだ」

お互いがお互い、険悪なムードを作っていく、それはまさに一触即発のムードになってきたその時。

「あら、楽しそうな事してるわね、私も混ぜてくれない？」

なんていう悪魔も真っ青な死神のごとき声が聞こえた。

そちらに痛む首を向けると朝と同じ格好の涼月がそこにいた。

「流、下がっていいわよ」

「かしこまりました、奏お嬢様」

俺への態度とは180度真逆の態度で去っていくオッサン、く……大人の余裕ってやつか。

「悪い人では無いんだけどね……娘の事になるとちよつと……」

「ちよつと所じゃねえだろ。あれは重度の親バカだ。はぁ……近衛も可哀想に」

さっきも軽く発狂しながら近衛に抱き付いてたし。多分、てかかなりウザい。

「でも流ってジローくんと似てるわね」

「………嘘だろ」

あんな奴と似てるなんて言われても嬉しくねえし似てるどころ何て眼鏡かけてるぐらいだろ。

「似てるわよ。家族を大切にするとところとか。まあ流にとってはスバルは『たった一人の』大切な娘だから、過保護になるのも無理はないかもしれないけど」

「たった一人って……？」

「スバルの母親はあの子が五歳の時、無くなったわ。元々病弱で、スバルを産んだのがきっかけで……」

そうか……だから近衛には兄弟が居ないから執事を。

「思えばスバルが私の執事になることに拘り始めたのもその時期だったわ。私の家の人たちも再婚を流に進めたんだけどスバルが泣きながら反対したのよ。きつと怖かったのよね……」

それを聞くと、近衛の一言が頭の中で響いた。

——ボクは、どうしてもお嬢様の執事でいなくちゃいけないんだ。

始めて合ったその時、確かに近衛はこう言っていた。

だからあいつはあんなに必死になって……。

「でも——現実には甘くなかったわ」

涼月は顔を少し、歪めた。

「スバルはレジャーランドの一件で刃物恐怖症になった。それ以来、あの娘の中では執事でいなくちゃいけないって気持ちとこんな自分が執事でいいのか……ってね」

母親を護るか主を護るか。

……ジレンマってやつだな。

「私もなんとか刃物恐怖症が治らないかって思って色々試したんだ

けど全然だめでね。何回、スバルに執事を止めなさいって言いそうになったか分からない」

でもね。と彼女は言う。

——今は言わなくてよかったって思ってる。

と。

「あなたとスバルが出逢った時、これ以上のチャンスは無いと思っ  
たわ。同じような恐怖症があるもの同士、何とかならないかって」

「んで……俺に手伝わせたわけか」

「そうよ。でも、やっぱりうまくいかないわね。『他の部分』が変  
わったけど刃物についてはてんで変わらなかったわ。だからね、少  
し趣向を変えてみたの」

「それが……今回の誘拐事件か」

「ヒヤハハハッ！アア。正解ダヨ、ジローケン」と再び、あのオオ  
カミの声がした。

声がした方向に顔を向けると涼月が口に小さな機械を当てて話して  
やがった。

ああ、やっぱりこのイラつく声はこの女の仕業だったか。

どうせマスクにスピーカーと無線でも仕込んでて涼月はあの部屋で  
通信でもしてたんだろう。

オオカミマスクの正体を悟らせない為に。

「案の定、計画は成功。完全に、とまではいかないけど今までの事を考えたら大きな一歩だわ」

「……おまけに、お前と近衛の仲もいい具合に修復できた」

俺が少し嫌味っぽく言うと、涼月はそこの男なら簡単に落とせてしまえるような笑みをこちらに向けた。

「そうね。あなたたちには……本当に感謝してるわ。あなたたちのお陰で、スバルは私の執事を止めなくて済んだんだから」

そしてまた、ありがとうと上品な仕草でお辞儀をした。

……………くそ。

俺はずっとコイツの手のひらの上で踊らされていた訳か……なんか腹が立つ。言ってくればこっちだって協力したのにさ。

「しかしお前も近衛の親父の娘と言えねえな。お前も近衛の事になると回りが見えなくなっちまいそうだ」

当て付けのつもりでトゲトゲしくボヤいた。

なのに、涼月は口にてを当ててクスクスと笑っていた。

「ええ、そうね。だって私はスバルの事を愛しているから」

……………は？

思わず、声に出すことすら忘れる。

アイシテル？好きとか、大好きとかじゃなく？

愛してる。

それは間違いなく、恋愛対象に見ているような……。

「本当よ、私の初恋はスバルなの」

「……………」

……いや。

なに言ってるんだか、このオオカミ女は。

そんな嘘に騙されるわけがないだろう？ははっ！俺を見くびるなよ？

「そうだ。せっかくだから夕食でも食べていきなさい。準備ができたら呼びに来させるから」

言って涼月は俺の返答も聞かずつかつかとドアへと歩いていった。

そしてドアの前でくるり、とこちらを向き

「あ、今日の夕食は面白いものが見られるわよ？それと……あなたのお陰でスバルは私の執事を続けられるようになった。そして何より」

私の執事の友達になってくれてありがとう。

にこやかに微笑んで、涼月は部屋から出ていった。

……くっそ……反則だ。

こんなのせこすぎる。

もう今の笑みだけでも俺は鼻血が出そうだよ。

心臓の音が手を当てるまでもなく聞こえる。

ああもう、本当何なんだ。あんな可愛い笑顔見せられたらもう……  
……。

何て一人で終わることのないやり取りを繰り返しているとコンコンと扉が鳴った。

「入るぞ、ジロー」

聞こえたのは控えめなアルトボイス。

近衛だ。

例の執事の正装、つまりはあのオッサンと同じ格好をしている。はあ……あのオッサンも性格に難があるとはいえかつこよかったし……ってあれ？所々に付いてる赤いシミってなんだ？

「ああ、これか？大丈夫。ジローの仇は討ったぞ」

つまりは——いや、言うまい。

「あと、『お父さんなんて大っ嫌い!』って面と向かって言ってたから」

「……………」

うん。いやね? 清々しいんだけど……オッサンの事が少し心配になってきた。

「そんなことよりだ。ジロー、身体は?」

「ん? ああ、それこそ慣れてるからな、明後日辺りには全快だ」

おお、近衛が心配に来てくれるなんて。やっぱり優しいな。

「そうかそうか。良かったよ、これならジローも約束を守れるな」

近衛は爽やかな笑みを顔に張り付けそう言った。

「や、約束?」

「ああ、『後で何でも言うこと聞く』って、言ったよな」

……………。

なんだこれ。

なにかは分からないがとんでもない危機が迫ってるような気が………。



「あは、あはは……。そ、そんなマジになるなよ近衛。あれは軽い口約束でだな……」

「近衛？なにいつてるんだジロー。お嬢様、だろう？そこを履き違えられたら困る」

冗談だよな？

何て言えるような雰囲気ではない。

大変だ。窓から脱出は——くっ。外の景色的に結構高いな。そして何より目がマジです。

うわぁ……。思い返せばとんでもない死亡フラグを立てたような……。！

「か、かしこまりました、お嬢様……」

気付けば俺は従っていた。

「よし。じゃあこれでジローはボクに絶対服従な訳だな？」

「え？……ちょ」

「訳だな？」

「……イエス……マム」

確かに、絶対服従だよこれ。

「と言うことは多少の苦悶にも耐えられる覚悟があるわけだな？」

無いです。

言えるなら、そう言いたかった。

「無いのか？有るのか？はっきりしろ」

「有ります！今の俺なら何でも耐えられます  
！」

だってこれ、今ここで死ぬのと拷問のごとき攻撃どっちがいい？つ  
て言われてるようなもんだろ？そう思えば役得役得。……はあ。

「じゃあ、行くぞ？」

「はっはい！」

何が来る？回し蹴りか？間接技か？投げ技か？

しかし、次に俺の体を襲った感覚は不思議なものだった。

ギュウ。

近衛が俺に、抱きついてきたのだ。

「こ、近衛？」

「こ、怖かったんだぞ」

「……………悪い」

怖かった。

だよな……刃物を無理矢理握ったりしたんだもんな。

でもさ。

「…………泣くなよ、近衛」

「お前はあのとき涼月を守ったじゃねえか。お前はやったんだよ。もう『欠陥品』なんかじゃない。まだ完璧じゃないかも知れないが……時間をかければきっと克服出来るさ」

しかし。

何故か近衛は顔をあげこちらを見た。

その目は先程のような悲しみを称えてはなく、少し、起こっているようにみえた。

「違う」

「…………え？」

違う？何が違うんだ？怖かったもの？刃物じゃねえの？

「違う、違う違う違うっ！ボクが怖かったのはそんなのじゃない！ボクが怖かったのは——」

——ジローがボクの前からいなくなったから。

ぼろぼろと大粒の涙を流しながら近衛はそう言った。

「あのとき……プールサイドで目を覚ましたときボクがどんな気持ちだったか分かるか？ジローがたった一人でお嬢様を助けに行ってたて分かったとき……ボクが……どんな気持ちだったか……！」

「……………」

「怖かった。凄く怖かった。もう会えなくなるなんて考えたら胸が張り裂けそうなほど辛かった。初めてできた友達が……あのナイフにっ……！」

「……………」

「そ、そう考えたら怖くて……怖くてっ！」

「……ごめん、近衛」

「……ばっ、バカ。あ、謝ったって……許してやらないんだぞ」

甘い香りの漂う髪。

どこまでも弱々しい、ただの強がり。

そう、あんな強いスバル様なんてどこにもいない。

ここにいるのはただの女の子だった。

「ばか、ばかばかばかあ……」

弱くて、力をいれて抱き締めてしまえばすぐにでも崩れそうな、そんな女の子。

だから、思う。

俺は、もっと強くならなきゃ。

もっともっともっと。

女の子一人守れるくらい、守ってやるって言ってやれるくらい強い男に——。

「……………あ、」

そうか。

やっと、ようやくわかったよ、親父。

アンタの残してくれた、あの言葉、

スタンド・バイ・ミー。

私のそばにいて欲しい。

そうやって、そんなことを言えるくらい強い男に。

オレが守ってやるからって言えるような——。

「ジロー……」

彼女が、静かに顔をあげる。

涙に濡れた顔。

僅かに潤んだ瞳。

互いの唇がふれそうなほど近い距離。

そんな状態で俺は――。

「ふおっ!？」

鼻血を吹いた。

今の今まで我慢していた、赤い本流がついに流れ出た。

「だっ! 大丈夫かジロー! だから聞いたんだ。多少の苦痛にも耐えられるかって」

慌てて体を起こし、ティッシュを俺にくれる近衛。

……いや、チキンとか言うなって。我慢してたんですよ? 俺も。

でもさすがに限界が。

「と、ところでだ。そろそろ夕食の時間だろう。行くぞ」

「えっ? って待てよもうちょい待ってくれ! 鼻血が! 鼻血が!」

「うるさいっ！こい！」

俺はティッシュで鼻を押さえつつ近衛に腕を掴まれ連れていかれた。



「「頂きます」」

この言葉の後に、カチャカチャと陶器とフォークがぶつかる音が聞こえる。

今は夕食。あの後近衛に連れられ食堂らしき場所に来ていた。

そして普通にご飯を食べさせてもらい、普通に着々と過ぎていった。

ただひとつ、無視できないものをおいて。

「な、なあ涼月」

「なあに？ジロー君？」

涼月が上品な仕草でスプーンを置き、こちらを向く。

「いや、さっきからずっと突っ込もうか突っ込まないか悩んでたんだが、あれなに？」

俺は静かに指を指す。

その先には、布を被せられた大きな長方形の何かが置かれていて、なかでは何かがモゾモゾと動いていた。

「ああ、あれの事？少しね、迷いこんじゃったのよ」

迷いこんだ？ああ、犬とかか？それならあれは檻なんだな。

「ええ、迷いこんだのよ——ゴリラが」

犬、どころではなかった。

「なあ此処日本だよな！？」

思わず席をたち、声を荒げる。

「大丈夫よ安心して。迷いこんだのは私たちの知ってるゴリラだから」

その言葉に、違和感を覚える。

「俺たちの知ってる？」

少なくとも俺は、今年中に動物園に言ったこともないしゴリラなんて見た覚えもない。

じゃあ、

「一体何が入ってるんだソレ？」



「いいわ、見せてあげる。スバル」

涼月は近衛に指示をだし、近衛はその檻に近付き、上に被さっていた布を取っ払った。

表れたのは、鋼鉄で出来たと思われる堅牢な檻。

表れたのは、筋肉がほどよくついた腕。

表れたのは、『赤い』毛――いや、髪の毛。

布が全て取り払われたとき、そこに居たのはゴリラこと、我がFクラス代表坂本雄二だった。

――しかもパンツ一丁で。

「ってなんでええええ!?!」

「きゃああああ、変態がいるわ、助けてー。裸にしてくださいってねだってる変態がここにいるわー(棒読み)」

「ってふざけんじゃねえええ!!」

ゴリラが、吼えた。

「テメエどういうつもりだ!急に首になんか押し当てて気絶させられるとかビックリしたじゃねえか!」

ジャラジャラと、手首についた手錠を鳴らしながら、雄二は言った。

「あら？こっちの後を付けて来たのはどこのどいつだったかしら？」

ソレを聞くと雄二は苦虫を噛み潰したような顔をした。

てかこいつあんな事いっという跡付けて来やがったのか……。

「そして今ここは私の家よ。そして権力もあるし、あなたの生殺与奪権は私にある。この意味わかる？」

涼月が、涼月らしい笑みを浮かべる。

「ぐっ……。た、確かに悪かったと思ってる！が、がだ！こちらにも交渉手段はある！」

裸で手錠と言う何とも威厳の欠片もない姿で雄二がそう叫ぶ。

交渉手段、それはつまり――。

「スバルが女の子ってこと？」

「ああ、そうだ」

雄二が少しぎこちない笑みを浮かべる。

「……何が望み？」

「まずこの格好とこの手錠とこの檻を何とかしろ！」

「いいわ。スバル、お願い」

いつのまにか服まで用意していた近衛が、扉を開けて手錠を外す。

「ふう。ったく。本当にお前涼月なのかよ」

あ、俺も最初そう思った。

「ソレ以外に誰がいるって言うの？じゃあ早速だけど私からも交渉よ——スバルの権については黙っていて」

「……ほう。で、条件は？」

「ふふ。条件なんて大したものじゃないけど……」

そこまでいって彼女はケータイを取り出して、

「黙っていてくれなかったら翔子ちゃんに襲われたって言うわよ？」

なんて。

そこでもう一度雄二の方を見ると

「ごめんなさい」

面白いぐらい簡単に土下座をしていた。

……こいつも女が絡むと弱いなあ……。

「じゃあ交渉成立ね。これからも宜しく。代表さま？」

「あ、ああ……。これからも宜しく」

ここでまた、思うんだ。

女の子って……怖え。

**バカとチキンと完全決着（後書き）**

はあ……三分の二が原作。

どうでしょうこの著作権ギリギリライン。

え？アウト？んなはずが。

……すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9548v/>

---

バカとチキンと召喚獣

2011年12月21日12時56分発行